

# 道類噺

第三卷年六十第六輯

昭和二年十月廿五日第一種郵便物認可  
昭和三年十二月二十八日印刷  
發行



田島國魚

三友堂

附錄 新版關西俳優名鑑

新羊鑪

阪神沿線 於 甲 子 園

# 甲子園芝居博覽會

當六朋元日  
至六日  
午前九時  
午後二時

演技館於芝居博覽會



## 博覽會內容

本館、動物館、水族館  
機械館、歷史館、參考館  
美術館、植物館、キネマ館、演技館

入場料 (大人參拾錢 團體割引)  
(小人拾五錢 二十名以上)

主 後 催 援 甲 子 園 芝 居 博 覽 會  
阪 神 電 氣 鐵 道 株 式 會 社

小 道 具 ・ 小 裂  
貸 衣 裳

素人演藝會  
宴會の催物

春秋温習會  
婚禮の衣裳

松竹衣裳部

本店

大阪市南區久左衛門町八番地

東京支店

總電話 南一七八八番  
東京市淺草區龜木町十五番地  
歸電話 淺草 五五九九番



其他一般の衣裳を多少に拘らず御利用下さい  
御來客の御相談に應じ御便利よく取計ます

會旗優勝旗

神戸市楠社西門

劇場幕幟

梅原商店

緞帳フラー

電話元町一六一五番



大阪市南區日本橋南詰

新庄屋

電話南二七三番

旗染各幕劇  
附物國の場  
屬一々ほ綴  
品式旗り帳

大阪市南區道頓堀黒門筋南

登記商號

今津屋

電話南八一四七番  
ミナハヒヤクシナイ  
ヤスイシナ

松竹合名社  
各劇場用達  
劇場用提燈  
傘販賣

# 初詣

新年の恵方は

檜原神宮

(正月三ケ日  
延壽箸授與)

春日神社 生駒聖天

枚岡神社 石切神社

瓢箪山稻荷 信貴山

(生駒にて信貴  
電車にのりかへ)

奈良公園

七福神めぐり

(正月十五日まで  
福運引あり)

▽案内書御報贈呈

## 大軌電車

番 三〇五五 南 電  
四〇五五



株式會社 千傳社

本社 大阪市南區高津一番町七十番地

出張所 神戸市下山手通九丁目

千傳社神戸出張所

電話 町一三九三

業 業 目 科

航空宣傳部 (一等飛行士 鶴岡文次郎)	大市電車 內廣告一手取扱	神戶市電車 柱廣告一手取扱	特許 繪式印刷	浴場廣告 一手取扱	男女廣告 一手取扱	各種行樂隊 調製	和洋活動寫真 廣告取扱	劇場活動寫真 廣告取扱	飛行機 宣傳	自來水 宣傳	提燈行列 用人夫請負	廣告
美術看板 立看	珞瑯板 看	珞瑯板 看	裝飾圖案 設計	博覽會 裝飾	花電氣 電氣	電氣 電氣	電氣 電氣	電氣 電氣	電氣 電氣	電氣 電氣	電氣 電氣	電氣 電氣
屋根看 沿線看 看板	屋根看 沿線看 看板	屋根看 沿線看 看板	印刷圖案 文案起草	展覽會裝飾 展覽會裝飾	電氣 電氣	電氣 電氣	電氣 電氣	電氣 電氣	電氣 電氣	電氣 電氣	電氣 電氣	電氣 電氣

辰 年 の 惠 方 ま る り

○あびこ厄除觀音

(矢田驛ヨリ二十丁)

西國五番札所

○葛井寺厄除觀音

(藤井寺驛ヨリ一丁)

○道明寺天滿宮

(道明寺驛ヨリ一丁)

○譽田八幡宮

(譽田停留場ヨリ一丁)

日本三大不動ノ一

○瀧谷不動

(瀧谷不動驛ヨリ八丁)

○歴代皇陵巡拜

(案内書進呈)

大 鐵 電 車

# スキナ脂取紙

あぶら

品質の優良は萬人の愛用！

お化粧直しに！ アレ止めに！

初春興行の人気より

より以上の大人氣のスキナが

皆様方の御使用を只管に

両手をついて待つて居ります

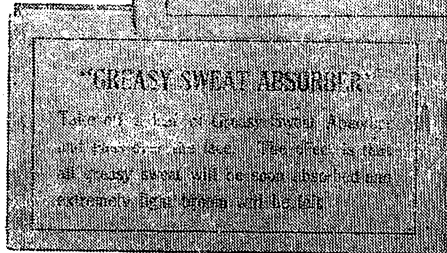
道頓堀の各座、及び各地化粧品店に販賣せり

お買求めの節は「スキナ」と御指定を乞ふ



現品縮圖

スキナあぶら取紙



本 舖  
 スキナ 屋 號  
 中 田 大  
 店 商 阪



名實共に日本一

更科のそばと天婦ら

道頓堀浪花座東

電南四九九四番

理想實現大衆食堂

# 大阪趣味と川柳

◇ 大阪趣味と川柳のコーラスを知るには是非川柳誌「番傘」をお読み下さい。

◇ 「番傘」は軽快な川柳家の雑文が面白いので川柳家以外にも喜ばれてゐます。

◇ 「番傘」は一冊三十銭（見本も同断）半年分一圓七十銭。

大阪市此花區野田驛前

番傘川柳社

颯爽たる

初春のお姿を

まづ優秀の技術を誇る  
當館で御撮影下さい

高津郵便局東

賀正

山崎寫真館

電話南四二四四番

謹賀新年

都築文男

神戸市兵庫門口町  
二〇三ノ九

謹賀新年

中田正造

堺市外湊八

謹賀新年

武村新

大阪市南區  
笠屋町四八

謹賀新年

和歌浦糸子

大阪市西成區  
東皿池町八一六



謹賀新年

志賀廼家淡海

京都市三條通寺町  
西入電話中六四七二番

謹賀新年

曾我廼家龜鶴

京都市外  
稻荷上横繩八

謹賀新年

山口俊雄

小笠原茂夫

名古屋御園座出勤

謹賀新年

藤山秋美

大阪市西區西長堀  
南通一丁目五ノ二

謹賀新年

曾我廼家太郎

京都市下京區佛具屋町  
花屋町上ル

謹賀新年

松竹樂劇部女生

一同

松竹座

謹賀新年

三好榮子

福岡君子

神戸市北野町三丁目八番邸

謹賀新年

滿喜國春

森田肇

堀内茂

新潮座

名古屋御園座出勤

# 年 新 賀 謹

## 座 中

嵐中實	市尾市市市尾實市市市市中市中林實中中市中市片中林中
村川	川上川川上川川川川村川村村川村岡村村
巖	卯箱齊卯右鰕成八福鴈成當政長鴈
扇延	市蕙登五十延蕙左市蕙市魁太敏百萬之鴈三成之治三福治
笑雀若	藏郎女羅郎郎郎平次昇藏郎郎車郎夫藏諱助扇藏郎笑助郎郎助郎

# 年 新 賀 謹

## 座 角

座	術	藝	派	一	織	小		
水	山佐金西	大	宮根青田	正	當る辰歲初春興行	米東	加和白高	小
谷	本藤子條	東	島本山邊	邦		津	藤歌崎	織
八	か		啓圭若			左愛	松菊	桂
重	ほ政龍靜	鬼	夫淳男男	宏		喜	精新次	一
子	る子子子	城				子子	一三郎亘	郎

年 新 賀 謹

樂

武高荒御齋井毛桃藤若花都都水大桃野 都

天

濱尾門田上利山岡宮山 島木山木澤 築

陵 幾 三登 吉  
誠啓 三研 里英一正一 英 文  
太 三 千喜 之

地

新郎一輔郎郎二雄次路夫男男夫泰助一 男

年 新 賀 謹

浪

劇 國 新

花

座 一 郎 二 正 田 澤

座



# 謹賀新年

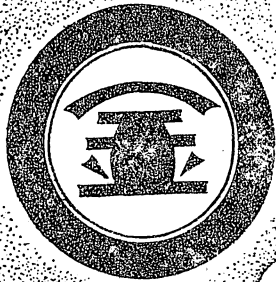
神戶八千代座

片岡 東壽 我童  
 中村 福霞 三郎  
 尾上 延卯 太助  
 實中 川村 助郎  
 中實 延卯 助郎  
 片岡 我村 久之  
 淺尾 關久 三郎  
 片岡 義と 三郎  
 片岡 義と 三郎  
 實川 松右 文次  
 市川 右田 三郎  
 市川 右田 三郎  
 實川 延田 三郎  
 嵐川 延田 三郎  
 淺尾 橘大 三郎  
 市川 右團 次郎

# 謹賀新年

辨天座

鶴岡 富士	淡海	天十	三白	一太	か多	源樂	辨慶	龜鶴
東葉 靜士								
若川 絹子								
衣川 子								
如月 子								



瑞兆

新味

現  
わ  
る

丸  
吉  
醬  
油

丸吉小豆島  
丸吉醬油株式會社

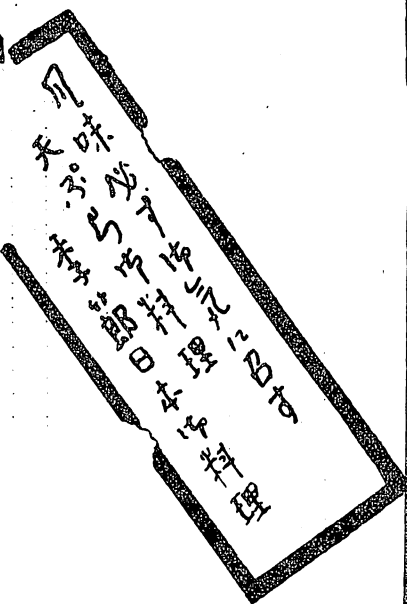


御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を



# 吉又屋食堂



道頓堀戎ばし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町  
京都支店 木屋町ドンブリ橋



子やく

あつりて

五人方

道頓堀 (新年號) 第三年・第十六輯

眞寫繪口

△「土屋主税」藤治郎の土屋主税◇「原田甲斐」澤田正二郎の原田甲斐「勝者敗者」澤田正二郎の柴田、山路千枝子の光子◇「土屋主税」中村魁車の大富源吾「市川市藏の晋其角」碁盤大平◇「土屋主税」中村福助の大石内藏之助◇「道行初音の旅路」林長三郎の狐忠信、中村扇雀の轡御前◇「土屋主税」中村福助の侍女おその◇「椿姫」水谷八重子のマルゲリット◇「戀愛測器」淡海の醫者高野、樂太の老婆おしも

昭和三年の春を迎えて..... 白井松次郎 (三)

赤穂 盤太 實録 (芝居物語)..... 島崎俊雄 (四)

土屋主 屋主 税記 (芝居物語)..... 永田美代 (三)

助六 備後 師 (歌詞)..... 大橋照夫 (三)

道行初音 組助 旅路 (芝居小説)..... 河竹繁俊 (三)

道行初音 旅路に就いて..... 高谷繁次 (三)

成駒家 物言..... 日比繁次郎 (四)

鷹治郎 一年..... 山上貞一郎 (四)

玩辭樓 漫筆..... 中村鷹治郎 (四)

小者 棍 丸 (芝居ものがたり)..... しろべいじ (四)

勝田 者 敗者 (芝居物語)..... 福隅一孝 (四)

原田 甲斐 就いて (ドラマストリー)..... 澤田正二郎 (五)

「光は暗から」に就いて..... 加藤秀雄 (五)

角座の「椿姫」上演に就いて..... 長谷部正憲 (五)

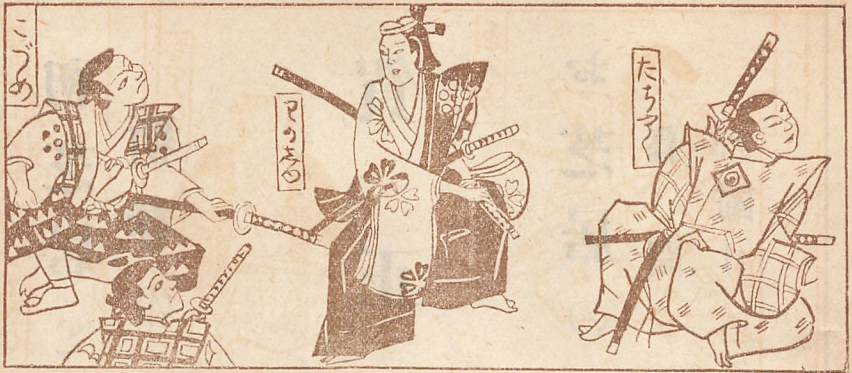
「椿姫」内幕話..... 武田正憲 (五)

椿姫の始りの梗概..... 志賀廻家淡海 (六)

酒の始りの梗概..... 志賀廻家淡海 (六)

我儘古今帳..... 志賀廻家淡海 (六)





附録 新版關西俳優名鑑

(編輯部作成)

青年俳優の優隨筆	あ	村福萬助	(八七)
俳公失策の理合せ	い	川村	(八八)
本當にあつた話	ろ	市川右衛門	(八九)
滿洲へ行った経験したチャンス	は	市川右衛門	(九〇)
顔見世の経験したチャンス	に	市川右衛門	(九一)
筆隨筆	の	市川右衛門	(九二)

淋しき答辨	あ	川口尚輝	(七五)
湯氣の劇評	い	森田信茂	(七六)
昭和時代の大眾演劇?	ろ	徳田純宏	(七七)
芝居漫筆	は	徳田純宏	(七八)
芝居漫筆	に	徳田純宏	(七九)

初居の春(俳句)	あ	川尻清潭	(七六)
喫煙の室(短歌)	い	高木橋	(七七)
歌の舞臺効果の希望	ろ	高木橋	(七八)
歌の舞臺効果の希望	は	高木橋	(七九)

第五回川柳座句會	あ	三浦お一	(七五)
みやび會(新年たつの俳句)	い	福村正治	(七六)
讀者俱樂部	ろ	福村正治	(七七)
讀者俱樂部	は	福村正治	(七八)

道頓堀行進曲(上演脚本)

中日井泰孝(一〇〇)  
日比繁次郎作歌

中座初春興行配役	あ	冥土座正月興行本極り	(八五)
浪花初春興行配役	い	成駒家と高島屋	(八六)
角座初春興行配役	ろ	成駒家と高島屋	(八七)
辨天座淡海劇配役	は	成駒家と高島屋	(八八)
表紙:新年風俗畫	に	明治二十五年辰年の道頓堀	(八九)
挿畫カット	の	明治二十五年辰年の道頓堀	(九〇)

大塚克三

初芝居と  
新春のお献立！

賀正



梅圓

お芝居の

幕間

お歸りには

お芝居での御食  
事は食堂にて  
おかへりには白  
鷹にて一寸一ぶ  
く江戸すしを

中座食堂

本店  
大左衛門橋北一丁  
電話南六二二七番





「税主屋土」 座中 税主屋土の郎治鷹村中





浪花座「原田甲斐」と「勝者敗者」

妻甲田原の郎二正田澤

田柴の郎二正田澤  
子光の子枝千路山





中座「土屋主税」

吾源高大の車魁村中  
角其晋の藏市川市





「記平大盤碁」 座中 助之藏内石大の郎治鷹村中

# 西宮酒造株式會社

吟醸額參萬石の中  
から特に精選した  
萬人向の銘酒

大石内藏之助は

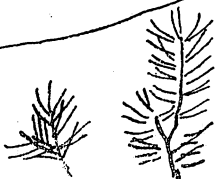


## 日本盛

を好みました



## 男山



## 丹頂鶴



大 阪 市 北 區 天 神 橋 筋 二 丁 目  
會 社 名 巴 屋 商 店

恭賀新年

會席

御料理

三食辨當

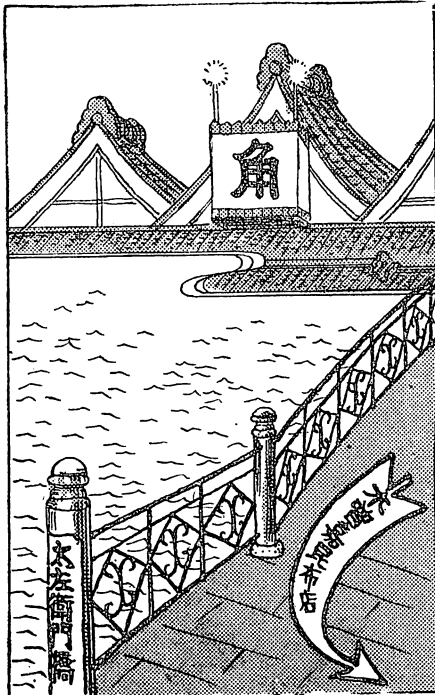
仕出し

南區新戎橋北詰

文化食堂

電本四七八三番

賀正



大阪宗右衛門町太左衛門橋北詰

藻鹽草  
有味草  
細工昆布  
製造販賣

半木曾嘉商店

電話南五四三一番  
振替大阪三八五八四番



世界兒童親善會主催

弊店は米國兒童親善會

より贈物を受けてこれの  
分配を一任せられました

弊店は日本兒童親善會

より返禮として大阪府市  
を代表したる市松人形を  
製造いたしました。

弊店の答禮人形にお供

して渡米したお供人形は  
文部省御賞上げの榮を賜  
はりました。

(カタログ進呈)



(吉佐濱中)

大阪南區順慶町四丁目御堂筋 中佐總本店

中 濱 佐 吉

電話場三九〇・一三九・二八三番

# 初 む ま り

初春は恭しく

◎伏見桃山御陵参拜

おかへりには乃木神社  
乗合自動車の便あり

(京阪電車  
伏見桃山下車東八丁)

開運厄除に

◎官幣  
大社 石清水八幡宮へ

男山ケーブルで

(京阪電車八幡下車)

商賣繁昌の祈願に

◎官幣  
大社 ふしみ稻荷神社へ

健脚家はお山めぐりに

(京阪電車稻荷前下車)

正月五日は威勢のよい

◎初あがた詣で

(京阪電車宇治下車)

厄年のお守りに

◎初立木詣り

(京阪電車濱大津まで  
湖南汽船連絡南郷下船)

新年はめでたい

◎京都七福神めぐり

鉄屋町二條(布袋尊)荒神口(惠美須神)寺町(革堂壽老人)  
松ヶ崎(大黒天)出町(辨財天)廣小路(福祿壽)  
(毘沙門天)

初寅には

◎毘沙門天詣り

(京津支線山科下車)

豊さか昇る

◎比叡山初日拜

(京阪電車四條下車、市電出町御にて叡鐵ケーブル  
に乗車 大阪より約二時間(絶頂まで)餘の行程)

大阪京郡間

最新

ローマンス・カー大増發!!

ホコくと暖かく乗心地は随一

## 京阪電車

中座「道行初音の旅路」と「土屋主税」



林長三郎の狐忠信・中村扇の辯御前  
中村福助の侍女おその





「姫 椿」 座角 トツリゲルマの子重八谷水





「器量測愛戀」 座天辨 もしお婆老の太樂・野高者醫の海淡

昭和三年新春封切大雄篇

賀 正



衣笠貞之助監督作品

林長二郎主演

オールスターキヤスト

辨天小僧

長二郎十八番女装大車輪猛闘劇!

松竹キネマ京都スタジオ才超特作映畫



阪東妻三郎主演

オールスターキヤスト

原作脚色 伍東宏郎  
監督 安田憲邦

鼠小僧次郎吉

阪妻久方振りの三尺物大活躍篇

阪東妻三郎プロダクション特作映畫

松竹キネマ株式會社

誌 雜 · 究 研 劇 演 · 刊 月

# 堀 頓 道

輯 六 十 第 · 年 三 第



稅 主 屋 土 幕 中 (行 興 春 初 座 中)

# 昭和三年の春を迎へて

白井松次郎

まづ、明けておめでたう——。殊に本年は御諒闇あけの昭和三たびの初春、新時代をことほぐ聲は上下に滿ちてほんとうに聖代の有難さが沁々と感じられます。

春劈頭、何か一言申上けたいとは存じますが、とりとめた感想とでもありません。「たゞ々々演劇進化」のため、微力乍ら猷身的に努力したいとのみ念じてゐます。

だんく〜と時代も進み、一般社會の生活狀態もますます深刻に、しかも緊張の度を日に日に加えられつゝ、あることは私共の痛切に體驗してゐる所であります。

世は不景氣だといひます。だが不景氣だからと云つて誰も彼もが蒼い顔をして腕組みをされた日には一體この社會はどうなるでせう。しかし不景氣である事實は現代の社會人として否定出来ない事です。だつたらどうだ！といふそこに一つのデレンマにおち入ります。私は『不景氣一掃』といふ様な大それた考へは持ち合せません。たゞ私共のつとめはこの深刻な緊張しきつた社會へ提供すべき芝居を考へねばならないことです。

『活動』の結果は『休止』の狀態を要求します、ウンと働いて汗みどろになつた後、ホツと一息吐く憩ひこそ



何といふ快い「幸福感」でせう。心理的に申せば、これを「緊張」に對する『弛緩』の状態です。

かうした一つの理論からつきつめて考へても、現代の芝居には何か要求さるべきかゞすぐ首肯されるのです。とりも直さずこれからの芝居は『明るさ』と『笑』が必要ですが、『笑』と云つても、横つ腹や足の裏をこれでもかこれでもかどくすぐられる様な強要的なものはどうも困ります、もつと理由として必然的でなければなりません。見てゐて本當に心の紐のほぐれたのやひきしまつた結び目を軽く自然に解いてくれるものをいふのです。

さうか、一層強烈な刺激を求めます。さなきだに深刻にさび切つた精神状態が、紫光線の強いアートを浴びる様な刺激を受ける、その後へ来るものは、寒中の冷水摩擦（鳥渡餘りに卑近な引例ですが）の結果却つてホコ／＼と温まる様に、弛緩の量が大きくなりはしないでせうか。

つまり『これからの芝居』はこの二つのものにつきてせう。思ひ切つて『笑』の多い明るいものが、強烈な刺激的なものか――。

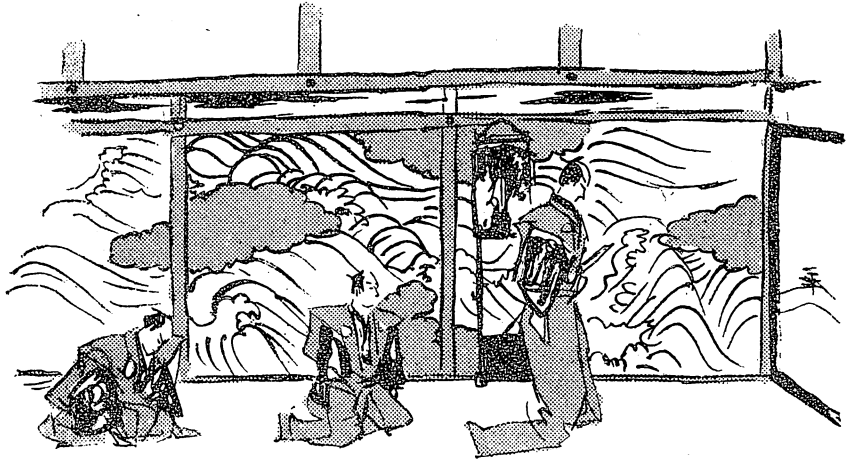
私が、昭和新時代に送る演劇陣の戦法はこの虎の巻から先づ實現させて行きたいと思つてゐます。

×

以上、つまらぬ長談義に失しましたが、さてこの初春にのぞんで皆様に一つお約束したいことがございます。それは一昨年鳥有に歸した郷土藝術の人形淨瑠璃の殿堂、文樂座の再建であります。あの三百年に近い古い歴史を持つてゐる文樂座をこのまゝ、大阪の地から消してしまふことは、大阪に住み大阪を愛する者として忍びがたいことの最大な一つです。私は近く同座再建の具體案を發表する機會のあることを誓つておきます。

芝居 赤穂 實錄

島崎俊雄



増上寺の客殿宿坊は襖の張替へ壁の塗りかへに大騒ぎである。大工の熊五郎に傳次、左官の長吉、經師屋の九兵衛は額に汗をためて働いてゐる。院使方の宿坊が急に普譜をしたのを見て、浅野家でも驚いて普譜を仕出した。晝夜兼行の急拵へ五十人の處は百人、それに蠟燭の入用を考へても大變な物入である。今日は高家方の見分の日である。

『見分の御入り』

と呼ぶ聲がする。磯貝十郎左衛門と武林唯七は内匠頭の君命で營繕掛りを勤めてゐる。二人が出迎へる處へ、吉良上野介は清水團右衛門を従へて、浅野内匠頭は片岡源吾右衛門に太刀を持たせ、伊達左京亮は内藤權大夫を従へ

て出て来る。

上野介は頻りに左京亮の受持ちである院使方の宿坊の普譜の上出来をほめる。そして浅野家の普譜を薄汚ないとなす。まづ座敷から見分と歩かうとして磯貝、武森につき當つて上野介は立腹する。襖を見ては紙の縫目に糊がたまると罵り、壁もいかぬ疊さわりも悪いと目がね越しに睨め廻す。それも金銀を惜むからだといふ。内匠頭は何分の差圖を仰ぎたいと願ふのを家來任せだといかぬといひ、内匠頭が吉良邸へ伺候したことを言ふと執事相手では解らぬ。はては手前逆上して耳が遠いことと上野介は空嘯いた。主人の心付かぬことを心付けるが家來の役目、進物贈り物に随分齷末をするなと片岡等にそ

れとなく強うる。そこへ進物臺に掛物の箱をのせて出て来て伊達家の臣權太夫を呼ぶ。權太夫は粗品ながらと上野介に差出すと、軸物なれば辭退申すといふ。去年木の下の邸で墨跡の目利きを頼れた時横合から口出しをした内匠頭のため満座で恥辱をかいた。と内匠頭にあてつける。處が山吹とあつて箱が重いので、左京殿には心がけのよい御家來が多いと恐悅の體で貰ひ受ける。そして左京亮に御料理の献立を教へる。内匠頭が聞くと魚鳥の用意あるを承知しながら佛參の歸途だから精進だといふ。片岡源吾右衛門は立腹をする主君をいざめつるも磯貝武森に料理の仕替へを急がす。その中にも御上使登城の午の刻は近づいてゐた。内匠頭は明日の事と思ふてゐたどけに驚いた。上野介は左京亮を連れて和やかに笑ひつゝ、奥へと這入つて行く。内匠頭は怒つてその後を追はふとするのを源吾右衛門が引止めた。せめて一太刀恨みを晴したいといふのを、家のかきんとならは先祖へも不幸といましめる。己の刻の太鼓が鳴る。内匠頭は慌て、供揃へを命じた。

營中松の間である。品川豊前守大澤右京太夫畠山民部少輔が素袍大紋立帽子の公家衆の拵へて控へてゐる。そこへ梶川與惣兵衛が出て来る。桂昌院様の御名代として御答への使者として心得を聞きたいといふ。間もなく上野介と左京亮が素袍大紋立帽子で出て来る。左京亮にはいろ／＼と教へる。畠山始め公

家衆は上野介を迎へる。梶川與惣兵衛は改つて上野介に聞くのを御用繁多だといふ。梶川はきつとなつて忝けなくも將軍家の御母堂桂昌院様の名代だと呼ぶと、上野介は驚いて親切に教へた。そこへ淺野内匠頭が鬘斗目麻袴で早足で出て来る。皆の風態を見て驚いて引返そうとするのを、上野介は呼び止めた。同じ役目にありながら左京亮に似ず遅參者と責めた。居並ぶ人は衣服の相違をとがめた。内匠頭は増上寺で上野介に聞いた時御能の時と同じこと、教へられたといふ。上野介はそんなことは言はない、大紋烏帽子でござるぞときめつけた。内匠頭は堪えかねた。左京亮は氣の毒に思つて召換えて來いといふ。上野介はそこ許の勤まる彼でない罵るので内匠頭は思はず刀に手をかけた。殿中でござるぞと梶川は警めた。内匠頭は氣をかねてあとへと足早やに去つた。上野介は左京亮をつれて公家衆と共に奥へ這入つた。梶川與惣兵衛はその後を見送つていつに變らぬ上野介の専横を憎んだ。内匠頭のある顔色どうか事無きやうにしたいたいものだと思案にふける。

殿中の中の口である。淺野内匠頭はばた／＼と駆けて來た。そして家來を聲高に呼んだ。源吾右衛門、十郎右衛門、唯七の三人が出て來た。大紋、烏帽子の用意を問ふた。幸ひ用意してゐたので狭箱より取出して早速と着換えにかゝる。内匠頭は重ね／＼の恨みの鬱憤、心中推量致せと泣いた。家臣の三人はこ

の上ともに勅忍をと願つた。祝言の謠が聞えて来た。御上使が登城されたのである。内匠頭はあはて、行かうとするのを、

『我君返すも御短慮をば』

源吾右衛門はいましめた。

『勅忍仕難き節は、時節と思へ』

内匠頭は言ひ切つて奥へと急いだ。片岡、磯貝、武森は額を

合せて案じた。そこには内匠頭の忘れた中啓が不吉けに落ちて

ゐた。取上げると親骨がはなれた。

三人は今更に主君の身の上を打ち案

じた

松の間の廊下には人氣がなかつた

内匠頭は今更に上野介を探し求めた

品川豊前守は結構な島臺を持つて出

て来た。大友近江守大澤右京大夫は

三寶に長柄のてうしを持つて出て来

た。内匠頭は袖乞ふばかりに今日の

用務を聞いたがいづれも上野介に遠

慮して教へてくれないで立ち去つて

行く。島山民部少輔は三寶に鬘半昆

布を乗せたのを持つて出て来た。上

野介は伊達左京亮に附添ふて間飾り



もすみ勅答の式日で響應の古實を教へてゐると聞いて内匠頭は怒つた。上野介は御機嫌者なれば實に氣の毒だと島山は同情して去つて行く。その後へ上野介が出て来た。上使の登城は迫つてゐた。内匠頭は今更に上野介にすがりついて教へを請ふたが上野介は飽くまで冷酷だつた。師範を師範と思ふならそれ相當の進物をせよと露骨に言つた。如何せば貴殿の御意にと内匠頭のすがるのを、もう遅いとむけにもけつた。御勅使のお入りと聞えて来る。どれと立上る上野介

の後より

『吉良待て……』

と振向く吉良の袴の裾を引いて

抜打ちに眉間へ切付けた。上野介

は逃げ歩いた。なほも斬らうと追

ふ内匠頭の背後より梶川與惣兵衛

が抱き止めた。内匠頭は持つた刀

を打附けて無念の齒をかみしめた

三ツ葵の紋を散した白書院であ

る。大勢の大名は素袍大紋で大騒

ぎをしてゐる。

『刃傷でござるぞ〜』

と聲々にかまびすしく聞えて来

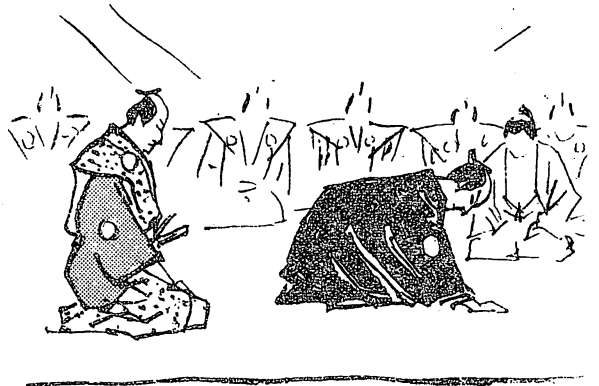
る。そこへ脇坂淡路守が出て来た

非常の時萬一君の御前へ曲者が亂入しないやうにするのが役目、徒らに立騒いでゐてどうするといふ。そこへ茶坊主關久和の肩につかまつて上野介が逃れて来る、淡路守はきつと呼び止めた。吉良を斬つたのは内匠頭と聞いて、此程よりの無禮の段々こうなうてはと思ひ入れ、

『この様な鳥帽子直垂着用の場所柄に血汐のまゝの通行は時に取つての不都合千萬』  
と上野介の横頬を中啓ではたと打つた。

田村右京大夫の門前、磯貝十郎右衛門と武林唯七が主君への今生での對面を願つて來たが、足輕達は先刻片岡源吾右衛門が田村公の許しを受けて入門されたから、あとの人達はもう駄目だといふ。さぞや本國では内藏之助を始め一藩の人々愁傷なことであらうと名残り惜しげに二人は邸内を見返りつゝ、立ち去つた。

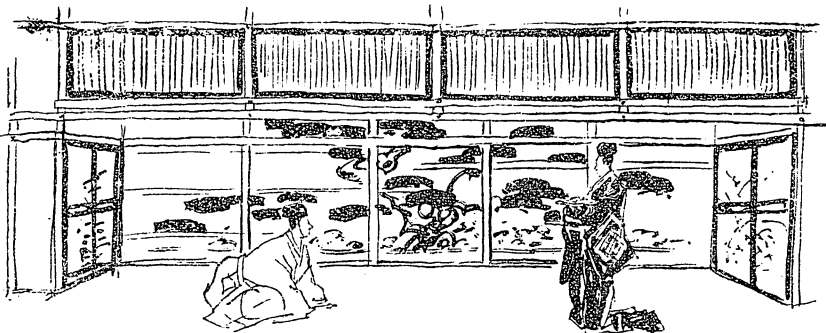
田村邸の庭前には庄田下總守が左右に多門傳八郎と磯田武太



夫を従へて、當家の主人左京大夫に内匠頭庭上に於ての切腹を命ぜられた君命を語つてゐる。そこへ内匠頭が出て来る。下田は立上つて上意を讀む。

一、今日淺野内匠頭儀吉良上野介に意趣有之由にて殿中を憚らず及傷に及び候段不屈至極に思召され是に依て切腹仰付られ候者也

内匠頭はすでに覺悟はしてゐた。相手方上野介はと聞いた。公義を大切に存じ殿中を辨へてゐたのは神妙とあつて手疵全快の上は役目元の通りと聞いて内匠頭は悲憤の涙にくれた。左京大夫はその心中さこそと推察した。切腹の用意はされた。内匠頭は白無垢の麻袴で設けの座に付いた。近習は白木の三寶に九寸五分を乗せて前へ直した。内匠頭は左京大夫に庭前を汚すことを詫びた。左京大夫は武士の情け家臣片岡源吾右衛門に對面のことを下總守に頼んだ。許された源吾右衛門は我君さまとすがりよつた。内匠頭は今更に短慮の異見を聞入れなかつたのを悪かつたといふ。何か仰せ置かる、儀が



あればと聞けば唯惜むらくは上野介を討漏ら  
せしが残念なといふのを跡々の義にお心残さ  
ず清い御最後をと片岡は胸を叩いて見せた  
鐘の音に花も哀れを感じてかはら〜と散る  
内匠頭は硯と短冊を無心した。そして源吾右  
衛門を近う招いて、  
「是れぞ淺野内匠頭が最後に残す辭世の一首  
紀念と申して内藏之助へ取らしてくりやれ」  
下總守は片岡に詠じよと命じた。  
風誘ふ花よりもまた我はなほ  
春の名残をいかにとかせん  
分匠頭は三寶を頂いた。夕べの風が櫻の花  
を散らす。九寸五分を強く握つた。武太夫が  
介借の白鞆を振りあげた。

### 中座初春興行配役一覽

一番目 赤穂實録 二幕、中幕上渡邊霞亭氏作  
玩辭樓十二曲の内 碁盤大平記 山科閑居の場  
中幕下渡邊霞亭氏作、玩辭樓十二曲の内 土  
屋主税 一幕、淨瑠璃 傀儡師 清元連中、  
二番目 大森痴雪氏作 助六後日 一幕三場、  
大切 道行初音の旅路 竹本連中、常盤津連

中、脇坂淡路守、大石内藏之助、土屋主税、  
萬屋助六(鴈治郎)淺野内匠頭長矩、侍女おそ  
の、女房お八重(前名揚卷)(福助)庄田下總  
守、傀儡師長作、狐忠信(長三郎)伊達右京亮  
所化西念(政治郎)梶川與兵三兵衛、河瀬六彌  
泉佐大盡(當之助)、武林唯七、召使おすみ(成  
笑)磯貝十郎左衛門、侍女おせん(成三郎)大  
友近江守、仕立屋江戸捨(鴈藏)村松三太夫、  
幫間一八、笠屋太兵衛(扇)藝者小成、茶店の  
娘お花(鴈之助)仲居おたま、笹屋萩野(福万  
壽)磯田武太夫(八百藏)舞妓花蝶(敏夫)召使  
お小夜(成太郎)妻およし、大高源吾、萬屋助  
右衛門(魁車)吉良上野介、西川頼母(蝦十郎)  
弟子梅吉(市郎)山村左京太夫、醫者良庵(遊  
藏)清水園右衛門、幫間勝作(市昇)大澤石京  
太夫、幫間叶八、參詣の老人(右左治)仲間角  
平、參詣人徳助(蓮平)幫間夢助、役僧源眞  
(延郎)茶道久和(卯十郎)品川豊前守(齊五郎)  
醫者玄伯、落合其月、坊主吉兵衛、鼓の藤太  
(箱登羅)母千壽、繼母お茂(薙女)多門傳八郎  
大文字屋庄兵衛(卯三郎)畠山民部少輔、晋其  
角(市藏)下男岡平(實は高村逸平太(延若)大  
石主税、女房お喜美(扇雀)片岡源五右衛門  
(巖笑)



春の居芝

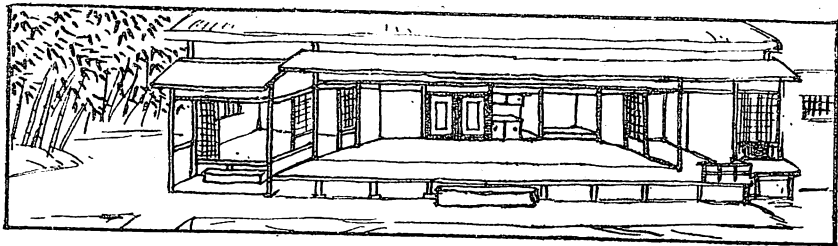
川尻清潭

初やぐら一番 二番 三番 叟  
ちら／＼と雪の初日や松の内  
初暦よき日に開けて日延べ哉  
荒事のはじまり見たり飾海老  
初曾我や鶴の羽をのす傳九郎  
二番日は廓の狂言（きやうげん）や松飾り  
所作事や羽根の禿（かぶ）に羽根は無く  
羽子板の飾れる数や芝居茶屋  
獅子舞や通り神樂の芝居町  
初風呂や茶屋の娘の秀佳襟

芝居物語

# 碁盤太平記

永松 愿



四透一面雪に、彩れし眺め、粗朶垣に茅葺屋根の風雅造り、此處は山科なる大石が侘住居である内藏之助の悴主税、醫者女伯を對手に圍碁に夢中なれば下僕岡平がお身に障りますると注意すれどさらで聞かばこそ、岡平が吃きながら雪掻きに餘念なき折、旅僧姿に身を扮す竹林唯七が訪れしも内藏之助不在と聞き一書を主税に手渡して立去りたり。

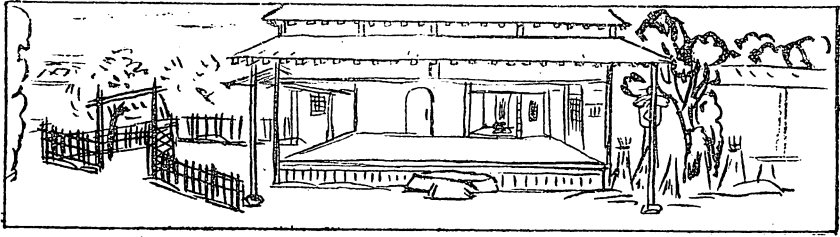
稍あつて封間、藝者、仲居など連れし内藏之助が泥酔せし身體を駕籠に運ばせ歸り來り浮言痴態の限りを盡す時、今度國元より上りし母と女房およしが奥より出で來るを「何うやら見たやうな、は、ア妻のおおぶじであつたか」など、恍けるにぞ

一同の歸りし後およしは涙して良人の亂行を諫めるも耳には入らず、早や白河夜舟の狀態なり。主税は先刻の密書を渡さんものと前後不覺の父を呼び起せば、浮世を捨てた内藏之助、かゝる畫面は反占ちや……と件の密書を引裂き捨つるに、様子を立聽くおよしは堪りかね「何故父上をお諫め申さぬと。目頃主税が不覺を吐れば「耳やかましい雑言吐くまい、誹られても笑われても生きるが徳ぢや……と、又轉寢の高厭き。母の千壽は餘りの言葉に其場へ出で持つたる位牌で打擲なし」ともう詞交はすも穢しい、嫁女さアおぢや、……と立ちかけるを呼止めた内藏之助が、夫に雑言吐くやうな女房、家風に合はぬ、たつた今より離縁ぢや



と云へば、母は愈々立腹なし、「此上は内藏之助は母が勘當する……とて、およしと共に旅仕度、別間へ立去れば、以前の玄伯がこつそり玄關へ現はれ岡平を呼出し、親女房を離縁せし内藏之助が阿呆を笑ひながら、懐中より密書と短刀取出し岡平に手渡して、まだ何事が堅く隠し合せて玄伯はそのまゝ、姿を隠したり、やがて岡平、件の密書を縁側の行燈の下にて讀下す時、來る主税にその様子を見て取られ、慌て、懐中に藏いしも主税に圖星をさされて包み切れず、もうこれまでと觀念せしか、岡平が態度は一變せり、「いかにも推察通り、我こそ高家の間者高村逸平太なるは、……さてこそッ！えいッと一刀抜打に主税の手練、されど下僕姿の逸平太、流石は高家の武士、その切先を見事に外し、暫しは二人の激しい争ひ、風雅造りの此の吾妻家の座敷に時ならぬ修羅を捲起したり。やがて一太刀！逸平太は受損ぜしか、アツと叫んで控とその場に打倒れし時、靜かに出で来るは内藏之助なり、「父上、これなる下僕は敵の間者に御座りまするぞ」内藏之助が双頬は輕き會心の笑みや洩れぬ、「それを其方今知つたか、遅い奴ぢやの」と傍に喘ぐ逸平太に、「まこと忠義の爲とは云ひながら、親なる人に悪口なし、罪なき妻を離縁してまでのこの苦策、何卒御推量下されい」と、始めて明す己が本心、思ひ餘つて溜涙、内藏之助が頬に流れたり「臨終の際に高家の模様何卒御物語り下されたし」と誠を簡めし内藏之助が頼み、敵の隔てはあれど武士の心は何れも同じ、内藏之

助が斯程迄に心を殺し、恥を忍んでも主君の仇を朝夕に晴らすうものとして必死の覺悟を聞く逸平太に、今は敵の差別もなく、ただ武士同志の感激のみ昂りぬ「それほどまでの御苦心、逸平太は天晴れ敵ながら感じ入つたる次第なり、さらば御忠節のその心に愛で、今は冥府へ旅立つ置土産、容子委しく教ゆべし」手負の傷の深さ、苦しさ、ともすれば、呼吸が断れか、るが如く、されども痛む傷口押へつ、苦し氣に喘ぐ息の下から辛じて、碁盤を繪圖面と見立て内藏之助が黒白の碁石を並ぶるまゝ、高家の要所々々の構へ其處彼處と顛へる指先に力をこめ、教へ行く逸平太、内藏之助が顔には晴やかなる喜色溢れる時、憐れ逸平太の呼吸は漸く薄れはて、顔には暗き死が刻み込まれたり。實に誠の武士、大石親子が見守る裡にあへなく息は絶へ果てたり。此上は一刻も早く發足なさんと、早や親子は慌しい旅仕度を調ふ處へ、何時の間にか立戻りし母と妻、先刻の悪口を只管に詫ぬれば、主税は母に心惹かされてか躊躇の涙、「え、この未練者奴が……」と吐る内藏之助が眼にも涙見えたり。それを包んで殊書に烈しい叱聲。心を鬼になして母と妻に別れ、惹くる心を東の空、足を早めて雲の散る山科を發足せり。



(中座初春興行上演)

芝居  
物語

土屋主税

波邊霞亭氏原作

奥田美代

(上)

向島でも三圍の四邊の雪景色はまた格別の眺めである。枯木に時ならぬ雪の花で美しい庭をひかへて晋其角の住居はいかにも風雅に出来てゐる。床の間の軸の後に早咲きの梅の花が咲いてゐる。風流な丸窓の前に短冊箱や硯箱を置いた文臺がある。俳書をつめた。本箱が見える。桐の手あぶりが主待ち顔である。

下女のおすみの相手で土屋家の仲間角平が酒を頂いてゐる。雪の日の使ひに酒とはと角平は恐悅の態だ。本所の土屋といへば評判のよい殿様、隣りの吉良家とは大違ひだ。御本家は九萬五千石、常陸の土浦の城主である。その弟で分家でも主税は八千石の旗本、吉良家のやうに賄賂を取つたり

人をいぢめないで清淨潔白な有福者だと角平は愈々い、機嫌である。

やがておすみは其角の返書を持つて来る。何事を差繰つても今夜は是非伺ひますると口上を添へた。酒で身體が温つたので雪が顔へ當るとい、心持だ。角平は狀箱を持つて歸つて行く。

羽織袴大小をさして高下駄姿で赤穂の浪士高源吾が小瓢箪を腰にぶらさけて出て来る。

いや降るはく、萬字巴と降りしきる向島の雪景色は又格別の趣きがある。

と銀世界をほめつ、其角を訪ねる。

『なに子葉殿が参られしとな』

其角が奥より出て来た。坊主頭の風雅な羽織を着てゐる、寒いのも風流の一つ、宗匠には此雪に

つきお催しがあるかと源吾は聞いた。今宵は都文公より御召がある。と聞いて首をかしかけた。

「土浦の土屋土佐守の御令弟主税殿が、發句がお好きで別號が都文公と仰せられる」

と聞いて源吾は本所松坂町吉良の邸の隣り屋敷であることを思ひ出した。同じ赤穂の浪士勝田新左衛門の妹、おそのが奉公してゐると其角は教へた。源吾は腰の瓢を取出し一献くまうといふ。其角は何か肴を申附けやうといふのを、源吾は急ぎます故と止めた。

「浪人以來宗匠にも一方ならぬ御懇意をうけましたが、今日限り暫くお眼にか、れませぬ。此度縁あつて西國方のさる大名へ召かへられ急に出立致さねば相なりませぬので御暇乞に參つて御座る」

源吾の言葉聞いて其角は全く意外に思つた。その西國の大名の名は聞いたが源吾は明日になれば自然と解ると答えなかつた。

「人間の身は老少不定。随分身體を大切に、後の世まで變りなくお附合を願ひます」

と源吾は空を見上げて涙をかくした。そこへ肥後細川家の家臣落合其月が立派な袴へ出て來た。

「落合氏かねてお咄しを致した以前淺野家の御家人大高源吾殿、俳名を子葉と申し先輩で御座るぞ」

と引合せた。其月は源吾が此度西國方の大名に召抱へられると聞いて大いに立腹した。

「子葉か何か存せねど犬に劣つた豚と同席はなりません」と言つた。世間には豚も居れば蚯蚓も居るが武士の本意は上からは見えぬものぢやと源吾は聞流した。

「全體豚といふ奴は自分の主の見さかひもなく食物さへあればかき歩く。武士の大道は生きて二君に仕へぬにある。その豚侍の先君は武士の面目を傷つけられたのを遺恨として五萬

三千石を只一朝の刃傷に捨てさせられた。その相手は無事で今も時めき榮へてゐる。家人なれば叶はぬまでも一度は敵の邸へ征め入つて一太刀恨まねばならぬ所を二君に節を賣ると

は言語同斷な豚侍

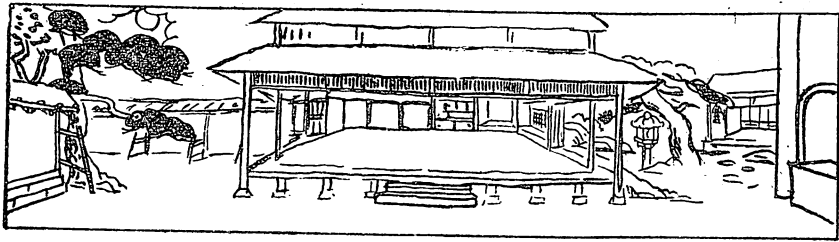
と落合其月は源吾を罵倒した。其角は町人にならともどうか思ひ止つてくれと源吾に頼んだ。

「拙者も君に仕へし頃は忠臣は二君に仕へずと申しておつたが糊口の道にさし迫つては豚畜生と言はれても二君どころか三

君四君いやもう恥よりは飢が苦しう御座る」

と源吾はうそぶいた。

「やあ腐りはてたその魂、誠の武士が清めてくれん」と其月は源吾を足蹴にかけて庭先へつき落した。其角は源吾に氣の毒に思ひ向も主取りを思ひ止らそうとしたがそれは無駄であつた。されば錢別の一句仕らうと、



「年の瀬や水の流れと人の身は……」  
と詠んだ。源吾は早速と

「あした待たる、その寶船」

と脇句を懷紙に書いて渡した。其月は浪人根性の今日は師走の十四日やがて主取りをした正月が待たる、と解したが其角には解し難いものがないでもなかつた。よく降る雪を傘にさけて立去る大高源吾を見送つて、句と心とは裏表、彼に句だけの心があらば、まだしも武士と言はれんものをして其月は嘲笑つたが、其角は、  
「惜しき友を失ひました」  
と歎くのであつた。

(下)

その夜もかなり更けた。土屋邸の奥座敷、古代銀地に鶯の模様襦袢がゆかしい。松の大樹が隣家の空にまでおふてゐた。その向ふに隣り邸の大きな屋根が見える。雪が降り積つた庭木や石燈籠が美しい。侍女のおそのが琴を弾じてゐるのが銀燭の灯にまばゆい。

河瀬六彌が手燭を持つて土屋主税を案内してくる。其角はまだかと主税は聞いた。この雪景色を

何處に眺めてゐるやらと再び迎ひの使者は立てられた。

主税はおそのに一献す、めつ、彼女の兄新左衛門の消息を聞いた。

「淺野殿には無念の最後を遂げられしが城代には内藏の助はあるから思慮分別あるべき筈、やがて浪士の名の出る時も有らう。そちを寵愛致すのも聊か義を知るためぢや」と主税はおそのを慰めた。萬一淺野の浪士が義を知らぬ時は俺も笑ひものになるとも言ひそへたおそのはその志を厚くうけた。

そこへ晋其角が伺候した。今宵の雪の句を詠んだかと聞かれて、

「今日ほど物の悪い日は御座りませぬ」

と盃も受けず、おそのにお暇をお出し下されと願つた。主税は驚いた。兄が暇をくれといふのか本人がいやぢやと言ふのかと問ふた。其角は親がわひの自分がいやぢやから暇をくれと迫つた。赤穂の浪士は皆腰抜けばかり浪人でなくて乞食非人、その妹をお屋敷へ差上げたのは其角の一生の誤りであると言ふ。主税は何事か解せない様子でおそのをかばふた。大高源吾と勝田新左衛門と

は同輩なればその根性は大抵知れると其角は憤つた。おそのは兄は兄、まして大高源吾は源吾、それを自分が引合に出されては困ると歎いた。主税はもうよいくと執したが其角は聞かない。なほもいひつものつた。主税は源吾が西國の大名に召抱へられると聞いて驚いた。赤穂浪士は誠の武士、間違ひであらうといふのを、其角は證人として落合其月を同道したことを告げた。主税はおそのを次に下らせて落合其月をよんだ。其月は土屋公に初對面の挨拶をして赤穂浪士が節を賣つて二君に仕へると聞いてその縁邊の者と顔を見合す無念だと言つた。主税は其角のいふたは真かと聞く。其月は更に尾緒をつけて罵倒した西國方の大名、その名は明日になれば自然と解るといふたと聞いて主税は考へた。

『年の瀬や水の流れと人の身は、あした待たる、その寶船』  
主税は益々考へさせられた。其角は執拗にもおその、嘔乞ひを迫つた。主税はいつか脇息にもたれて眠り入つてゐた。二人は呼んだが顔に當てられた扇面の影からは寢息が聞えるのみであつたので二人は次の間に下つた。

雪の夜に積る思ひを我が袖に包み兼ねたる憂涙、おそのは一間を立出て……

『大高殿がお心がわりのため私しまで悪名を蒙る今宵の仕義、女ながらも赤穂の家臣、武士の魂お目にかけます』  
主税は慌て、止めた。

大高源吾を不忠者と思ひ居るか。淺野の浪士は此上もなき大の忠臣、西國方の諸侯の名前を問ひしに明日になれば自然とわかると申し、あした待たる、その寶船とよみしは、既に仕へし身ならず、あした待たる、愈々本望それこそ誠の武士、世事に賢き其角でさへ悟り得ざるは智者と呼ぶ内藏之助が思慮明智天晴感心見事々々

とほめた、えた、折しも聞えるは劍撃の音である。もしや火事かと立上る。

『斯く深夜に及び吉良殿の邸に太刀打つ音、あした待たる、やつこ、ちやわい』

主税はほんと膝を打つた。そこへ六彌がかけて來た。門前へ赤穂淺野の舊臣奥田孫右衛門中村勘助の二人が來た。いでたち火事裝束にて淺野内匠が家來四十七人亡君の仇敵吉良上野介様を打ち果す間お出合ひ下さるな。勿論火の用心念入りに致し粗忽なきやう仕ると届けて來たと言ふ。主税は喜んだ。おそのは嬉しく思つた。高張の用意がされた。其角は驚いて飛んで來た。その中に大高源吾が居るか勝田新左衛門が居るかときよろ／＼うろ／＼とわめいた。

こりや騒ぐな其角、吉良家へ助太刀と思はれては残念、此上は赤穂の浪士が首尾よふ本意を達するやう吉良家調伏の句を詠め

と主税は改めて酒をよんだ。おそのが酌をしてもかまはぬか

と聞かれて其角は恐れ入つた。子葉が今日来たのは敵討ちの暇乞ひ、あ、源吾が一見見たいと其角は彼方此方と走り廻つた末松の樹によち登つた。

「大高源吾はおはするか。其角はよりおわび致すぞ」

とわめき立てた。折から呼子の笛の音に續いて太鼓の音がひびいて来た。主税はさてはと思つて西川頼母を呼び、

「その方隣家へ參つて今宵本望遂げられし上は土屋主税改めて回談致ししたと申傳へ」

と命じた。其角は本望を遂げたと聞いて松の木から轉け落ちた。そこへ頼母は引返して来た。御隣家を騒がせしお詫びにと

て大石内藏之助より使者が来たことを告げた。其角とおそのは源吾と新左衛門がその中に加つてゐるやうにと八百萬の神に祈つた。

そこへ六彌に案内せられて大高源吾が現れた。其角とおそのは大喜び、更に新左衛門の手柄談を聞いておそのは肩身をひろ

うした。

「四十有餘の人々は永々の心勞、今宵本意を遂げられて嘸滿悦でござらう」

と主税はほめた。

有難き御懇の仰せ御明察下されませう。内藏之助答へ申上

けますは、今般上野介殿御首給はる上は一列四十七人回向院

まで引上げ大目附へ御訴へ申上げ、もし不順の節は内匠頭普

提所泉岳寺へ罷越し切腹仕ります」

と源吾は臆する處なく申上げた。主税は粗忽の切腹をいましめた。落合其月は兩手をつけて詫びた。誠の武士を罵つたから

はこの首を刎てくれと言ふ。はては庭前にて切腹しやうとするのを押しめて殿の馬前で忠のために死すべき時まで自分の命

を自分が預ること、なつて其月はほつとした。呼子の笛は引上げの合圖、御免と立去る源吾を主税は呼び止めて、

「このそのは家の寶と致すと兄新左衛門にお傳へ下され」

と言つた。そのも名残りを惜んだ。其角も返すくも名残りを惜んだ。太鼓の音を聞いて源吾はいづれも御免と立去つた。

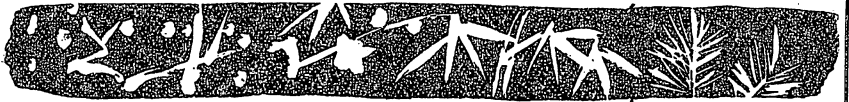
主税はせめて餘所ながらも勇ましい行列を見送つてやらうといつたが、其角は止めた。

「あした待たる、その寶船とは即ち今日、そちは目くらであつたか」

主税は其角をせめた。武士道はいまだすたりはしない。赤穂浪士こそ武士の鑑、

「無念の最後を遂げられし内匠頭殿、嘸や泉下にて御満足に思召されん。淺野殿はよい家來を持たれたなあ」

土屋主税はいまさらに感心した。



初 春 十 二 首

木 村 富 子

いかのほり曾我殿ばらが揚幕を出でくるやうに上りけるかな  
ゆゝしくも愛でたきものは少將の兵庫にかけし金のあけまき  
花やかにかざしの色もうつるかな羽根の禿が銀の丈長  
錦繪に仕初の昔偲びつゝ炬燵にあれば粉雪ふりきぬ  
一文字の黒きひまよりちらくく芝居の雪が降る春の宵  
太文字の大人袋あかくと並びてあるも艶なり春は  
東風わたる四條やゆけば櫓見ゆ河原にあかき友禪も見ゆ  
二つ胴敷腕といふつるぎほど肌につめたし京の春風  
寶惠籠のかす十あまりすぎゆきぬ浪華の春のうつくしきかな  
正月の十日我にまるろかの花の寶惠籠見にまるろかの  
にしき繪をたゞ見るごとし川端にならぶ吉三の三枚つゞき  
兩びんに鯰のひけのゆらくくと歌舞伎の春はのどけかりけり

傀儡師 (歌詞)

清元連中

蓬萊の島は目出度い島での、

黄金樹にて米量る、紗のく袴よの、

竹田の昔はやし事、

誰が今知らん傀儡師、

阿波の鳴戸を小唄とは、晋子が吟が風流や、古き合點で其の儘に、小倉の野邊の一本薄、いつか穂に出て尾花とならば、

露がねたまん戀草や、

戀ぞつもりて淵となる、淵ちやござんせぬ花嫁に、

媒人を入れて祝言も、四海波風穩かに

下戸のふりして口きかず、物もよく縫ひ、

機も織り

心よさをなかみさまの、三人持ちし子寶の、

惣領息子は親に似て、

色と名がつきや夜たかでも、

ござでも、

みこでも、

市子でも、

可愛々々がおちおふて、

女に浮身やつしごと、

二番息子は堅藏で、

ほきく折れる。

とけ茨、

三番息子は色白で、お寺小姓に、

やり梅の、吉三と名をも夕日影、

それとお七ばうしろから、

見る目可愛き水仙の、

初に根締の嬉しさに、戀といふ字の書初めに、

湯島にかけし菊茅花、



八百萬の神さんに堅く誓ひし縁結び、必ずやいの寄添へば、

そこらへひよつくり辨長が、いよゝ色の實生たち、差合線らずにやつて呉りよ、

やれどらが如來

やれゝゝゝおほくれ、

ちよんがれちよくと、

其處等でちよつくらちよつと、

聞いてもくんねえ、

嘘ぢや御座らぬ本郷あたりの、

八百屋のお娘が十六さ、けにならない先から、

お寺の小姓に、

ちよつくらけへつて、

そつくりけえつて、

ひつくらけえつて、

ぶつくらけつて、

彼子におほくれ、

ほうれんそうでな、

折を松茸根芋とやらかし、

互に初物しめじで忘れず、

二世も山椒もかいわりなんすな、

末は芽獨治にならつげなんぞと小松のかためを、

松露の證に、きしやうが書いたり、

小指を胡瓜は去りとはゝうるせえこんだにホウ、

奇妙頂禮、

どら娘

これはさて置き、既に源氏の御大將、御曹子にいたします

頃、長者が姫と語りひも、

小男鹿ならで笛による、

想夫連理の戀すてふ、おしあかつきのかことにも、

矢矧の橋は長けれど、逢ふたその夜の短かさよ、

ヨイゝゝゝよいやさ、

よいやさをのこ、

女と數度の戦に、

勝鬨あけくに大物の、怨みつらみも波の上

そもくこれは桓武天皇九代の後いん、平の知盛幽霊なり

ア、ヲ珍らしや、

いかに、

どうだ義公、

娑婆以來馴染の辨慶伊勢駿河、早く盃サアさし汐の吸物

椀にて叶ふまじと浮いて散らして拍子取、

すいてうえいちやく、

ア、うつ、なや、

やつちや子供よ振鼓、そこで仲よう遊べさ、

花が見たくば、ウそれく芳野へござれ、

そりや嘘なんの今頃花がある、イ、エイナやがて咲きます

六つ花、そりやくくほんかいな、木毎にへ見事にへ、

景色よし野の花と雪、

面白や、

詠めありあふ箱鼓、とりくなれや鳥籠と、替はればはつ

と忽ちに、雀追はへて慕ひ行く、雀追はへて慕ひ行く。

### 角座初春興行

#### 總配役一覽

小織一派、藝術座合同劇の初春

興行狂言は第一加藤秀雄氏原作、

中井泰孝氏脚色「光は暗から」二幕

五場、第二佛國小デューマ原作音

羽六藏脚色「椿姫」二幕、第三岡本

綺堂作「酒の始り」一幕を上演する

總配役は左の通りである。

矢部啓三、アルマンの父(小織

桂一郎、蝶良尙夫(高田亘) 醉漢

一(白崎菊次郎) 映畫俳優上村

(井上芳夫) 醉漢二(三柳薫) 醫者

大井(加藤桂二郎) 古谷新二郎

(和歌松新三) 間島龍吉(加藤精

一) 矢部幸子、吳の國の美女(東

愛子) 矢部杉子(米津左喜子) 矢

部均一、アルマン、儀狄(正邦宏)

劉規(田邊若男) プリヤン、宮臣

珠(看護婦、宮女四(水島喜美子)

童女(菊沖芳枝) 女中おとめ(片

山重子) 看護婦三田(田村英子)

矢部明子、マルゲリット(水谷

八重子)

### 辨天座淡海劇

#### の配役

辨天座初春興行の淡海劇は第一

「嫁に欲しい」二場、第二「武者修

行」二場、第三「峠越すまで」一場

第四「戀愛測量器」二場でその重な

る配役は

武田信十郎、小間物屋義助(龜

鶴) 老爺伊兵衛(太郎) 間新六、村

人孫兵衛(十太郎) 職人市藏、母

千代野、村人庄造(白石) 職人東

次郎、友人佐藤(三樂) 門弟與

倅榮吉(一雄) 武士森一策(樂遊)

娘およし、令嬢實美子(鶴岡富

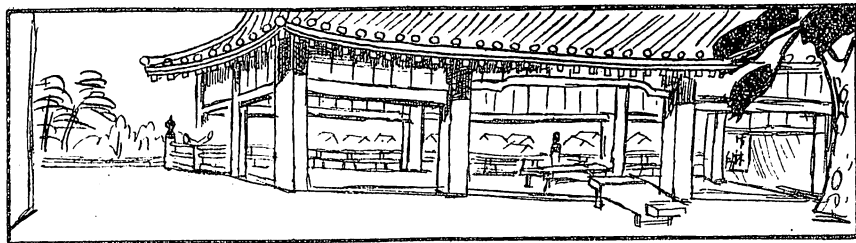
士子) 籠お雪、娘京子(東靜子)

籠おすみ、娘艶子(衣川るり子)

(芝居小説)

# 助六後日

大橋照夫



陶醉の橋に乗り疲れた萬屋助六は、やがて到達すべき運命を豫感してゐた

彼は、ハラ／＼と舞ひ落ちる梅の花弁を、凝つと見詰めてゐた。——その花弁は、高津境内の高臺から、いま、彼が俯瞰してゐる町家の藁の上へと舞ひ散つてゆくのであつた。

『どうぢや、辛度いか。』

助六は、眼下の景色をみやりながら同伴の女性に云ふ。

彼の瞳の彼方——町家の藁から、あ

るかなしかの水蒸氣がユラ／＼と立ち上つてゐる。

『い、え、久し振りに戸外へ連れて来て貰ひましたので氣が晴々しました。』

應へながらも苦しげな息遣ひの主は妻のお八重である。揚卷の昔の面影が、その憔悴した何處かにしのばれて、——

ふと、振り返つた助六の瞳は、お八重のそれとびたりカチ合ふ。

細面、目鼻整つた色白のやさ男助六の瞳の中には、淡ひ落魄の陰影が漂ふてゐた。浪花三郷きつての大分限者萬屋の總領息子の子のそれとしては、あまりに合點のゆかない寂しい表情——風貌である。

陰氣な寺の座敷に寝てばかりゐるよりと思ふて連れて出たが

今日は二月には珍らしい好天氣、梅よりも櫻が咲いてるさうな氣持がする。』

『何處をみても晴やかでほんまによい天氣でござんすな』

『さうか、氣持がよいか、何より結構な、ではお詣りから先に濟ませて來よう』

助六は、氣輕に八重を促して二足三足行きかける。と、息苦しさに堪えぬ八重の様子。

『どうした、息が苦しいか、辛度いのか？』

『濟ませぬが暫らく憩ませて……』

『それ／＼それやよつて無理してはならぬと云ふのぢや、寺から爰へは足敷が敷へられるほどの近さぢやが、やつぱりあの石段がこたへたのであらう、では爰で暫く憩むとしよう。』

彼は、八重の手をとつて勞りつゝ、繪馬堂の床几に掛けさすのだつた。

『これ女中、早ふ白湯を……、お茶ではあかん、白湯を持つて來て……』

『へえ／＼よろしうござります。』

茶店の女中は折角酌んだ茶を白湯に注ぎ替へて持つて來る。

助六は鳥渡湯加減を試みてから、八重の脊を擦り／＼それを飲まはしめる。

『お氣分が悪いのでございますか。』

『ちと心の臓が悪いのでな。』

『それはお困りでござりますな、どうぞ御ゆるりとお憩みやしとおくれやす。』

親切に、茶店の女中は云ひ残して去つてゆく。

助六は、いつも八重の病氣の原因に想ひ及ぶと堪らなく、苦しさが増すのだつた。

氣まぐれな微風が、梅の梢をかすめると、それにつれて淡紅の花瓣が梢を離れて、ハラ／＼と舞ひ頻る。

早春如月の空は明るい。

助六は八重の脊に手を掛けたまゝ、ほんやりと空を見入つてゐる。

『どうや、まだ苦しいか？』

暫らくして、

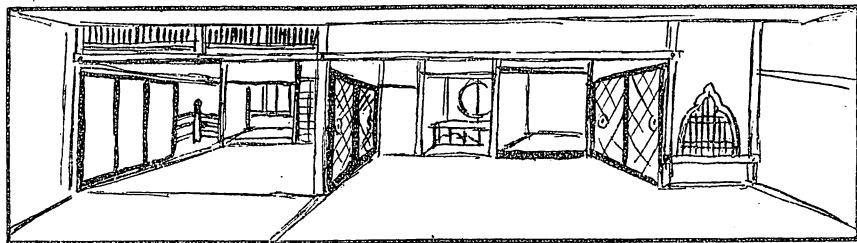
彼は、淡い眩暈を覺えながら、思ひだしたかのやうに八重を勞るのだつた。

『お蔭で漸う、おさまりました、私はいつの間にかこんな弱い體になつてしまつたのでござんせう。』

『丹波へ行つたのが悪かつたのぢや、然も鬼さへ棲むといふ奥丹波の山家暮しは廓育ちのそなたに取つて、あんまり世の中が違ひ過ぎた。』

『またしてもそんなことを、病の養生にわざ／＼田舎へ行く人さへあるぢやござんせぬか。』

『養生なら行きませうが、私等二人は、せうことなしの山家住』



居、滿三年の難行辛苦でそなたは精も根も盡き果て、しまふたのや、誰がこの姿をみて、廓で鳴らした揚卷の果てと思ふものがあるやらうか？」

『もうくそのことなら云ふて下さりますな、私は氣衝ない大阪より、人目もいとほぬあの奥丹波の方がいつそ戀しうござんす。』

八重は、ハッキリと、さう云つてのけた。

『あゝ、そなたは私の方の經緯を氣に掛けてゐるのやな、まあもう暫くの辛抱や、どうぞ眼をつぶつてゐてくれ。』  
『でも私故に兄弟や御一同の衆を……』

『え、もう云ふなと云ふに……』

八重の言葉をさへぎる助六の腹の中は、萬屋に對する不満で一杯だつた。大分限者萬屋の暖簾を掌るものは、當然總領息子の助六であるべき筈だ。

數年前から、彼の放蕩三味は續いた

そして、當時新町の廓に全盛の揚卷のために大枚の黄金は蕩盡された。

結局、彼は執心する揚卷と共に奥丹波に放逐されて、滿三年その。間親父助右衛門は永世して、萬屋の二代は、異母弟の惣次郎が立派に相續してゐた。

大阪に立ち歸つた助六は、實に空しい身上であつた。

『親御の御臨終にも、え、逢はさず、大阪へ戻つても、我が家の敷居さへ跨げぬ身にしましたも……』

斯う云ひながら、八重は苦しさうである。

『あゝ、その話はまだ措いてくれと云ふに、その愚痴が病の原因になる。な、お前の行末のことは心配せんで、俺れ任せにして置くのぢや待つてくれ、今に屹度そなたを仕合せ者にしてみせる。』

助六は、キツパリ云ひ放つて強ひて笑顔を作る。ピリツと唇のあたりが、かすかにふるへてゐた。

引きずられるやうに、八重の蒼白い面にも、かすかな笑みが泛ぶ。

と、繪馬堂下の石段から、時ならぬぞめきの聲が纏れ纏れして、どこか町家のお大盡らしいのを先頭に、賑かな一行が上つて来る。

助六が、何氣なく一行を見やるその中から。

『お、若旦那！』

頓狂な聲の主は、助六兼ねてより顔馴染の吉兵衛と云ふ太鼓持坊主。

お大盡の一行は賑かにぞめきながら通り過ぎる。あとには、吉兵衛一人が取り残されて。

『これはどうも、——これはどうもお珍らしい。』

『お、吉兵衛か、久しぶりの。』

と、云ひかける助六の傍に、顔を反向けた八重のゐるのを、素早く見つけた吉兵衛は、窃と覗き込みながら、

『揚巻様ちやござりませぬか、あんまり御容子がお變りなされたので頼とお見外れ申しました、その後いづれとやら遠國へお越しと承はつて居りましたが、これはどうも、これはどうも、へえくお二方様とも相變らず御健かでお目出度う存じ上げます。』

気軽に大地に坐つて両手を仕へる、何處までも抜け目のない太鼓持一流の商賣氣。

當惑氣味の助六は、それと察して懷中に手を入れたが、もとより紙入れを持合せやう筈もない。彼の面には何か途方もない困惑ともどかしさの表情がありく、と泛んだ。

その時である。助六の掌に何か紙包みの觸感が、……ふと、振り返るその眼に。

『お、善五郎殿!』

と、斯う云ひ掛けられるその人、萬屋の分家録屋善五郎の眼

は素早く何ものかを命づるのだつた。

『吉兵衛、私はこれが出養生でこの頃ついその寺に來てゐるが、病氣と聞いて以前の馴染が見舞に來られても迷惑ぢやよつて、當分廓へは沙汰なしに頼む、い、か頼む、頼む。時に吉兵衛こりやほんに露ぢや、……』

應場に、助六は先刻の紙包みを投げ與える。

待つてましたとばかり、吉兵衛はそれを拾つて三拜九拜押し戴きながら、先刻の一行のあとを追ふてゆく。

あとには助六と八重が寂しさう……

『助六どのこなたは今の境涯が嘸口惜しうござらうの。』

唐突な善五郎の聲は、助六の胸を衝いて、やがてそれが苦笑となつてゆく。

『よい處へ善五郎殿が來合してくれましたので兎も角も耻も搔かいで濟みましたが、忝けない禮を云ひます。』

ゆくりなく來合したのであつたが、斯う禮をのべられると、善五郎には助六の心根が傷ましくも、憐れに思へてならなかつた。

『助六殿、私やあんまりこなたが氣の毒故、長い間この胸に疊んでゐたことを打明けてしまひます。まあ、もう暫らくこれへ掛けて下され』

助六は、無言で八重の隣に腰をおろすのであつた。

『助六殿、實の所こなたの勘當はとふの昔にゆりてゐますの

「ぢや」

助六にとつて、善五郎の言葉はあまりに意外であつた。

「え、私の勘當が、……」

助六を制して、善五郎の口から一つ一つ語りだされる一伍一仕の仔細、……

親父の臨終に書き残された一書——。それによつて既にゆるされてある助六の勘當、その秘密は親族合議の上その一書と共に萬屋の金藏の中に、永代開けずの箱でしまはれてある事、等。等。

此の場合の助六には、その指金人が誰であるかと云ふことも明瞭に想像出来るのであつた。

「誰にも云ふまい」と思ふてゐるが、さて逢ふてみると案の定、何も彼も萬屋の大事を打明けずには居られぬことになつてしまふた。然しもうかうなつたらゆく處まで行かねばならぬさ助六殿、どうしなさる。」

助六は、善五郎を凝視したま、無言のまゝである。

「ごなたがボンと一つ判さへ押せば後は何も彼も私が引受けて立派に明るみへ出して進ぜる。」

善五郎の一言一句は助六の頭から慥慥して掛る。

「判を押せとは……」

助六の息ははきんでゐた。

「願ふのぢや、公事にするのぢや。」

助六にとつて、我が身を想ふて呉れる善五郎の心は嬉しい、……然し、その底にひそむ、半ば威壓するやうな、命ずるやうな、あるものに想ひ到る時、思はず慄然とせずには居られなかつたが、——

「うむ、……」

助六の眉宇には、感情に激し易い眉間皺がぐつと寄つてゐた。何事に依らず、應揚で、それが禍いして、のつびきならぬ義理人情の枷に、我れと我身を陥つてゆく彼は、とまれ浮世知らずの大家の若旦那であつた。

善五郎の去つて行く後姿を、ぢつと見送つてゐた助六の念頭には愛妻八重のこののみ——。彼は午下りの薄寒い光りの中に立つて、身じろぎもしなかつた。

その夜である。

高津の社から程遠からぬ淨法寺の書院に佗しい人影がある世を忍んで菩提寺の一室に、わづかに戀妻八重の病を養ふ助六の心は、薄暗い行燈の灯かけのやうに陰氣に揺れてゐる。

と、此時である、音もなく廊下の障子が開いて異母弟の惣次郎が這入つて來たのは、——

「お、弟か？」

豫期してゐたかのやうに、助六の言葉には、急に明るみが射してゐた。

『大層お待たせをしました。實は今日は母の父親の祥月命日に當りましたので、鳥渡和尚に拜んで戴きましたので、然しいつもお變りがございませんで。』

惣次郎は馬鹿に落着き拂つてゐた。

『ま、挨拶などはどうでもよしさ、ずつと此方へよつてくれ。』  
助六は、そう云ひながら、惣次郎の顔をみると、なにかしら苛立たしいものがこみ上げて来るのを感じた。

『——、時に惣次郎、いや、もう助右衛門であつたな、私の手紙はみてくれたであらうな?』

助六の言葉には、いつになく力がこもつてゐた。

『拜見致しました。實はその返事に付いて困つてゐるのでございませぬ。』

『何ッ、返事に困る、では私の頼みは聞かれぬと云ふのか?』  
助六は、惣次郎の冷然とした態度に、むらむらと憤りが燃えて来るのであつた。

『私は萬屋の跡式は續ぎましたもの、何分若輩のことでございませぬ、何一ツ一存で極めると云ふ譯にはゆきませぬ、それで早速伯父さんを始め主な親類の方や店の番頭達にも相談を致しましたが、皆様の御意見がなかく、私の思ふやうにはまともらぬのでござります。』

『何ッ!』

助六は、常になく激昂してしまつた。彼は、惣次郎に對して

生れて始めて強い憎悪を感じた。

八重の病を養ふためにと、恥も外聞も、——すべてを打ち忘れて窃かに惣次郎に宛てた無心の書狀、——それが酬ひられないとなれば、もう感情を抑止することの出来ないのは當然である。然も萬屋相續のすべてを断念し、自分と云ふものに只管覺を覺えてゐる彼であつてみれば、——

兩者の感情は時ならぬ、疾風を巻き起した。

『弟ッ、お前は私の私が何にも知らぬと思ふてゐるのか。』  
『何にも知らぬとは、何の私のござります』

その時である。背後の襖のかげから、——

『今の言葉は聞き捨てになりませぬ。——』

斷母お茂の聲がピタリ助六の體を射たのであつた。

『これはお母あさん、御機嫌よろしうござります。』

彼は、その視線をさけるやうにちつと面を伏せて、革つた態度で手を仕へた。

『空々しい挨拶などは聞き度うもない。』

嘲笑に似た繼母の言葉は、折角平靜に復しかけた助六の心を更に掻き立てた、

と、——

『極道者奴!』

又しても、廊下の彼方から伯父大文字屋庄兵衛の聲は助六をいよく四面楚歌の中に置いた。



此時まで、隣室で事の成り行きを窺つてゐた八重は、その経緯のすべてを想像することが出来た。

既に彼女に覺悟はあつた。

『助六殿、何卒お暇を下さりませ』

八重は走り出たのである。

『馬、馬鹿な、お前の出るところではない。』

今まで、かくしに、かくしてゐた事のすべてを知られてしまつては、助六にとつても、もう最後のときである。

『もうこれまでぢや、やい萬屋の資産を騙つた大盗人め、おのれ等残らず吠面か、せてやるから待つてゐろ！』

半ば狂氣の助六は、追ひ縋る八重の手を振り放つて一散に善五郎の許へ、

あとには、時刻を告げるときの鐘が、陰にこもつて一ツ二ツ

……

書間の暖かさは、宵闇と共に冷い霰となつてゐた。高津境内の暗闇の中を二ツの人影が、纏れ纏れして来る。

『えッ、兄さんは公事沙汰に、……』

『この判一つ押しや、忽ちおのれらの首に繩が掛る待つてゐろ！』

二ツの人影は、すぐに助六兄弟のそれと知れる。然も二人は必死に争つてゐる様子である。

と、二人の間を分つて更に新たな一ツの人影。——

『旦那様！待つて下さりませ……あ、此の胸が裂けさうな』消え入るやうな女の叫び聲である。

『これ、氣を確に持つてくれ、お八重く私ちや、助六ぢや。』

その言葉は、遂に無駄であつた。

八重の死に依つてすべては解結された。萬屋の開けずの箱の一件も、結局は助六のために企てられたことであつた。——と、

は云へ助六にとつて八重の死は、皆が千萬言の詫び言より尙尊い犠牲であつた。

助六にとつて、八重の死の前には、萬屋數萬の資産も、なべて三文の價値もない、——

『私の此の世の實はもうなうなつた、八重の骨を提へて高野の山へ登るとしやう、——』

折柄大地を叩く霰の音は、彼が兼ねてから豫感してた、やがて到達すべき運命への挽歌であつたことである。

……



中座初春興行上演

# 道行初音の旅路

(鶯 鶇 石)

- 一、静 御 前 扇 雀
- 一、鼓 の 藤 太 箱 登 羅
- 一、狐 忠 信 長 三 郎

(竹 本 連 中  
清 元 連 中)

## ◇吉野山麓の場◇

忠  
誠まことにそれよこし方かたの思おもひぞいづる壇だんの浦うらに  
海うみに兵船へいせん平家へいけの赤旗あかひた、陸りくに白旗しろはた。

源げん氏の兵つはもの、ア、ものくしやと夕日ゆふひかけに長刀小脇ながとうこわきに引  
きそばめ、某それは平家へいけの侍さむらい悪七あくしち兵衛景清べいゑかげいと名乗なをりかけなき  
立てくなき立たれば、花はなの嵐あらしのちりく、ぱつと木の葉武はなはぶ  
者しやいゝがひなしとよ、方々かたかたや、三保さんぼの谷たに四郎しやう是これにありと  
諸もろに丁ていと討うてかゝる、刀かたなを拂はらふ薙刀なぎなたの柄つかなれぬふるまい  
何れともまさにおとらぬ波なみの音ね、打合うちあふ太刀たの鐔つば元もとより  
折おて引ひ汐しほ歸かる雁かり、勝負せうぶの花はなを見直みなおるかど薙刀小脇なぎなたこわきにかい



込んでかぶとのしころを引つかみ跡へ引足たぢくく  
向ふへ出る足よろくくむんずとしころを引切て双方  
尻居にどつかと坐し、腕のつよさと云ひければ、首の骨  
こそつよけれども……ハ……笑ひし跡は入亂れてつよき  
はたらき兄次信、君の御馬の矢表に駒をいさめて立ふさ  
がり

チ、聞き及ぶ其の時に平家の方には名高き強い弓能登の  
守教經と名乗りもあへずよろびいてはなつ矢先は恨めし  
く、

兄次信が胸板へたまりもあへず真逆さま、あへなき最期  
は武士の

忠信義士の名を残す思ひ出るも涙にて、袖はかわりぬ筒  
井筒

藤太 ヤレ来いやい。

竹 暫しの内と櫻木の小蔭へこそは忍ばする

竹 かくる處へ鼓の藤太家来引連れ駈け来り

藤 ヤア、忠信。

逃げ足早き義經主従、尻に羽車風車足駈車のあの静身共  
がお手車に致さんと討手に向かひし花車、思ひ掛けなき横車  
源氏車の押戻し、飛んで火車水車、モウ此の上は手を突いて  
どぶぞ御所車とは吐かしてもその手ちや行かぬ口車、糸車よ

り細き首さらひ落とすか但し又汽車馬車車をいたしなば鼓の  
しらべにくし上げ、チリカラスツボンく、チリカラスツ  
ボンく音を止めうか返茶はタ、ポく、タ、ポ、返事は藤  
太々々。

竹 藤太々々と呼はつたり。忠信ふつと吹出し

忠信 ヤアよい所へ鼓の藤太、ならば手柄にからめて見よやい

竹 手を擴げ待ち受けたり

藤太 ソレ者ども討取れ。

軍兵大ぜい ハツ。

兵大勢を相手に立廻りになり、トゞ忠信は軍兵を下手へ追ひ込  
む是より大序になり藤太は狐を連れて出たる思ひ入りにて、

藤太 ベたぞくコレ靜、何んほう逃けうとしても逃しは致さ  
ぬ、モウ斯うなれば是非がない、繩打て鎌倉殿の御前へ引か  
んと申すは嘘ぢやわい、聞きしに優さつた天晴器量腰はひん  
なり柳腰、目元の愛らしい、口元の尋常さ、ほんに是では義  
經が現を抜かすは無理ではない。どうぢや靜、モウ斯ふなれ  
ば生かさうと殺さうと此藤太が胸一つ今から義經の事を思ひ  
切り、身共の女房になる氣はないか、何んぢや侍は嫌ひぢ  
やとは又何故に、何ぢや侍になれば合戦なし討死なすは知  
れた事、何ほう好いた殿御でも一生添はれるまではなし、そ  
れ故私しは侍は、嫌ぢやわいなア、成程是れは尤ぢや、

何とせうは私がないそちの申すことなら明も暮な屋敷の大小  
捨て腰の身輕な町家の住居。

常 下女が一人に子猫が一疋、外には邪魔もあら世帯、とり

ぜんで喰うたのしみは一つの肴をむしり合ひ箸の上での  
綴り膳に寫かし景清や互に顔を三保の谷のひくり返した  
皿に鉢、ソレ雜巾よ拾へよと三と呼びや『ハイ』と来る  
『ブチ』と呼びや『ニヤン』と泣く是と一所に呼ぶなれ  
ば『オハハハ』の『ハイ』と來りや『オニヤンヤン』の  
『ニヤン』と泣く。こんな騒ぎも痴話半分、嬉しかろう  
ぢやないかいな。

藤 スリヤ得心致して女房になると申するか、それは千萬忝

ない、是れより直に鎌倉へ同道致さん、ソレ者共。

軍兵 ハツ。

常 いつか御身も伸やりに春の柳生の京長く

竹 土田六ツ田も遠からぬ、野路の春風吹き拂ひ、雲を見ま  
ごう三吉野の、麓の里へ。

ト此の文句の中に忠信靜兩人出る。  
軍兵等は狐にだまされたる科にて靜に草鞋をはかせ、  
鼓を脊負はせる。

靜は落ちて行く。

藤太は忠信の旅拵らへを手傳ふ。  
忠信こなし有て花道へかゝる。

後柳の藤



# 『黒手組の助六』

河竹繁俊

『助六後日』といふ新作が上場されるに就いて、黙阿彌の書いた助六に關して、何か書くやうにといふ鳥江主幹からのお話ですが、扱何もこれと言つて書くべきこともあまりありません。

そこで、やはり主幹のお言葉に従つて、『黒手組の助六』の初演の時のお話といふことにします。一向取りとまらない、大して興味もない無駄話ですが、それでお許しを願ふことにします。

『黒手組の助六』の原名題は『江戸櫻清水清玄』と申します。これは一番目狂言に清玄があり、二番目に黒手組がおかれてあつたからで、江戸櫻といふ中に江戸の俠客といふ意味を含めたものと考へられます。(無論清玄に櫻は附き物ではありませんが。)

『黒手組曲輪達引』など、いふ名題は、後年助六に關する部分だけ獨立させて上演されるやうになつてからの題であります。初めて演ぜられたのは、安政五年三月、江戸の淺草猿若町二丁目の市村座に於てとありました。

傳ふる所によりますと、此時黒手組の助六を演じて大好評を得た小團次といふ世話狂言の名人が、かねてから、歌舞伎十八番の『助六』を上演したい希望を抱いてゐて、それを座附でもあり、自己の信頼してゐた狂言作者である黙阿彌——當時の河竹新七に告げた。然し黙阿彌はその案に同意しませんでした。何故といふに、市川家十八番の『助六』は柄を必要とし、名調子を必須條件としたものであるのに、小團次は本来小柄で、容貌も勝れてゐず、シヤガレた、引き立たない調子の人であつたからです。——でその替りとして、『助六』をぐつと世話にく



だいたいでよいふべき『黒手組の助六』を新作して、小團次に演出させたものと申します。

屢々舞臺の上に現はれる『三浦屋格子先の場』と『助六』とを比較されたならば、その世話化した加減乃至は類作たる所以が直に明白にされること、信じます。

○ 作者は『助六』をもじつた『三浦屋格子先の場』の後へ、『助六内の場』といふ幕を書いて、『助六』とは全く味の違つた世話場を書いてゐるのですが、今日の舞臺に於ては、全然それは閑却されてゐます。それは、地下の作者に聞いたら不本意に思ふことでせうが、『助六内の場』といふ世話場は初演以後殆ど上演されてをりません。

『今は清元によつて語られますが、『忍岡戀曲者』といふ滑稽な道行淨瑠璃は、最初吾妻路連中によつて語られました。吾妻路といふのは新内の一分派でした。

○ 三浦屋の格子先で、黒手組の助六に、『決して喧嘩をするな、刀を抜くな』と意見する紀國屋文左衛門といふ役があります。無論實説の紀文にそんな一節があるわけでも何でもないのだがちよつと大胆那らしい名前だから、さういふ名前が現はれてゐます。この紀文が助六に向つて傘を例にとつて短氣を戒しめ

ルにしたものだと言はれてゐます。

○ 津藤は先達で自殺した芥川龍之介氏の遠い祖先(?)にあつてゐるといふことで、二度お目にかゝつた時に、そのことに話し及んだこともありました。

○ 津藤は百萬の富を一代に散じたほどあつて、花街には粹士、文人墨客の間には通客、芝居には見巧者として立てられてゐたが、小團次と權十郎(後の九代目團十郎)とは役者中でも特に最良にして居たといふ。そこで抜け目のない作者は、津藤を舞臺に持ち出して御最良の權十郎にやらせ、津藤の取巻である俳諧師なども、端役に見たて、舞臺に出すといふやうなことをしました。それらのことも内外の評判に上り、人氣をあふつたものと考へられます。

○ 荒磯連など、いふのは、所謂連中見物の濫觴であります。それは多分この時あたりから津藤が權十郎の爲に催した連中見物の會名であること記憶してをります。(二、十二、十八)

○ 合本をなさる方の爲めに!!  
創刊號より第十三輯まで僅少乍ら殘本が御座います(但し第二號はなし)御入用の方にはお頒ち致します。定價參拾錢

道頓堀編輯部

# 私の舞臺効果の希望

福 隅 孝 一

これは近代劇に限られた譯ではないが、時代劇には、古來からの味だとか型だとかと云ふものがあるので、それを無理に破つてまで望むのではない、が出来る事ならば、一般の劇そのものに、應用したいと希ふのである。

音響——

これは是非劇になくしてはならぬものだ。その進化したものが、つまり從來からある囃子なのである。

現代劇にしろ、時代劇にしろ、この囃子がなくては寂しい。殊に舞臺上に現はれなくて観客に、隣り近所の状景を示すに、この音響——。

つまり、囃子に依つて想像せしめるのであるからである。

我が國の劇は、出雲お國が、幼稚な手古舞から歌舞伎劇になつて現在では、新派劇、新劇、翻譯劇と進化したのも、形は變つてゐても元々正せば根元は一つであるのである。

そこで近來徒らにリアリズムを主張して、猫も杓子も

それではいけない。

それでは理窟に合はぬ。等々、一つ／＼だんご理窟をつけて、こ

したならば舞臺効果はあると考へても、このリアリズムなるものが邪魔をして結局つまらぬものにして、観客の眼の先きへブラ下げる時が應々あるのである。

その弊實際はそうでない。

野原の眞中の舞臺で、ピン／＼と三味線を使つてゐる。

御殿がある。

ピーヒューリン／＼と笛やリンを使ふ。

風音と稱して、ド／＼／＼と太鼓を使ふ。

こんな矛盾した話が又とあるらうか？

私はこうした稽古にたづさはる度ごと、俳優がコネ廻してゐる理窟を聞く度ごとに、馬鹿々々しくなつて、何時も吹き出したくなるのである。

その點で時代劇の理窟を抜きにして、義太夫、長唄、清元、常盤津、哥澤等を使つて効果を現はす事は實に好いと思つてゐる。

それ程矛盾のある舞臺効果の表示のやり方ならば、私はいつそ、もつと思ひ切つたやり方で効果のあるものが好いと思ふのである。

舞臺の片方に大きな穴を明けて隙間だらけの、みすを張つた、動物園の様な感じのする囃子部屋から、獨吟であらう………奇妙な聲を張り上げられては堪つたものでない。

これを代ふるにボックスを利用しよう。氣持を誘動する爲めの三味線、鳴物には、オーゲストラを使ひたい。

感傷的な時に三味線の合方を、ヴァキオリンのソロで行かう。

散財ばやしの様な賑やかな所をジャズの様なので行かう。普通の場合、フォックストロットの様なもので………

こうして行けば範圍の狭い三味線の効果よりも、外國樂器の發達したものを應用したならば、効果絶大でなければならぬ理窟ではないか。

では、全然日本樂器を捨てると云ふのかと云ふと、そうではない。

三味線結構！太鼓結構！スリ鐘。笛。等々結構なのである。

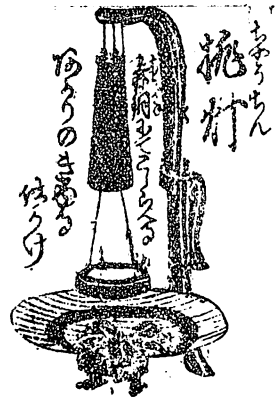
そこで、ユーモアの加味したものにすると和洋合奏等、効果がある、信ずるのである。

私は決してオペラや、キネマにかぶれたのではない。が、ヨリ以上効果が表現出来ると信じたならば、それを多く利用して差支へはないと思ふ。

ドラマ。そのものがリアリズムでないのだから一定の舞臺の上に約束された時間とセットに凡ての事件を運んで行くのである。

そして解決をつけて行くのだ。ドラマが、そんなのなら舞臺効果だつて、リアリズムで行く事は馬鹿氣話なのである。清元、常盤津、哥澤、義太夫、大いに賛成なのである。

だから、冠頭にも述べた様に型にはまつた從來の型物は我が國の尤も尊い劇として、永久に保存して置きたいのであるが、凡てが、それに型どつて進んで行く必要はないと思ふ。



# 成駒屋物語

(ラヂオ講話より)

日 比 繁 次 郎

私は——中村鴈治郎の舞臺裏、即ち、その日常生活ありのま  
まを極く正直に語つて、偉大なる藝術家生活の片鱗を窺つてみ  
たいと思ひます。

なる程、成駒家は舞臺で十八の水々しい若さをもつて見るか  
らに色ツほい、贅澤である、だから、その日常生活の態度もそ  
の若さを失はぬやうに絶えず努力を拂つて嘿かし華美で豪華な  
暮し向きをしてゐる事であらうと、誰しもさう想像するのにも無  
理はないと思はれます。とも角、さう考へられても決して不合  
理ではない。美しく若い舞臺姿を常任持つてゐる人なのです  
から。

だから例令不斷着にしても、一反八十圓もする贅澤なもの、を  
キツと三枚襲ねか何かにして納まつて居るにちがひないと思は  
れましやうけれど、これからがして大違ひ——今から、もう五

六年前に流行すたれたやうな御台か何かを着て平氣ですまして  
ゐるのです。

と言つて是を『成駒家は儉約家だ?』の『質素を旨とする松  
平越前守みたいだ』のと貶したり褒めたりする理由は少しも  
ないので、成駒家自身にして見れば、只、單に、華美を好まな  
い、それだけの理由で左うして居るだけの話で、至極自然な事  
なのです。

その點に於ては——樂屋の鏡臺からその裝飾を少しも飾らぬ  
のを見てもわかります。

是も成駒家として嘘のやうだが、實際で、これに就いてよい  
話が一つあります。

一昨年春、東京の歌舞伎座へ出演する時のこと。なにがさ  
て、東京では成駒家が久振りに上京すると言うので、種々歡待  
法を講じた思案の揚句が、成駒家の這入る樂屋を數奇好みにと

苦心を拂つて茶室めいた雑作にする、新しい疊と入替へて美しい客室が出来る。

ところで當人の成駒家は？と云うと扇雀君の持物である疊み込みの頗る輕便な化粧臺を、

『これがえ、ちよつと、貸しといてや』

と言つた工合、無關心に其れを提げて来て、相變らず縁の摺り切れた大阪で使つてゐる古い樂屋蒲團をボン！と据える。誠に世語の懸らぬ有様。

それほど樂屋の構造と較べて似ても似つかぬお構ひなさです。余人は知らず私は相變らず關はぬ人だと思つたのです。

それからこの水も滴る和事師、美しい成駒家のことだから、一體、平生どんな食物を攝取してゐるだらうか？の興味もお持ちでしやうが、これとて別段近所の料理屋から特別の賄物を毎日取寄せると言うでもない。それは酒を少しも呑まない所以でもありますが魚肉を餘り好まない。どちらかといふと芋、豆、豆腐といふやうな精進料理めいたものを好む人で食物にも殊さら趣味がない。めつたに自身で好みを云つたことがない。

それで居て此の名優は二十貫の體重と五尺六寸の脊丈がある。至つて健康で未だ嘗て醫者に手を執つて貰つた事がないと言ふ丈夫さです。

故人となつた渡邊霞亭氏と奥役の田村老人、それにこの成駒家の三人連れが、曾つて九州醫科大學へスタインツハの若返り

手術を受けに出懸けた事は未だ諸君の御記憶に残つてゐると思ひます。

これはその後日譚で最近成駒家自身の唇から發表されたのですが、その時、三人の内成駒家だけは手術を受けなかつたのです。

何故——と言ふに、榊博士が成駒家の生理的狀態を先づ診察した時、殆んど驚きにちかい調子で言ひました。

『成駒家さん、あなたの身體は三十年後の壯年者の骨格と同じである。若返り手術を施す必要は斷じて有りません。』

其處で博士の言葉どほり強つてとは手術を請はないで、一人成駒家だけは中止にした。それで居ながら歸阪すると、さも手術を完全を受けたやうに、例の調子で、

『まことに結構やつた。わたいのやうな年頃になれば、あの手術を是非、いつべんせんとどもならん。』

と非常に手術が利いたやうに喋りやいで居たのです。

そんなら、なぜそういふことを云つたのかといふとそこは成駒家の細かい心組みの嬉しい所です。

『その時、すぐに其れを言つてしまつては、なにがなし九州大學へ濟まんやうな氣がしたので、黙つてましたのや。』

と言つて居ります。噂の消えるまで知らぬ顔をして居たのも成駒家丈でないといふ出来さうにない禮儀だと思つて感心してゐます。

そんな譯で身體は至つて丈夫だから、喰物は氣さへ向けば何でも喰べる。こゝろの越くまゝ、ありのまゝです。只、氣さへ入れれば何でも喰べる始末ですから、豆腐でも美味く喰べるし氣分がすゝまねば如何なる珍味にも箸さへ着けないこともある成駒家は食物に關しても恙うして淡泊な人なのです。

成駒家は怎んな立派な住宅に起臥してゐるであらう？——宏莊な別荘にリンコンの自動車を手握つて、名優の生活だから自然とそんな風に想像されるのも無理からぬ話ですが、相も變らずたゞ住み馴れた玉屋町の寓居に、至つてじみに暮してゐると言うに過ぎません。だから、これを成駒家の生活態度を全然知らない人間が見たら、成駒家は質素を衒つてゐる。と言ひ出すかもしれないが、それは街ふのでも無ければ企んでゐるのでも無い。それが當然、それが本當の自分の生活だといふから思ひ決めてゐる成駒家なのです。

以上で中村鴈治郎の衣食住に關する頗る概念的な物語は終へたやうに思へますが、兎も角、舞臺上では華やかな繪姿になる和事師が、一度、足をその日常生活へ踏入れると、恙うしてまづしい程地味に毎日を暮して居るのであります。

何でも往古、成駒家が俳優として世の中へ出た當初に、非常に生活に貧窮して、母と諸共見る影もない暮向きをした思ひ出がある——それを永久に忘れることがない、と成駒家自身が誰しもに語る回舊談をしのべば、或は、この質素な生活態度を黙

つて敬虔に頷くことが出来ると思ひます。

それから此人の趣味について申しますれば、書や譜もやりませんが、樂屋内で流行する冠句のやうなものも堪能です。その外いろ／＼ありますが、いづれにしてもその趣味に没頭するなど、いふことは全然ないのです。

それならば何が一癖好きか、熱心に打込んでかゝるものは何かと云ひますと、それは即座に答へることが出来ます。芝居です。藝の上のことより他にはこの人が打ち込んでかゝる何物もないのです。即ち藝がその生活の全部であります。

私が木谷蓬吟先生から、お伺ひしたお話を申上げて、わざと私自身で見たり聞いたりする實例は申上げないことにいたします。

それは藝に對する熱心と、俳優としての心懸けと、日常生活に無關心であるといふ三つの實例になるい、お話しであります。

かつて、何かの興行の時、稽古中その脚本の難解である點から遂に原作の近松ものを引張り出して讀んで居りましたが、どうも思ふやうな解釋がつかないので、木谷先生を訪問してその點を教はらうとして

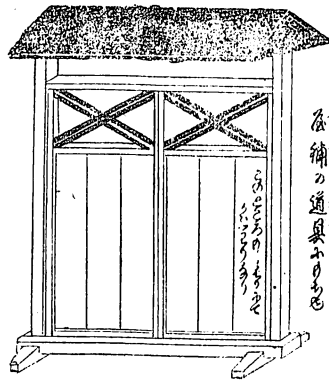
或日供をも連れず飄然と、木谷氏のお宅を訪ふたのです（その當時木谷氏は岸の里の驛の近くに居られたと思ひます。

座敷へ通して挨拶を交はしてゐるうちに木谷先生はふと鴈治郎を見られると、手に手拭を一筋もつてゐて、それを丸めなが



ら懐ろへ押し込みました。その手拭はいまの先まで往來を歩いてゐた成駒家の首にその手拭を押し込み、初日を前に控へて、風邪をひるてはならぬから往來で手拭を出して巻いて來た

こまの庄屋代官の  
高谷の道具の道具ありあ



## 道行初音旅路に就て

高 谷 伸

といふ云ひ譯をしながら失禮を詫びてゐたのです。で木谷氏はその日数時間の藝術談をまことに感動のふかい態度で語りつけ得られたのは愉快であつたと申されて居りました。

戀と忠義はいづれが重い、かけて思ひはかりなや、忠と信の武士に、君が情けと預けられ、静に忍ぶ都をば、跡に見捨て

といふのは、延享四年十一月十六日初日大阪大西の芝居竹本座の操りにか、つた『義経千本櫻』の四の口『道行初音旅』の冒頭であつて、作者は竹田出雲、三好松洛、並木千柳の三人である。

それが好評であつた、めに、翌延享五年の五月には江戸中村座で歌舞伎に移植され、大阪でも寛延元年八月には嵐龍藏座で上演されてゐる。これらはすべて殆んど通して全體を演ぜられたものであるが、近年では序の川越上使、二の渡海屋、三の樵の木と鮎屋、四の道行に御殿など、それ／＼別々に上演されるやうになつた。これは最後まで通し狂言としての生命を保つた忠臣藏でさへ切り離されて行く現在としては、止むを得ない成り行きで、寧ろ上演数の多いことを喜ぶべきであらう。

中にもこの『道行初音旅』は獨立した舞踊劇として固い地盤を持つてゐる。作者としてこの段にはかなり自信を持つたらしく、本筋に縁の薄い義經の名を千本櫻に冠したことは、その名が歴史上に大きいためばかりでなく義と經との音訓兩讀からヨシツネをギツネとかけ源九郎狐といふ洒落におとしたと思はれる點が明らかである。忠なるかな忠、信なるかな信といふ序詞の一節や、忠と信の武士などの技巧を参照すると、この關係や、作者が忠信といふ人物に本篇の力點を置いてゐたこともかなり察せられる。

この忠信を書くに就ては、いつも京都から多く材料を得たりまた野崎の船頭の名を逆櫓に應用したりする機智に富んだ出雲が、京都相國寺で死んだ住職宗湛の妾をかり、思ひ出話として源平合戦を如實に語つたといふ宗湛狐の傳説などを、うまく取り込んだのではないかといふ相像などを、めぐらすと殊に面白いものがある。また、忠信の衣裳としてお定まりの源氏車の紋が、狐と人との趣向の底を割るまいために、お定まりの寶珠を避け、書卸しにこの場を語つた竹本政大夫の源氏車の紋を用ひたことが後世に残つたなどは初代冠子の二つ巴の紋の逸話などと共に、作中の人物と所演者との關係が忍ばれてなつかしい氣がする。

これが歌舞伎に移され長十郎小傳次などに演ぜられた時は、

勿論義太夫地で演ぜられたものであつたが、上演ごとに一部の趣向を替へることを誇りとした狂言作者はいろ／＼の手を入れたものであつて、『海に兵船平家の赤旗 陸に白旗』の物語の如き、押しも押されもせぬ名型もできたが、かなり蛇足も加へられた。早見の藤太も通し狂言の場合は吉野山でなく稻荷山で腹ペコになつてゐることもある。

常盤津の吉野山道行は寛政六年五月河原崎座で『風流時鳥花有里』を文字大夫が語つたのに始まり、役者は四代目半四郎と小佐川常世で、富本は富本豊前大夫の『養菊蝶初音道行』文化五年五月中村座の三代目歌右衛門と四代目菊之壺所演が始めてこれが清元に轉用されてゐる。

菊五郎羽左衛門などの演ずる型が現今では典型となつてゐるが、大阪では縫ぐるみの子狐がさんざ藤太を玩ぶ型が多く用ひられる。この型は藤太の役はよくなるが、忠信中心の本流から見ると脱線である。巖笑の道行は忠信と藤太の二役早替りである。

しかし、これなどはまだ罪の軽い方で、嘉永六年の顔見世に細工師の松朝と呼ばれた尾上多見藏の千本櫻は延若右團次も三舍を避ける奴で、その頃の『劇場の噂 嘉永六年 評判記』を見ると

南側芝居は尾上多見藏座頭にて無人にて大入。狂言は千本櫻に知盛の幽霊白骨の仕組辨慶能登守與市織信忠信景清お

染に久作大出来源九郎狐よくて居て飛上りらんかんつ  
たひ早竹も舌を巻ますかと存じ升(下略)

とある、何しもの物語りの掛りにドロくを打込み忠信が切穴へ消えると、吉野山の舞臺が屋島になり、三保谷が大ぜいを相手に立ち廻り花道へ行きかけると、早拵へで景清になつて呼留め銀引の型でせり下ると、遠見の繼信が義經の轡をとつて出るのを早替りて能登守教經が揚幕から出て、強弓で射留め花道の切穴から入ると、手負の繼信になつてせり上る。雑兵を相手に無念の逆懐、鎧と矢の根を忠信に渡してくれと落入ると、それを奈落へせり下け、元の吉野山の舞臺にして静か居眠つてゐる側に縊ぐるみの狐が癡てゐる。そこへ多見藏がもう一度忠信になつてせり上る。

といふ有馬筆のやうな出たり入つたりの頻繁さ、今なれば映畫の技巧を舞臺へとり入れたと嗤はれるところ、物語の内容を一々見せ繼信の落入りがクローズアップで現れるなど、いふ所を八十年前にやつた多見藏は確かにマキノ省三より偉いには違ひないが、怖ろしい芝居である。しかもこれが大當りで向ひの北側の芝居で一世一代で演じてゐた海老藏の忠臣藏を壓倒したといふのだから馬鹿にならない。早竹も舌を巻きますといふらんかん渡りには最近まで澤村源之丞といふのがあつた。ケレンと觸込んでかゝる源之丞の忠信は變り種ではあるが道行よりも今言ふ御殿が賣物で、大芝居にも右團次の見臺抜けといふのが

ある。源之丞もその後死んだらしく今地方を廻つてゐる紀國屋源之丞といふのは、先年見たのとは別人であつた。もう一つ變り種では嵐橋香がある。調子はわるいが達者で、道行の忠信、葛の葉、小笠原狐だのといふ狐ばかりを得意にしてゐる。廿四孝もやるかも知れない。この忠信もかなり荒れてはゐるが、ちよつと面白い味がある。

秋の温習會で祇園の井上流の道行を見たが前髪のかづらが踊り手の寸の無いのと共に權八じみて源氏車の模様が無いと間違へさうであつた。振は歌舞伎とはすつかり違つて地味であつた。地は義太夫で本文に近いのが流石にみやび會系らしい所があつた。

以上の外に自分の目に觸れたところは大阪の若手の珥藏や政治郎のがある。政治郎の忠信に大まかなところがあつて、前途を望ませた。

長三郎の忠信は五色座の第一回が初演だつたと思ふが、時間に遅れて見落し、神戸の時も見なかつた。しかし大變好評だつたやうである。

幸ひこの正月に出るといふことを聞いたので、大いに期待してゐるところ、古人の長をとり、新人の短をすて、大に奮勵して貰ひたいものである。

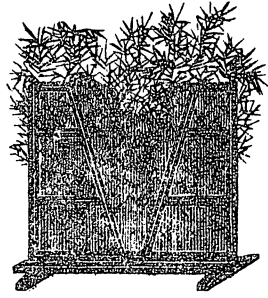
×

×

×

×

初平の  
裁た  
裏の  
圖



# 鴈治郎の一年

山上貞一

過去一年間、即ち昭和二年の中村鴈治郎の舞臺を調べてみた。一月は中座で『敵討 檻襷錦』で春藤治良左衛門と『核久末松山』で『梶屋久兵衛』二月は中座で『一の谷 敏軍記』須磨之浦で敦盛と『時雨の炬燵』で紙屋治兵衛、三月は東京歌舞伎座で『双蝶々曲輪日記』で南方十次兵衛と『九十九折』で手代清七。四月は同歌舞伎座で『南部坂』で大石内蔵之助と『時雨の炬燵』で紙屋治兵衛。五月は中座で『鹽原多助経濟鑑』で鹽原多助。六月は神戸八千代座で『仙臺一の細川勝元』と『心中紙屋治兵衛』河庄の場の治兵衛。十月は中座で『明暗 縁染附』の加藤民吉と『心中二枚繪艸紙』で長柄村市郎右衛門。十一月は中座で『繪本太功記』の武智重次郎と『本藏下屋敷』の桃井若狭之助、廓文章で藤屋伊左衛門。十二月は京都南座で『双蝶々曲輪日記』の南方十次兵衛、『勸進帳』で富樫左衛門、『繪本太功記』の武智重次郎、『藤十郎の戀』の坂田藤十郎等、

七八九の三月を休んでゐる以外は壯者もおよばぬ大活動である。さて一年間の鴈治郎の出し物と役に就て考察してみると、右の内で『時雨の炬燵』と『双蝶々曲輪日記』と『繪本太功記』の三つは重複してゐるが、約十七狂言、十七役であるが此の内、書卸しものと言へば『明暗 縁染附』一つである。鴈治郎と新作に就て随分とかくの批判があるが本年は實に意外とする程に少な過ぎる。毎年二つか三つは新作上演が試みられて來たと思ふが、常に眞摯なる努力の割に好評を得ずに終ることが多く、ために新作上演を封じやうとの説まで出たくらゐであるが、心あつてか本年はその輿論を參酌したかに思はれる。

そこで新作上演を控えた鴈治郎の一年を顧るとどうか。大別私は次のやうに分けて考察したい。『敵討 檻襷錦』と『本藏下屋敷』と『双蝶々曲輪日記』は淨瑠璃物より鴈治郎が特に熱演を重ねて自己の藥籠中深く秘藏した狂言である。又『梶久末松山』『時雨の炬燵』『廓文章』『心中紙屋治兵衛』河庄等は寧ろ上

演じないのが不思議であつて、嘗に鴈治郎の十八番に止まらず大阪劇場の至寶である『嫩軍記』の敦盛と繪本太功記』の重次郎は老ひても色艶のうせぬ鴈治郎を前髪姿で見やうといふ鴈治郎に執つては或は迷惑な事であり、観客としてはあまりに稚氣に類する惡趣味である。以上の三つの分類に屬する狂言なり、役は今日まで鴈治郎の永き舞臺生活上いかに濃厚な色彩であつて、鴈治郎を知るほどのものは必らずこの三色の中の一色若くば二色、甚だしい時は三色さながらにづれの狂言なり役にもにじみ出ることを知るであらう、鴈治郎の藝術とはこれである。個性とはこれである。

だが私はこの名優をそう單純に解釋して足れりとはしない。即ちそれは右にあけた以外の狂言と役に就て考察してみたい。ある外國婦人が危かな日本語で鴈治郎の大石内藏之助のしかも四段目の駆け込みの背後姿を見て、これが鴈治郎を見た中で一等よいと言はれて驚いたことがあるが、鴈治郎は單なる和事師ではなく、大石内藏之助系統の役柄即ち栗山大膳、少々貫碌は異なるとしても『仙臺』の細川勝元、土屋主税、それに唐木政右衛門、武部源藏等に無類の味を見せる。これは鴈治郎の實直さと熱演とが動かせない役柄の性根を握るのであつて、上眼越しに睨めつける眼のかまへや、惡聲ながらも言葉尻を引いて臺辭に餘韻をこめやうとする等の所謂技巧の力ではない。だから内藏之助でも明渡しや茶屋場よりも切腹場がよく、山科閑居よ

りも南部坂がよいことになる。動じて後の静けさを保つことは仁左衛門の方がよいかも知れぬが静より動に入らうとする刹那に鴈治郎の藝術はひらめく『藤十郎の戀』に成功する由縁でもあり、また『藤十郎の戀』の中でもお梶をくどく點に力點をおいた由縁だとも言はれる。『勸進帳』の富樫は鴈治郎としていゝ、出來のものではない。この意味より言つてもワキ役の人でなく常にシテの人である『本藏下屋敷』で本藏がシテの如くして結局は若狹之助のものであるが如く『土屋主税』でも大高源吾若くば晋其角がシテに廻らねばならぬ狂言廻しに拘らず土屋主税のものであるが如きは鴈治郎の藝術を最もよく語つてゐる『九十九折』は大森痴雪氏の新作中所謂鴈治郎の三色よりかなり離れてゐて、それでゐる鴈治郎のツボのはづれてゐない傑作である常に二人の女に擁壁されて惱む男が此度は一人の女の爲めに身を亡ぼすのである。それに配するに決して意見をする男でなく惡にそ、のかす女の情夫があるに到つては鴈治郎劇としては實に異常な大膽な作である。

最近大森氏は鴈治郎の新作について、若からぬ主人公を鴈治郎にはめることにされたことが二三回あつた『室津の歌』の如きその例であるが、どうも鴈治郎は永遠に若い人であることに依つて此人の生命は躍如と活動するかに思はる。それは常に老ひたる鴈治郎を見ないからであり、又敦盛、重次郎が歓迎され

(青年俳優隨筆の最終に續く)



# 玩辭樓漫筆

中村鴈治郎

いかに時代が新しくなりまして、子供が大人になりましたやうとも、お正月といへば、なんとなく、身も心もあらたまつたやうで、毎としのことでありながら、めづらしい氣して、なんとなくよろしいものです。

芝居の方では、たゞいまこそ、かうして正月の二日早々から興行がはじまりますが、その昔は極く小芝居のほかほめつたに正月早々の興行などは無かつたもので、凡そ一月は遊んでくらし居りました。もとよりそうふ生活ののんびりした時代ですから芝居にかぎらずたいいての商賣も職人衆も松の内はあまり仕事はいたしませんそれに反して正月の賑かなのは廓です。私の子供の頃は新町の扇屋といふ大茶屋に育ちましたので、正月の行事はいろ／＼と頭にのこつて居りますが、もうたゞいまで

は大方は廢つてしまつて居ります。

子供の頃と申せば、その時分扇屋の臺所には酒造家を使ひます、あの大きなこきんといふ酒樽が据えつけてありまして、その隣りに抱への太夫衆の下駄箱がありまして。この下駄箱は何人のも太夫の下駄が一段々重ねてあるものだけに酒樽の大きさとおなじほどの高さです。私はその頃いたづらをしては、よくきびしい祖母に叱られることがありまして、祖母の一聲を聞きますと、私はひろい家の中を馳けながら逃けてまわつたもですが、ある時ふと女どもに追はれて逃げ場を失ひ、この段々に重ねてある下駄箱へ登りまして天井へつかへるばかりの高さまで登りつめまして、隣りのこきんの蓋を動かして中を見ますと、中には白米が一ぱい入つて、八分目の頃





合ひの處まで來てゐます。その米の上へこつそりと隠れて、女どもに見つからぬやうに息をこらして居りました。さすがにこゝまでは目が届かなかつたものか、首尾よく目的を達して、いたづら小僧の冒險が成功したやうなわけです。私はその後この下駄箱を登るおもしろさ、人に見つからぬやうに身を隠すといふ愉快さに、いつもこの手段を用ひて居りました。

◇ こんど中座の演し物にあります、あの山科閑居を始めて京都の明治座で出しましたのが明治三十六年の六月です。それから二十五年も前のお話です。その後何回となく出して、どうやら御評判を頂いて居りますが、それでも書卸の時は随分と苦心をいたしましたもので、ほんとうは、その前月の五月に上演することになつてあつたのですが、どうしても舞臺上の工夫がまとまりませんので、知らずくゝ日を過ぎてしまつて、六月になつてしまひました。勿論ひとつは、その頃としては珍らしく、二番目に据えました『おかん長三』御承知のお半長右衛門の六角堂へつゞく、因果關係の増補物です。そのおかん長三が其筋の許可にならないのです、いろくゝと交渉はいたしましたもの、遂に上演禁止といふ災厄です。山科の工夫はつかず、おかん長が許可にならないとして見ると

勢ひ狂言を替へなければならぬといふ破目になりました。でも山科はそのまゝ、研究をつゞけて、どうやらかうやら滑ぎつきました。おかん長の方は團七茂兵衛、狂言と搦ぎ替へまして、やつと六月に入つてから開場することが出来たといふ始末です。山科に限らず、最初の上演にはいかなる狂言でも相當に頭をなやましますが、二度三度と上演の度毎に、どうやら纏まつて行きますやうなわけ、その間の完成までいろいろ御助力を賜ります。後援者や御ひるきの有難さはその都度しみぐ思はれます次第です。

明治二十五年(辰年)正月興行の道頓堀各座  
狂言と出演俳優を御紹介いたします。

角座 狂言は『假名手本忠臣蔵』大序より七段目まで切狂言『近江源氏』先陣館、俳優は原治郎、巖笑、多見之助、徳三郎、鶴助、琥珀郎、巖童、璃寛の一座にて原治郎は由良之助、本藏、定九郎、伴内、盛綱、我童は和田兵衛、璃寛は微妙の一役つゝなり○中座 昨年十二月廿八日より三日間菅江戸にありし翁並び後に市川家は仲色の上下女形は野郎帽子を戴き舞臺に居並び後に座頭は一月狂言の大名題小名題役人替名を讀立たりと僭狂言は一番目『菊會朝日の盃』大阪朝日新聞の續きもの、中幕『石田の局』片岡我當の出しものにて別番付を出せり(是は嘉永年中河原崎座にて海老藏の演じたるものなり)二番目は『男作意氣記野晒』醉善提の野晒悟助尾上幸藏が御目見得狂言なり、一座の俳優は延二郎、市藏、源平、田之助、吉三郎、松朝、片市、我當なり○浪花座 一番目『伽羅先代萩』中幕『天目山』二番目『蘭守縁結目』大阪毎日新聞の續きもの、淨瑠璃鶴模様五變化粉、鶴之助が五變化の所作事なり、俳優は彦十郎粹鶴之助、袋助、勝之助、仲榮次郎、松蝶、葛之助、勝之助改め嵐舞助、等なり

芝居ものがたり

小 梶

丸

しろ・べいじ

黒い瞳に涙が一滴。

轉寢の夢路に人の逢ひに來し、  
連歩の跡を思ふ雨かな。

晶子夫人の歌そのまゝ。

小梶の瞳は愛を追ひ、  
小梶の瞳は戀しい影を追つて居た。

「小梶、小梶……」

四邊を憚る人聲に、ふと小梶は眼を上げた。

欄干に近い堀江の上に、櫓の音を忍んだ小舟  
が一舩。

中には眉の美しい町人風の若者が――。

「アツ、主は常さん――」  
思はず發した大聲に、小梶はハツと驚ろいた

でも座敷へは遠い此の部屋、人に聞えた氣配  
もなかつた。

男の瞳に安心が見え、  
小梶も胸を撫で下した。

此の若者こそ、  
小梶が絶えざる戀の形、

二世を誓つた常二郎であつた。

その頃――

堀江花街には、黄金の雨が降つて居た。

夕に駕籠を乗りつける客、

朝に船で歸へる客、

三味線の音が撥が冴へて、

廊行燈に情緒があつた。

此の廊内で花屋と云へば、五指に屈する大鉢

堀江が望む一角に、と云ふよりも堀江の上に

建てたと云ふ方が適當して居る程、座敷が水面

に浮いて居た。

その花屋の下座敷の、欄干が水に近い椽側に

當時、廊で一二の余盛、

歌舞の菩薩の名の高い梶原の遊女小梶がポツ

ネンと――  
空は灰色に  
堀江の水は紺青に、  
その紺青に解けて行く、小さい雨が降つて居

た。

切れの長い艶な瞳、

通つた鼻筋、おちよほ口、

かてゝ加へて昔流行の瓜核顔の美しき。

その花精に等しい小梶が、

何故かもの憂げにたい一點を凝視して居る。

紺青の堀江の水か、

あらず、

空の灰色か。

さなくば小さい霧雨か……。

ギイ、ギイ、ギイ、  
堀江を通ふ櫓の音が、哀愁の心をそより、小

聲に流す船唄が餘韻を残して消えて行く。

それでも小梶は動かなかつた。

富士の額に悶えの影が、

密會。

戀する者に取つて、是程楽しいものが亦あるだらうか……。

人眼を忍ぶ胸の鼓動、

逢ひ見るまでの瞳の震へ、

それらのものはすべて戀する者によつてのみはひ得る天賦の快樂である。

だのに、小梶は泣いて居た。此の快樂を前にして、瞳を涙に濡らして居た

戀は陶酔である、

戀は決して苦惱ではない。

それこそ無上の陶酔である。

モルナールの言葉に、そんな事があつた。

だのに小梶は泣いて居た。此の快樂を前にして、瞳を涙に濡らして居た

陶酔と泪、

戀は果して苦惱だらうか……。

長榮丸の荷主友右衛門は、寛潤無類な男であつた。

彼は小梶に戀慕して、朝露夕の嫌なく廓の酒に目を送る伊達好みの海兒であつた。

己が愛する小梶の爲めには、金銀は愚かな事船も荷物も、名も命も、捧げ盡した戀兒であつ

た。

「高が遊女にそれ程の……」と、世頭始め水夫達の諫め言葉も耳にはなく

たい小梶愛しさこ、初めて知つた戀心を、慰はりつくす彼であつ

た。それ程の戀も、小梶の心には微動だに起きせなかつた。

たい、柳風と受け流すのみであつた。道理こそ、彼の女には比翼の仲の常二郎が

。小梶の心が堅ければ堅い程、友右衛門の心に

理性が消えた。彼は、今では小梶なくしては生きて行けない

哀れな戀の奴であつた。

海の人にも仕事があつた。長榮丸の出帆が、間近に迫れば迫るだけ、友

右衛門の心は焦り出した。どうにもならない小梶の心を、自分のものにしたかつた。

陸地でなければ海上で——。だから彼は、小梶の身受をしようとした。

船頭達は嘩然とした。

餘りに馬鹿氣た友右衛門の心が、情なかつたでも、どうする事も出来なかつた。

それにも増して驚ろいたのは小梶であつた。身受け、身受け……、嬉しがるべき身受け話も、對手が情人であればこそ。

だのに對手は船乗りである。一度陸地を離れば、板一枚下は地獄の大海原——。

戀し愛しい常二郎や、可愛がられた廓の人に、再び逢へぬ運命なれば……。

小梶は泣いた。涙が枯れる迄泣いた。

それでもまだ泣き足りないやうに思はれた。それ程悲しい小梶であつた。

今宵は愈々身受けの當日。小梶は朝から落着がなかつた。

友右衛門の高らかな笑が、彼の女の胸には悪魔と聞えた。

彼の女は時の経過を怖れ乍らも、ひたすら常二郎の來るのを待つて居た。

今宵を最後に、此の世の中から消滅する爲め

戀は苦悶である。  
戀は刹那の歡樂に、長い悲痛の尾を曳くものであり、その最後には死の影が宿つて居る。誰かそんな事を云つて居た。

丁度、現在の小梶には、戀は陶酔ではなく苦惱であつた。  
そして死の影さへ宿つて居たのだ。

灰色の空は、すつかり暮れて、何時の間にか、霧雨は上がつて居た。けれども小梶の心には、泪の雨が絶えなかつた。

戀の二人は、運命の無情に泣いた。遠くの沖に泊つてゐる船の灯が淋しく光る。

「えい、不義者ッ！」

闇をつんざく憤怒の聲に、抱き合つて居た戀の二人は、縮んだ手をば左右に離した。

と、見ると長榮丸の友右衛門、太刀に反を打たせて、小梶は観念した。

常二郎も覺悟した。

どうせ生きては添はれぬ二人であつた。ならば其々屍を重ねて死にたかつた。

「見つけられたら、是迄ちや、荒氣のお前達は此のまゝ歸へしはすまい、私も女を捨て、歸らうとは思はぬ、さ、その刀で斬つてくれ。」

「おゝ、望み通り腹の癒るまで斬りきぎんでやる、覺悟せい……」

叫ぶと等しく鞘を走つて、飛電一閃、常二郎に……。

「アツ、待つてッ……」

裂帛の叫聲をあげて打下さんとする刃の下に身を伏せたのは小梶であつた。

「えい、退け、退かぬとおのれも一緒に殺すぞ！」

「おゝ、本望ぢや、さ、斬つて下さんせ、思ひ合ふた二人があゝの世まで一緒に行動するれば本望ぢや。」

小梶の瞳は晴れ渡つて、未來を願ふ悦びが

「よう云つた、小梶、これで思ひ残すことはない」

友三郎の聲が喜悅に震つた。

「死ねば二人の世になるのぢや、斬つて」  
戀の二人は限日した。

彼等の顔の何處にも、死の悲しさは見えないかつた。

「戀愛を護り得た、尊い法悦があるばかり」

その時、友右衛門の心に理性が歸つた。

自分は馬鹿だつた、是程愛し合つて居る二人を如何して引放す事が出来よう。いや、俺だけ

ではあるまい。誰の力でも引放す事は出来まい彼は悄然として刀を鞘に納めた。

そして無言で去らんとした。

「もし……」  
小梶の聲が不審さうに……

「ウム……」  
振返つた友右衛門、淋しさうに眼を伏せた。

「許さう、俺が悪かつた。俺の心が足りなかつたのだ」

「えい……」  
二人は仲良く暮らして呉れ、俺は淋しく論めよへ。」

流石に言葉が、泪に濕つた。

「だが小梶、お前の名だけ俺に呉れ、俺は、お前の持船長榮丸を改めて、お前の名をそのまゝ、小梶丸としよう。それがせめてもの慰めぢ

新年 たつの俳句

「や……」  
 小棍も常二郎も言葉がなかつた。  
 友右衛門の心を察する時、二人の心は暗かつた。

雲が破れて満月が、  
 燦爛として海は宛然銀に――。

「月が出た、二人の行く方は明るからう、海も穉からしい。」

小棍……、イヤ俺の小棍丸も、  
 今宵からまた波の上だ……。」

銀の波の上に、真白い水鳥が一羽二羽。  
 主は正宗、わしや錆刀、主は切れてもわしや切れぬ……。

堀江を下る哀調の舟唄……

濁々たる餘音を引いて、  
 ギイ、ギイ、ギイ、  
 軋る槽音も、もの淋しう……」

戀――。  
 それは果して苦惱であらうか……。(了)

X X X

京四條の顔見世に去冬出勤の俳優諸氏  
 はいづれも正風三桃社の同人なり昭和三  
 戊辰の新年を迎へる爲め即詠されしを選  
 して左に

(催・みやひ會投)

千種堂婦娥宗匠選  
 題 新年たつ詠込

並び立つ國旗豊けき初日哉 龜 鶴

右天位 中村鷹治郎

高き屋に煙もたつや初日の出 錦 升

右地位 松本幸四郎

秘め言のよき日につねむ初曆 三 雀

右人位 中村 福助

初市や籃の香のたつ長暖簾 扇 舍

尾上 梅幸

年立や太古に似たる草の家 魚 虎

市川 蝦十郎

鶴立て満園の初日輝けり 五 色

林 長三郎

人形の絹たつ妹や縫初め 春 虎  
 中村 扇雀  
 初春や炬燵の上の小酒盛 箱 猿  
 市川箱登羅

元朝や神の灯にたつ吉丁子 蝶 升  
 市川 市藏

元信の龍の畫古りて福壽草 芦 燕  
 片岡 我童

○追加

人氣立つ歌舞伎豊かや去年今年 婦 娥

寄贈雜誌

美容とキノマ 演劇藝術

エレガンド 演劇改造

舞台評論 紅隈歡語

實業 實業之大阪

淑女 シネマ・ランド

番傘 文珠蘭

川柳きやり

(芝居物語)

勝者敗者

福 隅 一 孝

戀は瞬間的のものであると、或る人は云つた。

然し、それは本當だろうか？

本當ではないだろうか？

個人々に依つて、人々の境遇に依つて、経験に依つて、それぞれ違ふであらう。

茲にそれをどう解いて行くか、その物語りが始まるのである。

× × × × ×

足を踊らせ、心を騒がせるジャズバンド。

舞踏會の夜は可成り更けてゐた。

——或るホテルの一室——

「二人でかうした處を、人に見られるのがお厭なら、かうして此處を閉ぢて置きます。」

柴田は、光子をこの静かな一室に伴つて来て、扉に錠をかけた。

光子の驚愕。

『いけません〜錠などかけては！……あ、どうしよう——』

柴田は、光子のこゝろ來る事は元より承知だつた。が、そこは大眞面目で歎願する様な態度をとつた。

『二十分、いや十五分、たつた十五分

……光子さん、僕は貴女と斯うして二人つきりでお話しの出來る機會を、どんなに待つてゐたでせう。僕は二ヶ月も待つてゐたのです。毎日々々待つてゐたのです。が遂ひにその機會が來なかつて、光子さんを、無理にかうした部屋にお連れ申したことをお詫し下さい』

光子はほとんど當惑の體である。

『あ、どうしよう、後生ですから開けて下さい。私を行かせて下さい。』

部屋から出ようとして光子はハンドル廻す。

「たつた十五分です。十五分の御辛抱です。さアそんなにお急ぎにならないで、僕の話聞いて下さい。』

『い、え困ります。お願いですから戸を開けて下さい。』

『あ、僕がこゝまで惱んだ事が貴女に何のねうちもない事なですか。』

柴田は極度にしほれて見せた。

『開けて下さらなければ、私し大きな聲を上げなければなりません。』



柴田はもう自暴自棄の形である。

「お上けになつたら好いでせう。何もお断りになる必要はありませんよ。怒るぞと断つてから怒る人はありませんからね」

光子は呆れた。

「まア……」

この一言より外に出ないのである。柴田はもう勝ち誇つて凱歌を上げた。

「若しホテルのボーイでもお呼びになりたければ、その壁にベルがある筈ですよ」

光子は絶體絶命である。

「そんなに私を侮辱しないで下さい。どなたか扉を開けて下さいまし、もし」

ドン／＼。——扉を叩いた。

外からは幽かに、人々の浮かれて足並み揃へるジャズの音が流れて來るのみ。

「そんなに意固地になつて騒ぎ立てなくても好いでせう、僕は力づくの亂暴をしようとするではありません。かうして貴女に頼んで居るのです。貴女の優しいお心に縋つてゐるんです」

「でも私、誤解を受けたくありません」

「戀人同志が一つの部屋にゐる事が、何故人から誤解を受けるんです？」

柴田は皮肉な視線を光子に送る。

「戀人同志ですつて？」

この意外さに眼を大きく見張つて柴田の方に直つた。

「そうです、戀人同志です。互に心の底で總を許し合つてゐるのです」

「知りません！」

振り向いてしまつた。大ぶん御機嫌を損ねた様である。

柴田は亦、話の方向を轉じた。

「あ、いくら哀願しても駄目か、ねえ光子さん、僕は野人です。だから僕は戀愛に器用な技巧を使ふ様な眞似が出来ないのです。眼や、そぶりであなたに傳へるやうな事が、不得手なのです。小川のように毎日手紙を書く様な利口な手段が執れないのです。」

光子に取つて意外な言葉である。

「え、小川さんの手紙……あなたは御存

知なんですか？」

「此處だ！」

「しめた！」

柴田はもう女の氣持を充分捉へた事を自覺した。

そして尙も、一本氣な青年らしい口調を裝つて言葉を續けた。

「戀するものは敏感ですからね！……あなたが時折は返事をお出しになることも知つてゐるのですよ、それを知つてゐながら、僕はあなたの事が思ひ切れず、人知れず苦しい思ひに惱んでゐたのです。」

「でも、でも、あたし、小川さんに戀してゐると云ふ譯ぢやないんですもの」

光子の心は一步柴田に近づいた。

「それなら僕を愛して下さい」

「それは……それは……」

「谷底につき落された男は、どんな手段を選んでも、よぢ登らない譯には行きません。」

光子の恐怖——。

「そんな恐ろしい事は被仰らないで、あ

、あたしを行かせて下さい」

光子は亦もドンノと扉を叩いた。

柴田は一步近づいたこの氣持を逃すまいと、扉の前に立ち塞がる。

『あ、あの誰か……』

柴田は巧みな戀の手段に電燈のスイッチを捻る。

『何なさるのです？』

暗黒になつたこの一室に胸のおのゝき心臓の高鳴りの響

『静けさの中で、貴女の烈しい吐息が聞

きたいのです。』

突然柴田は接吻を求めた。

『何をなさるんです！』

光子は烈しく振り拂らつた。

柴田は力なくソアアに倒れて泣き出した。

光子の心は柴田に二歩三歩近づいて來

た。『あの柴田さん、悪く思はないで下さいね』

柴田は嗚咽を續けて

『結局、女には男の真心や熱情は解らないんだ』

四歩！五歩！

本當に私をそんなにまで思つてゐて下さつたのですか』

女らしい誇りが、始めて優しい言葉に變つた。

刹那！

七歩！八歩！、女の危機は近づいて行く。

『いや、もう私は諦めます。その代りせめてもの思ひ出に、あなたの身についたものを一つだけ私に恵んで下さい。それが何よりもの慰めです』

『さう、ほんとうに悪く思はないで下さい』

光子の手から、メタルを渡された。

『それから今一つ、美しい貴女の足に接吻させて下さい』

女王の様に勝ち誇つた光子は、何れにしてもこうして望まれる事は嬉かつた。

『二人は親しいお友達になつたんですか

ら、手になさい』

『手では勿體ない氣がします、どうぞ足に……足にさせて下さい』

光子は遂ひに靴を脱いだ。

足に接吻をした柴田の顔は生氣がついた。そして大きな聲で萬歳を叫びたかつた。

激しい口づけに見るゝ光子の眼は狂

ほしい恍惚にうるむ。

『あ、私はどうしよう、胸が震へます！』

光子は九歩！十歩！遂に柴田の前に屈服してしまつたのである。

ゴツ／＼

ノツクの音！

光子は極度に驚いた、が、柴田は時計

を見ると豫定の十五分間に、小川の來た

事を知つたのである。

眞逆と自信を持つてゐた小川は、この

室内の情景に驚かされた。

『お、靴だ！貴女は靴を脱いでゐる。そ

してこの暗さ。もうこの上に何の説が要

らう。あれ程までに信じてゐた貴女が、僅かに十五分で、あゝ……」

小川が戀人のこの有様に絶望のどん底に突き落された。

柴田は今までとは急に態度を變へて感と勝利者の様な反身になつて、

『どうだ小川君、僕の勝利だよ。狼狽しちやいけな。言ひ出したのは君だ。僕はたゞ、君の自信ある挑戦に應じて光子さんを試したただけだ、だが、君が難攻不落と信じた婦人も二十分でこの通りだ』

柴田と小川は論を始めた。

小川は、

『女は何時も身を護つてゐるから二十分や三十分で物にならない』

と、柴田は、『そうではない』

『ぢや論より證據だやつて見ろ』

『よし、それなら君の戀人である光子さんを物にして見せる』

この論の結果が、こうなつたのである光子は、今の事が氣紛れな遊戯だつた事を知ると、残念だつた。

『口惜しい』  
光子は堪らなくなつて、その場に泣き伏した。

『あゝ、三年の戀も滅茶々だ』

『小川は堪らず頭を兩手で抱へて部屋を飛び出した。』

『柴田さん』  
からりと氣持を變へた光子は今までの涙を押しかくして云つた。

『貴方だけこゝにゐて下さい、ね、でないと淋しいの』

恍けるやうな嬌艶な眼ざしで。  
……虚實萬化の戀愛合戦……

『貴方は本當の男よ、小川さんと違つて勇氣があるわ、私し今まで、そんな事に氣がつかなかつたの、ね、本當に私を愛して下さいな』

柴田は意外の意外である、嬉悅の頂上

に上つた。

『ほんとうですか〜』

『え〜』  
微笑を浮べた光子の艶やかな顔、その姿

今まで見受けた事のない女神の様な愛の光。

『光子さん』  
感謝と嬉悅の眼を持つて光子の方へ兩手を擴げて近づいた。

光子はそれを素早くスルリと逃げた。

『柴田さんお解りになつて、これが女の復讐よ、女が男を自由にするのは、十五分は愚か、たつた三分で澤山。三分で……さようなら……』

光子は最後の勝利を得て凱歌を上げて出て行つた。(完)

(浪花座初春興行上演)

ドラマ  
ストリー

# 原田甲斐

## 船越文一

村上浪六の作る所を眞山青果、額田六福が脚色をしたといふ言はゞ大物である。奥州仙臺陸奥守なげに高尾が惚れなんだといふ俗謡に端を發した御家騒動、善玉として後世ほめ者になつた人も多いが悪玉を一人で引受けて傳かに鼠を手に使つて極の下からせり出る仁木彈正と原田甲斐がその實は……といふのが此芝居である。

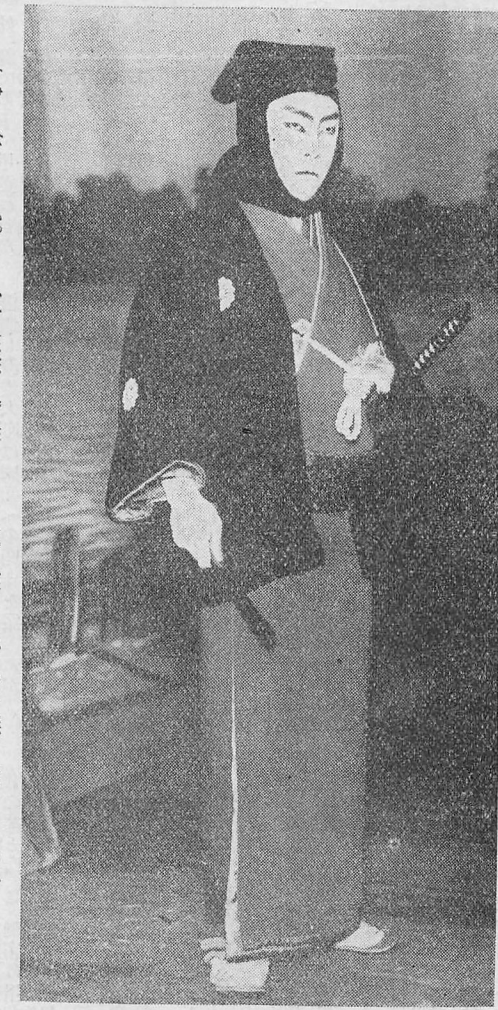
寛文某年正月四日の夕暮、兩國日本杭は賑はつてゐる。扇をあけて騒ぐ子供達、太鼓を叩く猿引、それを見る通行の男女、柳の下では酒井家の忍びの侍、氏家平六が古編笠に破扇子、さびた聲で詠を歌ふてゐる。霞とび、獅子の洞入洞がへりと猿引がわめけば、河童小僧を逃がした太夫元が追かけてくる騒ぎ、煮賣屋の藤助は平六を見て敵持ちの侍かといふがる。平六は毎夜のやりに通る大身の侍を待つてゐた。雨が降つて来る。厩橋の三大が千鳥足で出て来る。素

肌には神天一枚頗る威勢がいゝ。黒頭巾黒の巻羽織の菅野小介が三大を呼ぶ。獨身者と聞いてサツと抜打ちに斬りつけた。虚空を掴んで倒れる三大の死骸の上へ金包みをのせて歩き出すのを呼び止めた者がある。黒頭巾に羽織姿原田甲斐である。小介とは伊達氏部家に近頃召出れた伊賀者であつた。甲斐はその刀に目をつけ首を傾けた。兵部が近來しきりに武術執心の風聞……と考へた。小介は甲斐を見送らうといふ。甲斐は駒形の隠家へ行くのだ。そこで靜かに想を録る。しかも伊達兵部の生首を見る手だてを考へると聞いて小介は驚いた。

「歴々の諸侯さへ浪人を召抱へるのは公儀を憚る、それに月に二人五人十人、素浪人を引上げる兵部殿の心中、眞すぐに白状せい」と詰めよつた。小介は抜打ちに甲斐にかゝつたが甲斐のためにつき放された。そこへ氏家平六が走つて来た。小介は矢庭に川に飛び込んだ。

四五日は経つた。駒形堂の傍なる原田甲斐の休息所は隅田川に沿ふた風雅な寮である。紅梅白梅、柳もうれしい。甲斐は愛妾お露の酌で酒をのんでゐる。お露の養父寮番の彌兵衛は盆裁の松の手入れをしてゐる。鯛の料理をしたお露に子を孕むまいとからかふ。奥州五十四郡を掌に取つてねかさうと起さうと心のまゝの甲斐もこゝへ来ては只の男、彌兵衛は勿體ないと思へば不憚なとお露を濟んだ。棧橋の下から衣服大小、腰印籠立派な伊達兵部が出て来た。智恵が借りたい、それも一大事を。萬一伊達家に瑕瑾あればと言はせもあらで甲斐は一命を捨てて公儀に申譯をすると言つた。兵部こそ獨眼龍といはれ太閤にも家康にも天晴心を置かせた政宗公の末子である。もし事ある時は兵部殿の替を取らうといふ甲斐の言葉に兵部は喜んだ。兵部の息市正の嫁は酒井兼樂頭の娘であつた。分家ではいや國持大名になりたいと願つた。甲斐

は江戸總支配の重き役目を帯ぶ身のまゝならぬのを嘆いた。兵部が去ると、氏家平六が尋ねて来た。平六は酒井家を浪人した話をする彼が酒井家より召捕られる身と聞いて甲斐は後楯になつてやる。そしてこの寮に客人としておかれる身となつた。平六と彌兵衛は直ぐに心安くなつた。いろ／＼と身の上話のはづむとお露こそ平六の娘と解つた二人は抱きあつて泣いた。やがて平六は人氣のないのを見すまして切腹しやうとするのをお露は慌て、止めた。平六は娘の愛に引かされて身上話のいつけりであつたことを甲斐に詫がる。甲斐は平六がお露の父と聞いて驚いた。誰の子であらうとお露を愛する心に變りはないと聞いて平六、彌兵衛、お露は喜ぶ所へ菅野小介が忍んで来て甲斐に斬りつけた。小介は平六に取おさへられた。甲斐が



手打ちに致すと刀を振りあげ、やつと峯打に打つた。「見處のある奴、當分こゝにゐて庭の草でもむるしがよい」二三月月は経つた。大手下馬先なる酒井雅樂

頭の邸内、奥庭である。春も終りに近く櫻の花が僅かに残つてゐる。石田彌右衛門の前に氏家平六が跪いてゐる。平六は甲斐にうまく取入つてゐると報告した。そこへ伊達家から白石の城主片倉小十郎が尋ねて来た。小十郎、甲斐と並

んでの仙臺の名物である。石田と片倉は臘月の下で談り合ふ。分家兵部の子息が嫁即ち酒井家の息女を不縁としてお返ししたい。伊達家の家風に合はぬと言つて歸る。雅樂頭は木陰より出て不敏な奴めと憤つた。酒井家と兵部家と一揉

人にする工夫をしてくれと言つた。甲斐はならぬといふのを雅樂頭は俺を敵に取つてみるかと聞く。御所望とあらばと甲斐が言へば酒井家の侍がばら／＼と現れ出た。甲斐は小十郎の出席を聞いて驚いた。息女不縁とあれば國元では

にもふといふ片倉の意中を見た。そこへ一入とさつ爽たる風姿で原田甲斐が案内されて来た雅樂頭はまづ甲斐ほどの男八千五百石とは安い。一萬石にも推さうといふ。そして分家の兵部を伊達家の主

一體となり既に籠城の用意までしてゐる。

『この原田甲斐を天下取りの御用に召使はるか』

と詰め寄られて雅樂頭は帷幄の軍師と頼まうと約した。ついで片倉小十郎の首がほしいといふ。小十郎は甲斐の妹、誓である。甲斐は百萬石の御墨附を所望した。雅樂頭は小十郎の首と墨附とを引換へることを約束した。

月はいつか隠れて酒井家の塀外は暗い。西田幸左衛門以下数人の刺客は甲斐の一行を待つてゐる。先頭には氏家平六と菅野小介がある。烈しい争鬭、死人がある。小介は左の耳を平六は股と額を斬られた。石田彌右衛門が家來をつれて出て来た。甲斐は無事である。死人の後片付を石田に頼んで甲斐の駕籠は悠然とかきあげられた。

秋となつた。伊達家の上屋敷では綱宗のたぐさみに打つ刀鍛冶の音が寂しい。對面の間では家老原田甲斐、目付役渡邊金兵衛、出入司大町權左衛門、小姓頭澁川助太夫、各務兵馬が居並ぶ。國元一統から伊達安藝の署名で十三ヶ條の日安が届いたのである。一同がどうしやうかと協議をするのを甲斐は捨て、おかうといふ。

『そも今治世の伊達家に原田甲斐なくして何とかする』

と彼は自信をもつてゐる。茶坊主道圓は片倉小十郎が頼りに對面を急いでゐるとつたへる。甲斐はとりあはない。澁川と各務はその不法をなじる。甲斐は片倉を照り安藝を嘲笑し國家老柴田外記を腰抜けと言ふ。澁川各務はその暴言に憤慨し渡邊大町は國元への聞えを案じたが『やがて奥州六十萬石の礎をつきかためるためだ』

と甲斐はきつと決心する。小十郎が怒つて這入つて来る。甲斐は靜に茶をのみ終つて立上るのので小十郎は堪りかねて呼んだ。

『辨之助待て』

『三之助か、御用が急ぐ』

片倉は甲斐の顔に富貴の相がやどる。三四萬石の大名かと嘲笑ふのを百萬石に賣れまいかと答へられて驚いた。それには首がある。これか、いやこれかと二人は首をたゝいて笑ふ。甲斐は妹は無事かと聞く。片倉は甲斐の心中を憐んだ。自分を信ずるものはその力におほれる。片倉は改めて殿へのお目通りを願つた。甲斐は役目でもその取次を断つた。片倉は怒つて後刻を頼んで去る。甲斐は沈思黙考の後鈴を鳴す。小姓役泉田志摩に案内せられて伊達陸奥守綱宗が出席する。甲斐は綱宗に隠居を願ひ出た。先年駿河臺堀普請の折近侍のため酒色に身をあやま

つて以來謹慎の身であるが嫡子龜千代が七八歳になるまでこのまゝでゐたく綱宗は思つてゐた山蔭中納言以來の名家をつぶしてはすまぬ。蒲生、輩名、加藤、福島等の名家滅亡のこともある。いまのうちに幼君に譲られる方が伊達家萬代の基と聞いて綱宗は甲斐の孤忠を解した。主従は手をとつて泣いた。伊達家の守り神だといつて綱宗の肌に向ふ名香浮寝の鳥の香木を甲斐は拜領した。六十二萬石の土蔵石には重臣の二人三人の石柱はゐると決心を語つた。綱宗は喜んで去る。甲斐は慌たしく着座席以上のものを呼んだ。奉行、出入司、番頭、小姓、組頭、祐筆頭が十四五名並んだ。小十郎も並んだ。甲斐は綱宗隠居、龜千代相續を發表した。一同愕然と驚く中に小十郎のみ莞爾として微笑んだ。甲斐は一同の同意を求めた。綱宗の隠居には不評定は終つた。小十郎は市正の一條で大老相手に一喧嘩と思つたのも無駄だといふ。甲斐は小十郎に國もとへ歸れといつた。

『お身か俺か、一方が生き残つて居ればまづ伊達家は安泰だ』

小介と平六は先夜の傷のためうめいてゐるのをお露と彌兵衛が看護してゐる。平六はすてによくない。伊達安藝が大公儀一訴狀を出したことを



を平六は知つてゐた。甲斐は歸るや平六の身體を氣づかつた。安藝との出入については片方づつの呼出して時があかぬ。安藝が敗けても伊達家が安全なればそれでよいと甲斐はいつて平六の希望をたづねた。平六はお露は矢張り彌兵衛の娘珍事に間違ふても驚くまいぞと教へた。そこへ渡邊金兵衛が明朝板倉様役宅へ出頭するやうといひ、安藝の追跡は却下されたといふ。聞いて甲斐は驚いた。流石は板倉と指を折つて片倉の飛脚の江戸入りを考へた。此度の訴訟を安藝と原田の政治争ひとして小躍によつて甲斐が伊達家を追はれることは一番困ると

手配を頼んで渡邊を歸らせた。そこへ本國より片倉小十郎の妻、甲斐の妹澤がたづねて來た絶世の美人である。小十郎の許しをうけて來た



と聞いて甲斐は考へた。澤は甲斐に狂氣したのか、一夜で殿様を押し込め東西をしろしめさぬ幼君を立てようとするのかと詰問した。前代未

聞の不忠甲斐の縛り首を獄門にしやうと國では騒いであると言ふ。澤は小十郎の名のために離縁を取りたい。それがならば片倉の事改めて

甲斐殿にと懐劍に手をかけた。甲斐はそれを振り切つた。澤の附人吉川四郎左衛門は駆けて出た。原田家先代大藏よりの家臣である。最後の願ひに奥方澤を町宿でも生害はさせられぬから御邸の間を借してくれと泣いた。甲斐も思はず涙ぐんだ。親がなくば兄の許で、甲斐は血を吐く思ひで承知した。二人は大いに驚いた。四郎左衛門は甲斐をくどいた。原田家十七代の忠功を一時にもみつぶす氣かと泣いた。そこへ大町權左衛門が街道の風説をつたへた。片倉より追ひ願ひがある

と聞いて甲斐は喜んだ。澤は、「姦賊原田甲斐に見参」と短刀で斬りつけた。そして兄妹の情、斬るこ

とが出来ないで自らの咽をついて倒れた。甲斐は千年の後までも大悪不忠の悪名をうたはれる身を歎いた。お露が平六の死を報して来た。甲斐はお露に最後の迫つたことを告げた。

『そのまゝの姿にながらへて花は散るとも香はうせぬ梅の色をいつまでも見せてくれ』と浮寝鳥の名香を興へた。甲斐は今宵かぎりの戀に泣いた。

奥州街道千住の松並木にも夕暮はくる。編笠をかぶつて伊達安藝、古内志摩、澁川助太夫の三人が四邊をうかひひ松蔭に身をかくした。白布をかけた女乗物一挺が通る深の屍體である。

白無垢姿の露と四郎右衛門がついて去ると板倉内膳正は從者を五六人連れて故郷の姿で出て来る。板倉は今更に伊達の飾武者の斐甲に驚嘆してゐる。安藝等の三人が現れた。國家存亡の大事として内願したが板倉は天下の大事利用先で取上くべきでないと思つた。それに伊達家の存亡ほどの大事でないといふのを、安藝は兵部と雅樂頭が陰謀をとくどくもいふので板倉は本家分家の争ひとあれば六十二萬石は即坐に滅亡だと怒つた。國方の家老と江戸奉行の権力争ひはいづれの大名にもあつた。そうして甲斐を遠ざければよいではないかとさとした。三人は伊達家生涯の御恩死すとも忘却仕らぬ。と額を地

上にすりつけた。そこへ原田甲斐が寛濶なる姿で黒頭巾で出て来た。甲斐は頭巾をぬいで安藝の前へ立塞がつた澁川古内は刀に手をかけた甲斐は悠然と三人の前を通つた。甲斐と板倉は出逢つた。手頸の珠數を見せ、妹の野送りで今日ばかりは心より泣いたと言ふ。市中に墓地も多いに大橋を超えるのは死後に悪名をさせるのがいちらしいためだとさめんと泣いた。板倉は深くは問はず去つた。甲斐も夕鳥の聲さびしく立去る。兵部の刺客達が片倉の家中を待つたそこへ菅野小介がほろ酔いで出て来た。片倉小十郎の家来眞田求馬、石原忠四郎が願狀を頸にかけた熊田甚五兵衛を中心に出て来る。暫くはけしい争鬭がつづく。十七日の月光が空にかゝる頃、死傷者が多く菅野は熊田の願狀を奪つたまゝ昏倒する。そこへ板倉内膳正が歸つて来る。やれ嬉しやと願狀を渡す。板倉はそれを持つて去つた後へ斐甲とお露が歸つて来る。苦しい息の下より小介から片倉の願狀を板倉に渡したと聞いて、斐甲は絶望した。訴狀が板倉の手に握られてはそのまま握りつぶされる。片倉の志も甲斐の苦心もこれまでと目をとちた。月が冴えた。

『藩祖政宗公の御齋世だ。曇りなき心の月を先きだてる浮世の闇を晴れてこそ行け』

小介はしづかに落着いた。大手前酒井雅樂頭の屋敷の表座敷である。片方の間には伊達安藝、柴田外記、古内志摩が坐つてゐる。板倉の役宅とあつたが俄かに大老の邸に變つたのである。片方の間へ原田甲斐が着席した。町奉行島田出雲守が出欠を確かめに来た。今日は最後の吟味である。老中よりは稻葉美濃守、久世大和守、土屋但馬守、それに月番板倉内膳正、申次役は島田出雲守、作事人行は大井新右衛門、大目付大岡佐渡守、目付宮崎助右衛門が出席するのだ。甲斐は酒井大老の出席を聞いたが判明しなかつた。で伊達兵部は、それも判らない。それに論辯願立てを封じられて斐甲は困つた。まづ柴田外記が呼び出された。斐甲は安藝に内談をしようとしたがうけあはれない。外記が歸つて来ると古内志摩が呼び出された。島田は今更に分家兵部の名を出したが甲斐を見苦しく思つた。甲斐は今度は酒井大老の名をあげた。島田は當惑した。そこへ石田彌右衛門がさる方の内命とあつて甲斐を別室へ呼んだ。安藝等には不安げに見送つてゐると、甲斐は憤然と盤を蹴立て、出て来た。

『算盤勘定や最負沙汰ぐらゐの小罪で伊達家を退けられるのは小外だ。原田左馬之助以來七代忠勤を抽んでた家柄だ。百萬石の墨附の

話はどうなつたか  
とわめき立てた。總十代は幼君なり伊達家の危難を救ふものは原田甲斐より外にないと安藝らに聞けがしに怒鳴つた。島田が甲斐の出座を求めて来た。

安藝、外記、志摩は暗然として首を垂れた。遠くで正午の太鼓が聞える。突然奥の間より「無禮だ。無禮だ。控え」といふ聲が聞えて甲斐は島田に突き出されて来た。言葉が残つてゐるとわめく。ならずば安藝と對決を甲斐は願つた。島田は安藝に奥へ行けと目くばせをした。甲斐は安藝を呼び止めた。

「伊達家の大事だ。覺悟はあるか。一期の忠義を頼み入るぞよ」  
と涙にくれた。やがて願狀を認め出したが手がふるへて幾枚か料紙を破つた。そこへ渡邊金兵衛が導かれて来た。品川の隠居一甲斐の暇乞の書狀を持つて行つたのである。綱宗が落涙したと聞いて甲斐は感激した。それに綱宗はすつかり折れてゐた。公儀の裁許に逆ふ者はわれ等の頸に刃をあてるも同然、主と思ふな。家來とは思ふまいと言つたと聞いて甲斐も愈々最後の決心をした。そして、紹鷹作の鉈削りの香爐に拜領の香木を焚いて瞑目洗思した。酒井家の家臣が晝食の膳部を運んで来た。給仕は甲斐に公事の

利運お目出度うといつたので甲斐は慌てた。柴田と古山が呼び出された。甲斐は安藝の傍に近寄つた。

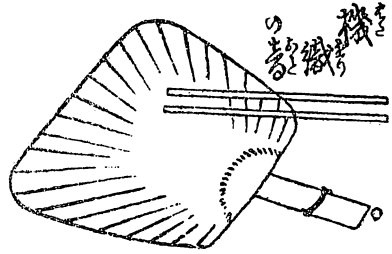
「原田の苦忠もおのれゆゑに……」  
甲斐は安藝に一刀を浴びせた。

酒井家の奥へ通する廊下で衝立などがある。安藝は肩先を切られた體で奥座敷に侵入せんとする甲斐をさへへるが、甲斐は大老にも言分あり、板倉にも怨みがあると奥へ急ぐ。

「伊達家のためだ」と安藝が抱きつけば、  
「御家を滅ぼすのは汝の輩だ」  
と安藝が倒れたので甲斐がとゞめを射さんとする處へ大勢の足音が聞える。

酒井大老の居間に近い奥座敷である。廊下には走る足音が高い。「刃傷だ」「狼藉者だ」と口々に呼ばれる聲がする。玄關を閉ぢて伊達家の家來一人も入れぬ。と石田は怒鳴つた。原田甲斐は負傷した上に鬨髪でそここゝと戸迷ひ歩く柴田外記が脇差抜いて後を追ふ。奥座敷に入らんとする時外記は一刀を浴びせる。卑怯者と言ひ乍ら甲斐は尙も板倉の在所を求めた。外記は切られながらも抱きついた。安藝は追つて来たが隙間で昏倒した。蜂屋六左衛門も傷ついた。石田が長刀をもつて走つて来た。

「御大老に物申す。百萬石の墨附を頂戴するのだ」  
徳川家を倒して天下を取れば甲斐に百萬石を與ふると口づからの約束だ。酒井家を絶家にしたいでは死なうといひつゝ外記と立合つた。酒井家の家來はそれを見て手を下しかねた。石田は伊達家の者皆殺したと叫んだ。甲斐の唸聲がものすごく聞える。板倉内膳正長上下で出て来た。島田、大井が續く。甲斐の體を見て極悪人奴と叱り安藝にしつかり致せと呼んだ。安藝外記は場所柄をわきまへて神妙の振舞ひ又蜂屋六左衛門は甲斐の毒刃に倒れて氣の毒に思ふと言ふた。甲斐は息ふきて板倉どの板倉どのといふをはたと睨み、  
「御大老の居間近くを騒し憎い奴、安藝よく聞け（と口に安藝を呼びつゝ）一歩甲斐に近づいて）そちが蔭ながらの精忠、御大老もお心を動かされて龜千代の家は萬代不易、徳川家のあらん限り決して退轉の憂はない。又分家兵部には隠居を命じ一關三萬石はお召上げに相成るぞ」  
兵部は絶家、一關三萬石はお召上げと聞いて甲斐は喜んだ。  
「板倉殿の明智の裁決に甲斐はたいく御禮」と言ひつゝ落入つた。



## 「原田甲斐」

## に就て

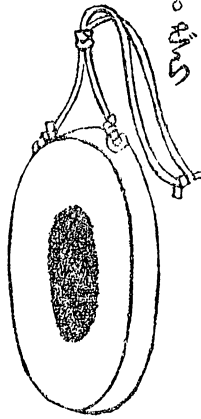
澤田正二郎

演劇の要素が熱と力であるといふことは、私が豫てからの信条であります。そして、いつかはこの熱と力を、申分なく表現し得る脚本に接したいと常に深く願つてゐたのであります。それが、偶然、この『原田甲斐』によつて實現し得る機會を遺憾なく擲み得たのであります。

わけて、この脚本中に織込められた精神——自ら己れの運命を見詰めて突入する、甲斐の心事、大敵を亡ぼすためには、先づ自らをも共に滅ぼしてかゝらねばならぬといふ運命觀——に私は多大の共鳴を感じずにはゐられないのであります。誠に私の謂ふ熱と力を眞向から打ち込み得る最も適合した脚本と信ずるのであります。

次に私がこの脚本で感ずるのは、作者の第一の企圖である善惡觀であります。固より本篇の主人公原田甲斐が巷間傳ふるやうな悪人であつたか、それとも當脚本の觀るやうな大忠臣であつたか、それは議論もあることであらうが、兎にも角にも同作者の試みが、今まであり來つた脚本史上の善惡觀に對して正しい警告を含んでゐることは、争へない事實だと思ふのであります。即ち、從來の多くの戯曲は、既に古く一立て役『敵役』など、いふ言葉が存在するやうに、餘りに單一的に根本的に善玉と悪玉とを別ち過ぎてゐます。善人は飽くまでも善良、悪人は血も涙もない極悪非道、これが舊脚本の大きな落度でありました。この思想はまた同時に社會の上にもまた歴史の上にも及ん

で「彼は悪人だ」と云へば、全く救ふべからざる根からの悪人のやうに嫌悪されます。これは大變な間違ひではありませんまいか。悪人と雖も人間である。その悲しい悪業の中には、必ずや事茲に至る何等かの理由があるに違ひない。善も運命なれば、また悪も運命である。「泥棒にも三分の理」といふ諺の通り、この世には絶對の善人もないやうに、絶對の悪人といふものもあるべきものではありません。世の悪人と云はるゝものゝ間にも心中一片の良心はあり、また悪を行ふに至つた心の辯解はあ



## 「光は暗から」に就て

加藤 秀雄

るに違ひないのです。當狂言の作者が、作の力點を特にこの點に於て、古來極悪逆臣のモデルの如く傳へられた原田甲斐の行爲に、身を刑罰の淵に落して君邊の奸を拂ふ忠心義魂を主張した處、慥かに世の善惡觀に對する一警告として多大の同感を禁ずることができないのであります。

あらゆる熱と力を打込んで、私はこの脚本に本年のスタートを切るゆえんでございます。

私の作つた『光は暗から』が今度脚色されて、角座と樂天地上演せらるゝさうである。

それについて、松竹合名會社の知友から、私の感想を求められた私は快諾した。

さて快諾したものの、とりまとまつた感想もないから書く氣になれない。そのうちに約束の〆切日が過ぎてしまつた。

『道頓堀』の編輯者から督促の手紙がくる、電話がかかる。居ても立つても居られなくなつて、此處に筆をとつて、まと

まりのないちぎれ雲の様に心の中を通りすぎてゆく考への斷片をそのまゝ、――

1

『光は暗から』は私の初めての長編小説である。それが僥倖にも朝日新聞に連載された。つゞいて芝居になつて私の創作した小説の各人物が、まざく舞臺の上で躍動する事になつた。自分の作つたものが芝居や、活動寫眞になる事は愉快な事である。

2

『光は暗から』は元來が小説である。だからそれを戯曲にするといふ事は、その藝術的性質に於て相違のある以上小説同様の味を出す事は餘程困難だと思ふ。菊池寛氏の『忠直行狀記』『恩雙の彼方へ』は戯曲より小説の方がはるかに好い。何故なれば、これらの作品は小説として先づ書かれたものであるから――

3

原作に忠實なれと云ふ言葉は、多くの原作者の欲する如く、私もそれを欲してゐる。しかし原作に忠實なれと云ふ事は、單に小説の筋通りに脚色せよと云ふ事ではない。小説の筋通りに脚色する場合その殆んどの脚本は生氣を失ふにちがひない

私は筋よりもむしろ原作の精神を生かしてもらひたい。原作に捉はるゝ事なく、しかも原作を無視せず、自由に脚色さるゝこそ原作を生かす所以であると思ふ。

4

『光は暗から』の主人公龍吉を、ツルゲネフの『父と子』のバザロフに似てゐると評した人がある。これは間違である。バザロフは饒舌であるが、龍吉は寡言である。バザロフは未來に一縷の光明を懐いてゐるが、龍吉には何もない。

5

『光は暗から』の女主人公明子をお轉變なモダンガールの様に思つてゐる人がある。これは間違つてゐる。明子は生れながらの純潔な少女である。彼女の活潑な常軌を失した行爲は、逆しかり出づる彼女の純潔である。純潔でなくして誰れが明子の如き行爲をとり得やうか。

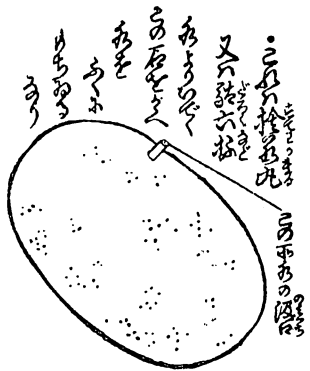
6

『光は暗から』の裏面を貫く思想は絶対なる神の攝理であるが表面は暗の如き龍吉にぶつつかつてゆく明子の姿である。これはフアウストとマルガレーテの戀から思ひついたものであるが勿論ゲーテの偉大さには比すべくもなく、且又フアウストと龍吉、マルガレーテと明子とは似て非なるものである。



人物の中で演出のむつかしいのは明子と龍吉である。だが困難な二人の性格を鮮明に對立させたならば、舞臺効果は相當であるであらう。

角座では水谷八重子さんが明子を演るさうである。活動寫眞で見たのみで未だ舞臺上の藝風に接した事がないからよく解らないがその純潔らしい持味は明子に適切だらうと思ふ。たゞ明



# 角座の「椿姫」上演に就いて

演出 覺帳の中から

長谷部 孝

角座正月興行の二番目物として『椿姫』が上演されるに就いて、その演出を擔當してゐる關係から、少々『椿姫』の輪廓だけを述べさせて頂く。

子の野趣に工夫を要する。

樂天地の都築文男氏一派は未だ見物した事がない。だからその藝風については何も云ふ事が出来ない。

新春早々蓋をあけるこれらのお芝居の大入満員を希望する。辰年だからきつと威勢が好いだらう。

西洋映畫でも我邦映畫でも頻りに宣傳された今日、『椿姫』の名は既に耳新しいものではないと思ふけれど、念のために断れば『椿姫』の抑も誕生は西暦千八百四十八年、生國は佛蘭西、生みの親は普通小デューマと呼ばれてゐるアレキサンダー。

デューマであつて、そして小説といふ産衣に包まれて始めて此世に生れ出でたものである。而もこの兒『椿姫』は生れながらにして既に凡才でなく、一度その誕生の報傳はるや、爲めに浴湯の紙價は一時に高まり、父親小デューマの名は頓に不朽の榮光に恵まれ、その後も或は演劇に、或はオペラに、或は映畫に脚色されて、以て今日に及んでゐるのである。

がしかし、『椿姫』の名は舊いものであつても、藝術座の『椿姫』云ひ換へれば水谷八重子君（註曰、八重子君など、云ふのは我ながら變な氣がして仕方ないけれど、何時までも八重子やんでもあるまいから、まづ内輪から強ひて大人並みの呼び方を用ひることにする。）の『椿姫』の誕生はまだ決して舊いものではない。昨年九月藝術座の本郷座公演に際して始めて舞臺の上を生れ出たものである。實を云へばその誕生は本郷座公演の期日にさし迫られて、極めて早急の際になされたもの、即ち潤色者音羽六藏氏が僅かに二晩の徹夜で書き上げたものである上に、様々の制限が加へられてゐるために、或は本来の『椿姫』の面目を完く傳へ了してゐない憾みがあるかも知れないけれどもその代りには蓋ひ親である音羽氏によつて、及び『椿姫』の爲めに肉體と靈魂とを貸した八重子君の才と美とに依つて、本来の『椿姫』になかつた美しい屬性が附加されてゐると云ふことが云ひ得る。勿論私など差し出がましい口を利く處ではないけれど、強ひて云へば小兒利嚮くらゐの役目を僅かな程度で勤

めてゐるのであらう。

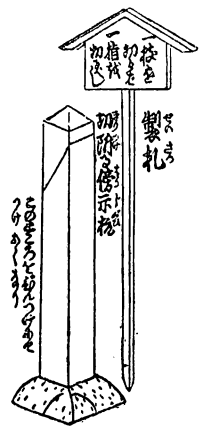
原作小デューマの『椿姫』の梗概は改めて今此處に述べないが、若し假りに原作の『椿姫』を極めて常識的に取り扱ふなら第一が最初の見初めの場、第二が二人の戀の生活、並びにアルマンの父親によつての二人の別離、第三が妖婦オリンプを得てのアルマンが椿姫に復讐する賭博の場、第四が椿姫の終焉、この四場に脚色するのが誰しも異存のない處であらう。けれど藝術座で演ずる音羽氏の『椿姫』は全二幕で殆どその總てを描き盡してゐる。だから本来ならば多少の無理を生じなければならぬし、又第一幕の如きは一時間二十分に渉る長丁場になつてゐるために、ともすればだれ氣味になる危険を持つてゐるのだが、如何に我々がその無理を補ひ、だれ氣味になるのを防いでゐるかは、觀て頂けば總ては解る譯だけれど、それが潤色者、演伎者、演出者の味噌なのである。

而もその中でも最も特筆すべきは八重子君の演伎である。最初八重子君の藝風から推して、同君が椿姫を演ずるのは少々別途の氣味があつて、些か危懼しなくてもなかつたのだが、同君の才腕は見事にその危懼を一蹴して、品を失はずにあつた階級の、殊には戀にのみ生きる女を表し得、本郷座初演の際には云ふまでもなく、その後の地方巡演、横濱喜樂座の公演にも多大の讃餘を贏ち得たのである。これは又一に同君の役どころが

更に大きな廣い領域を持つことをも證明するものであつて、同  
 君の將來のために慶賀すべきことに他ならない。

それは兎も角此度の角座の上演では様々の意味での期待を持  
 つて頂いて差支へないと思ふ。尤も初演以來俳優にも様々の變  
 化があつて、小織氏のアルマンの父親、正邦君のアルマン、共  
 に初役であるけれど、又異つた味があることを私は信する。

最後に一言演出者としてお断りして置きたいことは、私は外



# 「榎姫」 内幕話

武田正憲

國映畫ではナジモブの「榎姫」とノーマ・タルマツチの「榎姫」  
 とや見てゐるが、何れに多く據つたかと云ふなら、まづ前者の  
 方であることを白狀する。そして時代も十九世紀の後半でなく  
 僅かに現在でないと云ふだけで、比較的新しい時代に持つて來  
 た。装置、衣裳等を観て頂けば解る筈だが、それに就いての非  
 難には十分お應へする覺悟である。がしかし、それは兎も角演  
 出の上に於ての御意見は御遠慮なしに伺はせて頂きたいと思つ  
 てる。

あれは九月一日の夜だつたと思ひます。震災記念日といふこ  
 とが頭に残つて居ますから。さるところのくづれで、例の新橋  
 のどせうや吉田川へ、のツつけたのは、喜多村先生を先達に、  
 田中總一郎君、私、其他といふ顔振でした。

『酒なしデー』といふボスターが、れい／＼と掲げられてある  
 その下で、町内の世話役、在郷軍人、青年團といった連中が、  
 『今夜は夜警だ。御苦勞様なコツです。』と大に満を引いて居ま  
 した。

ところへフラリと這入つて来たのは、伊志井寛君の義兄であり、其頃私の所屬して居た再興藝術座水谷八重子一座のお囃子の頭である杵屋重吉氏でした。

『ほ・う、こんなところに居たんですか。大久保ちやあ、あなたの行衛が分らないつて大騒動ですぜ。』重吉さんは私の顔を見るなり、さも咎めるやうに言ふ。それもその筈で、今日は、この中旬初日の藝術座秋期公演の狂言を極める主脳會議が水谷家で催される日なのだ。忘れるといつてはすまないが、飲んで歩いてるところを見付られては一言もない。

『狂言はなんでも『椿姫』に極まつたそうですぜ。あなたが書くんだそうですよ。』重吉さんはこんなことも言つた。

八重ちゃんの椿姫！どうだらう！出来るだらうか！よしコナスにしても柄違ひぢやあなからうか！しかし夏川の静いちやんさへやつたんだから！こんな聯想は次々に續くのは私ばかりではなかつたらう。

『八重子の椿姫！そりやあい、智恵だ。』と何の躊躇もなく言放つたのは喜多村氏だつた。

『面白いなア。やれよ。』と力づける田中。

『俺はとうからそう思つてるんだ。世間ぢやあ八重子は、明るい、無邪氣な、ハデな役下コの役者にしてるが、俺は寧ろ憂ひの利く、どつちかといふと濕つた方向の役者だと思つてるんだそれが證據には『黎明』の娘なんかよくやつたぜ。』喜多村先

生はかう言足した。

成程とも思ふ。トニカク電話をかけろ！

話へは電八重ちゃんが出た。

『時間は一時間半きりないのよ。そうねえ。フランスで行くのよ、原作の時代でも、もつとその前にしても、現代にしてもどつちでもいゝと思ふけど。そうねえ。なれそののところはいゝわねえ。』

ラブシーンは勿論入るはわよ縁切はなければいけないわ。あすこがヤマでせう。そしてね、私終焉の場は是非ともやらして頂戴。皆んなでお酒をのんだり踊つたりする花やかなところがあつてバカにしてみつて泣かせるところがあるつて風にお頼みするわ。もう日がないでせう。お願ひしてよ。大丈夫ねえ。あなたのことだから安心してらわ。ぢやあ萬事お任せするから、よろしくね。六日が上本よ。五日頃はどうぞね。』と要領を得たやうな得ないやうな要領であつた。

お、主なる神よ。一時間半で、なれそのラブシーン、父の頼込、愛想つかし縁切、二度目の邂逅、終焉を見て、猶且皆んなでお酒をのんで踊つて騒ぐ愉快な場面や、おまけにバカにしてみつて泣かせせる場面を織込める、そんな調法な無茶な座付作者があつたら、神よ罰してやつて下さい。須く墮獄せしめよ。第一幕間はどうする氣だ。四場乃至五場で、その中一パイがテコイ道具でもあつたなら、それだけで既に、一時間半位はエ

ラか、りである。さあ、解らなくなつてしまつた。

全體俺は椿姫を讀んだことがあるか知ら。どうも讀んで居ないらしい。芝居では確に見た。がどれも翻案であり、日本の世界になつて居た。映畫は不幸にも一ツも見て居なかつたので、フアースト、ナシヨナル社のN氏の好意に依つて、その頃まだ市に出なかつた、ノーマ、タルマツチの『椿姫』の試寫を見せて頂いた。が、遺憾ながら、あまりに現代すぎ、ジャズの世界になり過ぎて、何等の感銘がなかつた。まだ、映畫通の柳永二郎から聞かされた、ナジモツの映畫の印象の方が、餘程私を教へて呉れた。

それにしては原作の素晴らしいことよ。女々しいと言はどいへ、——自がそれで飯を喰つて且何もかものカラクリを知抜いてる芝居を見ても泣く女々しい私だからかも知れぬが、久振りで愉快に泣かれた。大變に面白かつた。あ、も脚色しよう、かうも行かうなどといふ小智を絶して原作に引入られた。イデ、吾に最忠の助手友成若波あり、競馬の馬のやうに張切つて立つた。

時代は今より約三四十十年前、自働車の時代でなく馬車の時代を目標にして行くことにした。此頃流行る、十分、十五分といふ幕を避けて、終焉を除くのほか、序幕一パイに盛込んだ長い幕を書いて見た。どうしても一時間四十分の帳數である。カッツにカッツを重ねた初日の所演が一時間二十八分であつた。それがいゝか悪いか、まあ、みなさんに見て貰はなくつちや

あ！その替り終焉の幕に、時間が使へなくなつてしまつたのは二ツいゝことはないもんだ。

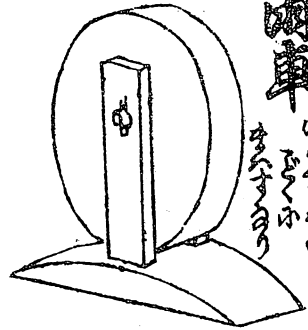
舞臺上の『椿姫』は實に愉快な演出だつた。殊に佐原包吉氏の装置にかゝる舞臺と、島崎孝一郎氏の配光はまあどうだ！自作自演だからといつて、随分イヤなことがある。この時の稽古ほど、いゝ稽古をしたことは未だかつて懸へないと思言したいほどである。當面の演出者長谷部孝氏の功勞と、宏量よく任せて下さつた水谷竹紫先生のためものでなければならぬ。『私も長谷部氏も共に野球人である。』さあ、シツカリ行かう！といふシートノック式稽古の新機軸さよ！

八重ちやんのマルゲリットは、喜多村氏の折紙付である。柳のアルマンは誰に變るか、今のところ解らないが、私のやつたアルマンの父は小織氏だそうである。三人の友人は友成だけ缺けたけれど、これもまた愉快なトリオに返るだらう。ブルーダンスのおぼちやんは西條君の當役——但し適役といふと怒るからそのおつもりで、女中のナニイスは金子チビ子君が力演、夜咲く花の唄は山本かほる嬢の天成の美音、ヂュリーの天草君の穴は誰が行くか知らない。幕明の村の青年だけは困りものである。

トニカク私どもは理窟をいふ手間で、このあたりから突進みます。新劇最右翼の陣營の尤も勇敢なる一闘士として力を致します。そしてもう一度怒鳴りませう。

さあ、シツカリ行かう！

電車 ひとごころ  
まはすあり



# 我儘古今帳

志賀 廼 家 淡 海

まゝにならぬとお櫃を擲けて吾れから身動きもならぬ羽目に陥る事もまゝあれど偕て廢められぬは持つたが病の我儘が又し  
てもこのこゝと頭を持ち上げて来る。

世の中が忙がしうなるに連れて人々から笑ひが失はれて行く  
そこで流行のコントやナンセンス等に笑を求めろ否笑ひを求め  
て居る爲にコントやナンセンス併せて喜劇が流行して行くこと云  
ふ吾々笑ひの供給業者に取つては絶好の機會に立ち乍ら人々を  
笑ひの世界へ完全に導びく事は愚かその要求する笑ひをも充分  
に供給する事が出来難いのは何故だらう我身で我身が儘ならぬ  
とつく／＼我身怨めしくなる、ない袖は振れぬ譬へだがその無  
い袖でも振つて見たい茲で一番劃世的に喜劇の新生面を開拓し  
て見たい、いつ迄も観客に甘へて之れに迎合して居ては飽かれ  
て了ふ營業價値を主眼としたもの計り上演して居てはやがて破

滅だと知つては居ても扱てなけなしの暫惠を振り絞つて多少理  
想的のものを演出しようとして試みても夫れは觀客の多くが見向  
て呉れない従つて興行者側から見放されて之れ亦破滅其所で營  
業價値の充分な藝術的作品を作り出さうとするには生憎く夫れ  
丈けの力の持ち合せが無い全體何うすればいいのだあちら立て  
れこちらが立たず双方立つれば……あゝまゝならぬ、喜劇脚本  
にも随分文藝界の大家が物されたものもあらう拜見して誠に結  
構なものがあるが扱て舞臺に掛けて見ると其の收穫は比較的  
少ない最も先生方の脚本は戯曲として面白く讀まれ、ばそれで  
其の作品は成功したのだ舞臺の上で原作通り若しくは夫れ以上  
に演活かすのが吾々の使命だ處かどつこい舞臺の上では脚本で  
命ぜらるゝ通り計りに行き兼ねる場合が多い強いて演つても脚本  
の朗讀に過ぎぬ結果になつて却つて原作を辱しめる様なものさ

ればと云ふて其の先生方の作品を拜借して演るとする以上妄り勝手に改訂出来そうな筈もなし結局そう云ふ結構な脚本は戯曲として尊重され或はある一部の人々に依つて専心研究され或る一部の人々に稱讃される事になるのが多い、花ある枝には手々が届かぬ……あゝまゝならぬ。

とこんな事を云へば叱られるだらう夫れは自分達が脚本を理解する力がないからだ……と或はそうかも知れない然し尠くとも舞臺を生命として居る吾々に理解し難いものであれば所謂大衆向きにはどうであらうか吾々は観客を選ぶの自由を許されられないのである。

吾々が云爲するのは潜越の沙汰かも知れんが歌舞伎劇は數百年間の歴史を保つて我國民衆の上に確かりとした根底を植へて居る丈けにそれだけ斯道に精進する人々は素養も違はう苦心も伴はう然し夫れ丈けに又恵まれて居る點が多い祖先からの歴史に依つて培はれた底力其所には骨董を愛撫する様な觀賞もあらう傳統的に只だ無條件の愛顧もあらう新派劇にしてもそうだ時世の潮流に生れて來たが矢張り歌舞伎劇から形式を替へて分立したと云つてもよいもの可なり根深い演劇のフツンを烈狂せしむる事も又至難ではなかつたらうましてそれが日と共月と共に吾を競ふて向上して行かうとするのだものそして多數の劇通家が絶へず剛聲鞭撻するのだもの所謂新劇に到つては現に新時代の風雲を覗つて起つたもの彼れは云ふ丈けが野暮して見ると

獨り喜劇は遠からぬ昔同じく時代の要求につれて生れ出たもの出産の苦けんに附いては私は容喙するの權利は有たぬが幼な子の一人旅野に寝たり山に寝たりの苦勞は人一倍して來た積りだが夫れでも未だ苦勞が足りぬと云はるれば夫れ迄だが素養が乏しいのか素質が缺けて居るのか素性が悪い爲か其の恵みに浴する事が尠ないと思ふのもまゝ子根性か

だがそんな事を云へば吾々に罰が當るかも知れぬ吾々は不斷の努力を續けて不斷の顧客を集め得るのだ負け惜しみではないが時としては他に抜んで、興業上の成果を収める場合もあるのだものを只だ恐れるのは一步遅れるが爲に一人の顧客を失ふことだ観客は大眾である吾々はその大眾の一人々々にも躓いてはならず放れては不可なのであるあゝ儘にならぬ。素より斯う云ふ苦心は舞臺藝術にたづさる者が等しく味はう事下有らう事は無論だがそこには軽重さがある厚薄がある吾々が生み出す作品に對しては恰く世評に依つて其の歸趨を定めなければならぬ即ち一般の批評が羅針盤となる事は云ふ迄もない處が軽いユーモア乃至コント、ナンセンスを主題に取扱ふ吾々の方面では他の劇に比べて一時的の感興は何うあらう共永続的印象に乏しい従つて批評に上る可能性が薄いと云ひ得ようそれ丈けでも吾々は不幸なのである。

事實見て居る間は相當の興味も覺えたが喜劇の事だから深く記憶に止めないと簡單に片附けられる場合が多いのである。



只希くは吾れを鞭うてと聖人の寢言めいた事を云ふ様だがそ  
うしなれば我が馬車馬は其の進む方向を見る視野が狭いので  
ある悪る過ぎて問題にせぬなどと云はれるとそれ又繼子根性取  
り立て、噂する程の可もなし不可もなしなどは浮かばれぬ叱つ

て置いてたまにはうる奴一寸味をやり居るわいと舉められたさ  
が腹一杯何でこんなさまにならぬと新たまる年の初めから古  
いく愚痴を繰返しての我儘古今帳お屠蘇に酔て如件

### 浪花座初春興行總配役

▼浪花座の初春興行は久々の澤田正二郎一派で  
二日初日、初二日に限り三時開幕で華々しく  
開場する狂言は第一額田六福氏作「小梶丸」一  
幕。第二廣津和郎氏作「勝者敗者」二幕。第三  
村上浪六氏原作、眞山青果、額田六福兩氏脚色  
「原田甲斐」五幕九場でその總配役は

荷主右門衛、柴田、原田甲斐(澤田)情人常二  
郎、板倉内膳、片倉小十郎(中井)梶取平六氏  
家平六、伊達安藝(根岸)船頭榮藏柴田外記、  
酒井雅樂頭(鬼頭)亭主儀兵衛小川、伊達綱宗  
伊達兵部(野村)壹野小介鳥居町醫者、賣賣屋  
藤助(赤井)出入司大町權左衛門(鈴木)小姓泉  
田志摩(丸茂)小姓頭蜂屋六左衛門(石山)三太  
各務光馬(河井)瀬村源吾、小山清助(島田)坊

主道圓(八島)目附役渡邊金兵衛(小川)石田彌  
左衛門(菊田)寮番彌兵衛、島田出雲守(南)遊  
女小梶(久松)愛妾お露(二葉、中島)一日替り)  
光子(山路)内儀おみね(玉澤)遊女よしの(春  
野)



の「姫椿」行興春初座角  
るす扮にトツリゲルマ  
子重八谷水

喫煙室

高橋 蓼 雨

かつて、市岡グラウンドにて、

八千代ティームと取組み、8-12にて大捷し、常盤俱樂部と戦ひて30-6、といふ開闢以來の大スコアにて惨敗せし松竹ティームも其後、朝日出版部、廣島新聞、山下俱樂部、紅梅園等と雌雄を争つて練習に練習を重ね今日では野球界から稍や認められるやうになり此ほど、延若、壽三郎、右國治等の一行が九州巡業中、熊本の電氣俱樂部から試合を挑まれた。

熊本は人も知る肥後の太守細川義立侯爵が大變な野球好き。殊に、料理屋の仲居、旅館の女中でも、野球を知らなかつたらお客様の相手が能きぬから仲居の資格無しとまでいはれた野球熱狂の

土地である。

敵に聲をかけられて何か猶豫のある可きと、無官太夫敦盛よろしく胸の頭をめぐらして一戦としまる。

そんじやう其處等の玉織姫の氣を採むそもいかばかり。

道理で、熊谷次郎直實、平山の武者所、といつた役どころは一人もなく、鐵漿黒々と眉ずみひきし女形なり二枚目なりの花形揃ひ。

役人替名の次第は。

- 投手 嵐 楠嶽
- 捕手 坂東豊三郎
- 一壘手 市川 蓮藏
- 二壘手 市川 巴
- 三壘手 阪東ゆたか
- 遊撃手 淺尾關三郎

- 右翼手 實川 美扇
- 中堅手 實川 正壽
- 左翼手 淺尾よしの

といふ精銳を網羅したる顔ぶれ

コーチャー 坂東壽三郎は、慶應の宮武の助の骨が何枚あつて、福岡の戸來の手の甲が幾インチ、和歌山の小川の頭髮は何本生えてゐることまでも研究してゐる野球通同、嵐橋三郎はピッチャー時代自宅にて食事中、御飯を一杯盛つた茶碗を思はず投げつけて、硝子障子を滅茶々に粉碎、家族びつくりして近所のお醫者の精神鑑定をうけさせたほどの野球狂。

朝、未明から起きされ、寢呆けた顔で準備にかゝる。當日、天氣晴朗なれど風強し。コレ〜。日本海々戦とはちがひまつせ。

キヤッチャーミット。グローブボール。の外は何の用意もない、

如何に旅先でもこれはまた變はつたこしらへ。

河内家、豊田家、伊丹家、高島家、と、それ〜染ぬいた黒のはつびをユニフォーム代りに着てその上から、花四天がつける白猷上の割ばさみをバンドとして締め舞臺用の紫小櫻の紐つきの足袋を穿き、錦襪の小手脛當の陣立姿勇ましく、威風凛々四邊を拂つて熊本グラウンドへ出陣した。

この、奇妙奇天烈な選手の装ひは、先づ戦前に敵を畏怖せしめ、スタンドの觀衆をあつといはし、役者の素顔みたさに群がり集つた娘小笹藝妓等を陶酔せしめた。

先づしばらくは、腕均らしの小手調と御座い。午前十時、ちよーんと、拍子楯が鳴るのを合圖に松竹の先攻にてプレーになる。

先陣を承はつて市川建藏味方の拍手に送られて進み出で武者振ひ二つ三つ、バットを斜に構へて大見得を切る。

『イヨー、たかしまやツ』の聲。

この時、此際、神威なる松竹チームボツクスから冴えた三味線が聞える。

ジャン。ジャン。ジャン。ジャン。ジャン。ジャン。ジャン。ジャン。

即ち、松竹チームの應援歌、長唄連中の大薩摩がはじまる。

野球の應援歌が大ざつま、廣い唐にも天竺にも、こんな試めしは更がない。

『そーれ、水の都の浪花津の、道頓堀とはそのむかし……』

トテテリ〜〜〜  
阿呆らしゆうなつて来る。

敵は、さすがに怖ツとした、笑殺され若し精神上の動搖があつては大變と、氣力の平板をもつて来て、バットでガン〜叩いて大薩摩を消しにかゝる。

イヤハヤ騒々しいといつたら。

やがて、球は彗星の如く建藏の頭上めがけて飛んで来る。心得たりと身をかはし力をこめて打つ。

敵のビツチャーの腕が冴えぬためか、ねつから反應なし、市川建藏己れのバットで己の脛をしたゝか撲つて『アイタ……』

そのはず、ボールは既にキヤツチャーの掌に収めて敵は尻喰へ観音と来る。

遂に三振、青息吐息。

それでも口は達者「此次には本壘打です」、よし、其言葉わするゝな。

ついでに土俵へ上つたのが美鷹といふて左利きの若武者、バットを振つて丹念に仕切る。

雷の如き速球を打てば不思議やたしかに手應へ（不思議の三字謹而取消す）

しかし、カーンと響かぬ。その筈、小さいスポンヂの球、されど、一時ピンボン用のセルロイドの球時代を回顧すれば隔世の感ありだ。

惜しや「アット」となる、敵は三。

こゝらで、義太夫をいれて「弓矢神にも佛神にも、見はなされしか口惜しや」と、ぼてちんの一つもほしいところ。

つけらつて實川鷹藏バタ〜とかけつけ、豫而用意の。

『我チームの興慶此一戦にあり各員奮勵努力せよ』の傳令、されど其効皆無、東郷提督どの、御苦

勞々々々。  
敵は既に五點。

關三郎出で、弱打、正壽凡打、豊三郎貧打、よしの空打、落球逸球、いやはや味方の旗色具さに悪し。

斯うなつては規則も糞もない、謀計を帷幄のうちにめぐらしてゐたコーチャーの壽三郎、我を忘れて本壘へつめかけ。

『我こそは柳生流の達人、甲子園にて威名を挙げし、松竹のケレートバツタ坂東壽三郎豊成、いで來い勝負』と、進二無二バットを振廻はす。

この、途方途徹もなき敵暴極まる振舞に、さしもの敵も度膽を抜かれ、反則の入れ替をしたが陣容漸く亂れる。

その虚につけこみ得たりと打てば球は宙を飛んで二遊間へヒットを出し、代走ゆかたが三壘を踏む

やがて一點「わあーッ」と喊聲、  
併儼といふので衷心から此際松  
竹へ一點を入れさせたく思つた、  
コテ塗り厚化粧に晴れ着の藝妓が  
「とよだやーッ」と絹を裂くやう  
な聲、

タイム黙禮、その兩眼に露が  
光る。

先刻から尻がモズムとしてみた橋  
三郎も、斯うなつてはぢつとして  
は居られぬコーチャーの身を忘れ  
て飛び出し。

「我コソは、寶藏院流の奥儀を極  
めし智勇兼備の名將、嵐橋三郎見  
參せむ、美事その球投げてみよ一  
頭から湯氣立て、威丈高。

「何、小癩なり」と敵の投手激し  
く飛ばす、まぐれ當りに（これは  
失禮）物の美事に右中間へ打ち飛  
ばす、萬雷の拍手、市川巴代走。

この人、花もはぢらう女形の品  
位よく嬌態をつくり、腰元が花道  
へ走る格好大うけ「イヨッ、千  
兩ッ」  
下げ髪に振袖の女學生の二人三  
脚と果して孰れが速やかか。

二壘を踏むた時に「アウト」、  
それを「セイフ」に聞き違へて無  
暗矢鱈に三壘へ走る。  
敵の應援「わッ」とひやかす。

それを味方の喝采なりと感違ひし  
て泡を吹いて本壘へかへり初めて  
それと判つて薙に油揚をさらはれ  
たやうに暫時ポカーン。

大向ふから「甘納豆入らんかな  
ッ」と、肥後訛りのぞめき。  
ピッチャー橋線（花岡）は、役  
者は拙いが投手は巧い、尤も、役  
者ほど拙かつたら既に投手たるの  
資格無しと、いつて、敵に三振  
を與へるほどの腕でもない。

第七回うらにて曲球を投げる。

曲も曲すぎて見當違ひの本壘よ  
りは寧ろ一壘近きあたりへ飛び、  
ボールは皆鷹の頬桁を強く刺す。  
蜂と間違へちゃアいけねえ。  
まことに劍呑千萬、側杖もちと  
念が入りすぎた。

「斯ういふこともあらうかと、應  
と軟球を選んだのだ」と、主將壽  
三郎が唾つけてやつて、ちんこの  
禁厭々々。

「いくら曲球でも同志打とは曲が  
ない」は、鼻持のならぬ駄洒落  
一勝一敗虚々實々、刀折れ矢盡  
くるまで妥を先途と戦ふこと、風  
袋除けて正味二時間。

遂に、12—8、にて、無慘や松  
竹兜を脱ぐ。  
敗軍にとつて阿蘇風いとゞ身に  
泌みて寒し。  
一旦、旅籠へ引あげ戦塵にまみ  
れし伴天をぬいで紋服と着替へた

ところは、立派な美しい道頓堀の  
お役者様々。

敗軍の將語つてはいはく。  
「僕等は紳士競技だから、元より  
勝敗は眼中に無し」だとさ、

「然らば、一點入れし際、兩眼か  
ら流した涙は如何に、眼中にある  
から眼から涙が出たはず、イヤサ  
御返答が承はり度い」と、開き直  
つては隙眼がないから、佐賀、久  
留米にては松竹が大勝、福岡にて  
は敵へ軍配があがつたことを書い  
て、こゝらでデョーンと橋頭、菴  
但し、熊本、博多の敗戦は絶対  
の内證とのこと、皆様、決して世  
間へ御吹聴下さるな。

# 淋しき答辯

川口尚輝

問ひは――

「どうすれば、現在の新劇を、普遍化することが出来るか？」

答へは――

「新しいよい戯曲作家の、よい戯曲の提供」

概念的だと仰有いますか？

平凡だとお笑ひになりますか？

甲の戯曲作家は、自作の初演を初日に観ました、

乙の戯曲作家は、自作の再演を遂に観ませんでした。

丙の戯曲作家は、自作の上演を舞臺稽古に立ち會つた上、翌日その初日を観ました。

甲はわれ乍ら感心してよろこび、乙は上演料請求の電報を打ち、丙は俳優に對して臺詞の自作に忠實であらんことを要求しました。

三人とも、たゞそれだけでした。

この三人の戯曲作家は、「現在の新劇を普遍化する」といふ問題に、どんな役目をしてゐるでせうか？

書齋の戯曲作家は、絹のリボンで編んだ部屋帷をあみだに冠つて「ファウスト」のやうなものを書かうといふのです。

劇場の戯曲作家は、絹の襟巻をして、白足袋を穿いて、「三人吉三巴白浪」のやうなものを書かうといふのです。

# 歌舞伎禮讚

縄村正治

歌舞伎滅亡を唱へるお偉い方々へ此の貧しい一文を御讀み下さる様に御願ひします。

私は十一月號の改造で谷崎潤一郎氏が歌舞伎

のために、あの饒舌録の中に、鷹治郎の味は大阪人のみが知り、菊五郎の味は江戸つ子によつてのみ味はれるのだと、言ふ意味の事をお書きになつてゐる。

それに私は、中座十一月興行で「夕霧伊左衛門」を見て、谷崎氏の言葉に強い裏書を感じたのである。

幾十年幾百年以前の所謂船場のぼんちの姿は大阪の地に生れた成胸屋鷹治郎翁によつて、モダンガールの飛びまはる道頓堀に再生されたのである。あの氣隨氣儘な、そして豪勢なぼんち振りよ。

それに付き合つた、新駒屋丈の本職は別として、唯一人中車老の亭主喜左衛門のみが、どうも、水に油の様な感じがするのだ。私達大阪人にはびつたり氣持に添はないのは、大橋家が江

「あなたのこんどの作品は、ドイツの表現派の作家の××によく似てますね」

「え、あの作家は好きだから、多分影響を受けてゐるのでせうよ」

「あなたのこんどの喜劇は、曾我廼舎の脚本によくある筋ですね」

「え、一寸ヒントを得ましてね……ハッハ」

「どうすれば現在の新劇を普遍化することが出来るか？」

「劇場の形式、俳優の素質、演出者の頭腦、資本家の理想、等、等、等、

いろ／＼に考へさせられます。

しかし、最も急に、そして第一歩に必要なことは、観客に親切な、素晴らしい創造力を

持つた戯曲作家の、出現ではないでせうか？

ツイットコフスキイのコンメンタルなんかなくても『ファウスト』を理解し得る教養

で、實際上に『三人吉三』を現代化し得るやうな作家があつたらいいと思ひますが。

Aの影、Bの獨白、死の聲音、何々と登場人物を列べて書いてゐた大學出身の戯曲作家

が、座附となつて曰く――

「僕は芝居者と云はれても構はない、十年ぐらゐは、幕の間から観客の一舉一笑を覗いて

ゐるつもりだそれからだつて遅くはないよ、シエークスピアやイブセンを見たまへ」

と、云つてゐたが、惜しいことに、いつの間にか學究炎といふ病氣に取り憑かれて、彼

の大事なものを二ツともなくして、遂にたゞの筋書きを書かせるやうにしてしまつた。

劇場の魅力は、恐ろしい運命をも孕んでゐるらしい。

一人の俳優が、演出監督の職分に就て、訊ねると――

訊ねられた俳優が、多分、われ／＼と臺本とを見較べる役目なんだらう、と答へてゐる。

「どうすれば、現在の新劇を、普遍化することが出来るか？」

答へるまへに、しかられてゐるやうな氣が致します。

戸つ子だからである。此の種の氣分で進む劇の配役には、スターシステムは感心しない。

別に此れは、松竹合名社の提灯持ちではないが、私の言ひたい事の前提の一例に利用したばかりである。

私は、観劇は娛樂の一つであると信じてゐるのだ。或る識者の様に、心の糧であるとか、生活上必須の修養機關のなんとかと言ふ様な理窟は抜きにして一定の觀覽料を支拂つて、一定の時間、唯だ恍惚となるために劇場へ足を運ぶ男である。

観劇をしてゐる人々の大部分も、恐らく私と同じ様な氣持で、あの柵の中に、椅子の上に腰をおろしてゐる人々だらうと、私は、私勝手な想像をしながら、又も愚筆を進めてゆく。

三段論法式に、故に大部分の觀客にとつて劇場は、教室でも講堂でもなく、老若男女が一つに集つて、唯だ遊ぶ所であらばいいのだ。

一體、我々人類は、なんてむつかしい文句を使ふが、美を求める氣持、争ひに勝つ氣持、昔を偲ぶ氣持、惡を懲らす氣持と言ふものを娛樂の中に求めるのではないだらうか。若しさうだとすれば、我が大阪町人が、紙治や夕霧伊左衛門や、黙阿彌の勸善懲惡なお芝居、お家騒動も

# バラエティ小論

森田信義

どうです。もうそろそろ大阪にもバラエティが出来てもいい頃ではありませんか。バラエティと云つても、あの法善寺横丁にある花月だの、紅梅亭だの、あんなものではありません。それ、外國映畫で見掛ける、あいつです。大仕掛な奴のことです。

建物や何かも、慾を云へば、松竹座ぐらゐるのなら申し分なしですけれど、とりあえずバラックでも好いのです。なかに、野天にテント張りと言ふ式でも結構です。

芝居は勿論、結構。映畫も結構。それ／＼結構ですが、もう一つ、このバラエティと言ふ奴は、實に結構なものですがねえ。

芝居や映畫とは違つて、バラエティの特色は徹頭徹尾、官能的であることです。徹頭徹尾官能的酬酢に、觀衆を浸らせるところが價値です。

殊更らしく云ふところは無い、現代の私達は生活のうちから、すこしも喜びや楽しみを發見することは出来ない。生活は重荷です。私達は重荷を背負つて、よち／＼歩み續けてゐるのです。頭は疲れ切つてゐます。情操はひからび切つてゐます。

藝術的滋味を吸収しようにも、反能しようにも、餘りに疲れてゐます。

些の精神的努力も、勞力も、荷せられない興味でなくては、興味にならないのです。好いこと悪いことか、映し出現象か。——そんな論議はどうともよるしい。事實のところ、さうなのだから、仕方がありません。

さう云ふ譯で、さう云ふ意味で、バラエティこそは、私達生活に疲れてゐる民衆の好伴侶たり得ると思ひますが、どうせう。

も一つ、相の上での、バラエティ演技の特徴は、勝負が短いと云ふことです。経過がな

の（此れは、階級が違ふにしても、英雄崇拜の日本魂が求めるために）延いては、筋の簡單な新派悲劇、今日に及んでは劍劇等の種類の物を多く求めるのは、宣べたるかなである。

では、藝術的のものとは斬り込んで来るだらう。

それは向上慾に燃える若い一部の人々には歡迎されるにしても、一般、大阪町人は無教育なのが多い。東京の劇作家諸先生方とは違つて、大學校の正門も刑務所の正門も同じ洋館建ちだと心得てゐる人々の方が多いいのだ（大阪町人よ併してフンガイするな。それよりも、自分の隣人に注意して見ろ。）

その人々に、おい佛蘭西劇は明るいとか、露西亞の『どん底』は暗いとか論じて見るよりも太閤記十段目は面白まんとか、仙臺萩の政岡は可哀ぞだんな。と言つた方がどれだけ、よく判るかも知れないのだ。

大阪町人にもてはやされる芝居は、歌舞伎劇であり、役者は成駒屋はんである。

成駒屋のあの舞臺姿は、過去の我々の姿なのだ。紙屋治兵衛にしても、梅川忠兵衛にしても、

いくら、今日の芝居だと言つても、海の外の事を知らない我々大阪町人には、翻譯劇はどうしても唐人の臆言である。僅かに貧しいインマ



い。結果だけある。これは、かう氣忙しい、氣短かな、すぐにいら〜じり〜して来る私達に不向きでせうか。

それから、も一つ。勿論官能的にですが、この演技は極度の刺激と按撫とを狙つてゐることです。これを観客側から云へば、極度の緊張と、弛緩ですな。

いやもう、私達は尋常大抵の刺激では、當節ではびくともしませんからね。それから按撫、これは實に心地が好い。一日の疲労を揉みほぐしてくれます。恰度あんまさんが肩の凝りをもみほぐしてくれるやうに。

云つて見れば、バラエティ演技は、スピリットとあんま——のやうなものです。疲れを癒するにはこれに限るときへ思ひますよ。

さて、バラエティ演技とはどんなものでせう。

これは坪内士行さんから聞いた話の受賣りですが、アメリカ(だつたと思ひます)で、恠んなのがあつたさうです。

舞臺の一隅に、軽い無蓋二輪馬車が數臺、横隊を造つて並んでゐるのです。勿論は生きた、しかも三四歳位の逸りに逸つた馬です。馭者は古代ローマ風の服装よろしく、長い革皮の鞭を携へて、合圖あり次第胸を馳らせんと身構へてゐます。競馬のスタートですね。各人非常に緊張した顔付をしてゐたさうです。装つてゐるのではありません。實際一つ間違へば生命がけですからね。

と、號砲一發、鞭は雨のやうに降ります。びゆう〜と熾んな聲を立てます。馬は躍進します。大溝のやうに湧る上る猛烈なガラスバンド。

馬も車輪も馭者も一塊——眞に一塊になつて、疾驅します、疾驅します……。

舞臺幅は約二十間、とか聞きました。此の容子では瞬時に馬車はゴールに飛び込み、否、ゴールを突破して對倒のふところに飛び込み、向ふの壁に衝突つて馬も人も車も木葉微塵にだけ飛ばねばなりません。それに、なんらの奇聲! 馬は白い泡を吹き、人は流汗淋漓、鞭は稻妻のやうに降りますのに、車は遅々としてし前進しないのです。

ジネーションがしたしむ丈けである。

一體、歌舞伎劇は、江戸よりも關西の地から殊に京大阪で育てられたのである。今日の所謂歌舞伎劇は、幾代幾十代前の我々の先祖が手鹽にかけて育て、來たものゝ成長である。成程、四國の一寒村から、都へ出て來た人には、歌舞伎劇が無用の長物にも見えるだらう。たとへ氣持に添はず、羽織袴でパンを嚼んでゐてもいゝ今日の問題を取扱つた芝居の方が幾分なりとも面白いだらうが、私達大阪町人の血の中には、紙治や、梅忠と類似した血が流れてゐるので。では、大阪町人の趣味性は萎縮してしまふ一方に見えるが、半面には、向上慾に燃えてゐるから御安心下さい。築地が來ると各等賣切ですからね。

總べて、大阪町人にかぎらず、人間の半面には、懐古の氣持が秘んでゐる。その半面をかざして、私は歌舞伎禮讃を唱へるのである。

徒らに叫ぶ歌舞伎滅亡近きでありと言ふ暴言に對して、此の一文を草して見たくなつたのである。(終)

——雀右衛門の死んだ夜に——

これには仕掛けがあるので。舞臺全體がエスカレーターになつてゐるので。銃砲が響き、馬が一步踏み出した瞬間に、電流が通じられ、舞臺はエスカレーターの運動を開始するので。即ち馬車の行進方向に對して逆方向に、エスカレーターは行進します。そして、兩者の速度は殆んど同一に近いのです。

馬も馭者も渾身の努力を以つて疾馳してゐる馬車が遅々として、前進しないのはから云ふ仕掛けがあるからです。

でも、馬車は一分、ゴールに近づきますこれで見るとエスカレーターの速度は極めて極めて些少なから馬の速度よりも少なく調節されてあると見えます。

馬も人も血眼。觀衆も血眼。灼熱した興奮。熱狂したブラスバンド。

嘘も偽りもない眞剣！ 混りものゝない眞剣！ 鋼の絲のやうにびんと張り切つた神經

……素晴らしいぢやありませんか。

數分の後、ゴールの前に胸を反らした第一着の馭者の額は汗と誇りとに輝いてゐます。反らした胸はまだ激動が納まらないで、大波を打つてゐます。馬は音を立て、荒い息使をしてゐます。湧き上る歡聲。拍手。煽り立てるブラスバンド。

エスカレーターは徐かに運轉を停止し、カーテン降る。

こんな大資本を要する設備は、ちよつと直ちに私達の國に望むことは困難らしく思はれます。

しかし、當分のところ私達は、花の如き美少女の猛獸使。潤然と嗤笑することの出来るオペラ、コミック。黒奴の拳闘試合。支那人の怪奇なる武技。空中ブランコ。コミアルダンス、ジャズバンドをふんだんに使用すること。但しジャズは是非々々日本の俗曲の編曲であること——お馴染みの磯節に續くに、更らにお馴染みの安來節、一轉して籠の鳥。とまあ恣んな鹽梅の奴。この程度のプログラムでもどうやらからから、満足出來さうです。もうそうく大阪にもバラエティが出現してもよろしいでせう。いかにです。

## 第五回川柳座句會

(十二月十三日)

於・食・滿 邸

主催・『道頓堀』

### 鼓

五葉選

乗合の鼓いやといふほど使はれる  
立合ひの仕度を鼓せきたてる  
痛さそうに鼓をのせた地藏肩  
大鼓のひとりすぐれて見つめられ  
辨當のなけば鼓で暮はあき  
能舞臺鼓を打つは御前様  
所作舞臺鼓漸やく番が来る  
裂帛の叫びをあげて打つ鼓  
打出しにもう一度見る鼓の皮  
すこうしは舞子鼓へ傾いて

桂三  
夢路  
三巴  
寛汀  
三郎  
迷亭  
迷亭  
三巴  
南北  
繁二

佳

忠信に鼓を貸した籠の内  
鼓の音笛の音大向ふまで静か  
才造はつまると鼓たゝいととき  
鼓の音運參の廊下よく迂り

桂三  
万よし  
南北  
小太郎

# 湯氣の中の劇評

— 延若に就いて —

畑山 茂

坊主の坊主臭さが結局坊主の嫌味である様に劇評家の劇評家臭さがいつも劇評そのものを、そうしてそうした劇評本位の雑誌などを嫌味たつぶりなものにして、了つてゐる事實を感々見ることが出来る。私はそんな意味で劇評家の劇評などにはあんまり興味をもてずむしろ勝手な熱もよい加減にするがよい、と云つた様なひんしゅくさへ感じて折角の立派な劇評家の劇評を拜讀する機会を殆んど持たないことを常に遺憾に思つてゐる。

(知らせ嬉しく……と延壽の喉がふるへると梅幸の三千歳が出て来るんだす。あしこなどとはたまつたもんやおまへんぜ)

など、錢湯の湯氣の中でやつてゐる吉さんや寅はんの劇評の方が、むしろピツタリと私等の胸に来るのである。

「情緒の美」と云ふものに對する陶醉が芝居道の殊に「芝居を観る人々」の根本希求である以上、小むつかしい劇評は劇評家と劇評家のための劇評であつて「芝居を観る人々」にはやゝともすると縁遠い。よいことか悪いことかこれは論斷の限りでないが芝居を観て酔へばそれで満足であると云ふ事、以上の秀れた鑑賞力を持合はさぬが故に私は常に吉さんや寅はんの湯氣の中の劇評の様な劇評を味ふことが嬉しい。

理窟をコネ廻わして恐縮であるがそうした立場から芝居を観てゐると「芝居と云ふものむつかしく云へば『劇』と云ふものはいつまで經つても味はひの盡きぬものである。むしろ疲れたさうしてひからびた魂にうるほひを絶えず注いで呉れる。よく芝居に中毒して面白くない、と云ふ劇評家の泣き事を聞くが中譯する様な芝居の觀方をするからいけない

たよりない鼓植木屋下りてくる

人

囃子部屋鼓の無駄を打つて待ち

地

安來節鼓の男控へたり

天

山の場の鼓試験をしてるやう

## 碁盤

互

お茶室の碁盤正しくまけるなり

井目は碁石がたらぬやうにうち

駄目々々の碁盤にお茶がさめるなり

道具市はるか碁盤の艶があり

おとなしい人へ碁盤の重たすぎ

碁盤其儘碁敵を送り出し

相對す碁盤互に年をとり

この碁盤餘つ程重いすゝ拂ひ

宿帳を人に任せて碁を始め

寢ころべ碁盤の下から海は見え

一目において案外氣樂そう

碁を崩す外は宵から降り積り

誰も來ぬ雨に碁盤を拭いて見る

蝶二

寛江

塊人

波郎

選

南北

同同

同同

波郎

同同

同同

万よし

同同

三郎

同同

迷亭

同同

五葉

だから劇評が「劇評」になるのである。文句はいらぬ。情緒の美に酔へばよいのだ。だんく世知辛くなりそんな商賣が出来たからとは云へ芝居をむつかしうむつかしうして行かしてとするのは『芝居を觀る人々』のための芝居を弄することおびたい。前置は長くなつたが、さて私の觀た延若であるが『あの役者は顔が長いなあ』と云ふ一言で盡きる様だ。顔が長いがどうした。と聞き直られてはちと困るが兎に角延若と云へば顔が印象の糸口となつてゐる。そこに延若の延若たる値打があり素人としての露骨な延若觀がありはせぬか。

ふりがどうのそつがどうのと云ふことは第二第二でその長い顔から役者としての延若の凡てが出發するものだと思つてゐる。顔が長いなど云へば他人の顔の悪口でも云ふてゐる様に人聞きが悪いが延若が私の好きな役者の一人であるために彼を忘れまいとする氣持があつたので。

延若はほんとうに私の好きな役者である。舞臺藝のデテイルは第二議としてあの押の強さ、何でもかでもやつてのけねばおかぬ、取り様によつては傲慢な何もかもの中でかゝつてゐる風容が鷹なき後の太い劇界の柱として残るであらうことを豫想される點。そうした點から湧き出る彼の好もしさと云つたものが限りなく延若への愛着を私に持たすのである。

延若はたしかに頭もよさそうである。きび／＼した言行がそれを十分癡はさせる。それに骨がある。太い骨だ。骨なしが多い劇界に延若の骨の太さは大分目立つ。福助あり魁車あれど何れもワキの人、鷹なき後結局シテで押し立つて行くのが延若らしいと云ふ點満更でもなさそうである。

然し私は延若の演出を澤山見て来たが、何でもござれの彼の負けぬ氣と器用さが彼の俳優としての藝術に『残るべきもの』を齎さないのであらうことをいつも案じてゐる一人である。梅忠や紙治と云ふ様な鷹の畑の柔かいものにさへ美事に踏み入る度胸と力がある彼であり吉右衛門の盛綱や仁左衛門の師直にまで立ち入る彼であり、失敗はしたが江戸つ子

打つ人も、碁盤も丁度いゝ古きやゝあつて碁盤を運ぶお手が鳴り響の日の碁盤冷たく運ばれる細君はそれと察した碁石の音

上使

返答を待つて上使が歩き出し上使の目右も左も見えないなり一先づは上使奥へ入りける邪麗になる袴を上使穿いてくる白粉も頃合といふいゝ上使何をしに來たか上使の無作法な免状のやうなを上使胸に見せ御上使はおあいそもなく歸らるゝ御上使はよい男ぢやと奥御殿あいびきが上使へ少し遅くなり御上使はそつからそこへかごに花道を直線に來る上使なり別室で上使は友の聲になり御上使へこんな工合に腹を切り袴で上使小言を言ひに來る言ひ切つた後で上使の思へらく御上使が豫定どほりの事を云ひ棧敷へも聞える様に上使言ひ

互

五葉 小太郎 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同



が？と言ふことが判つてゐたら大きな利益が得られると同様、劇團當事者としても、それが判つてゐたら何も苦勞する所はない……。

来るべき大衆演劇は何か？ これは非常に熟考しなければならぬ重大問題で、それが當ると否とは、我々の生死であり劇團の興廢である。未來を豫想するには、先づ過去の歴史を緻密に調査しなければならぬ、新派劇が明治時代に何故流行したか？ 劍劇が大正時代に何故全盛を極めたか？ それは社會狀態と人心の嗜好とを對照しなければならぬ。先づ、明治時代に新派劇は何故歡迎されたか？ 我々が、女に戀をした、そして失戀した。非常に淋しい——悲しい——惜ましい心でゐる、誰れかに慰められたい。そうした場合に、自分より以上に、失戀の傷手を負ふて憐み悲しんでゐる者の姿を見る時、自分の悲しみなり憤みは拭はれて大きな慰めを受けるものである。俺より苦しんでゐる者があるのだ！ 俺の苦しみなどは小さなものだ——」といふ氣持になり心の輕さを憶へる。これは一つの例だ。生活難に於ても同じ事である、新派劇の受けたのは、こうした意味に於て、所謂新派悲劇なるものが、當時明治時代に於て人々の持つ悲劇よりも、強い大きい悲劇を舞臺に於て見せ、それを人々は見て自分達の悲しみや苦しみを癒し慰められてゐたのであつた。然し、時代が進むにつれて一層生存競争に激甚となり、生活苦や戀愛苦は深刻となつて、あまつさへ關東の大震災で、到底舞臺などで演じ得られぬ悲劇をまぎ／＼と目前に見せつけられ又體經もした。すでに、我々日常生活の方が、舞臺で演じる新派悲劇より以上の悲劇である。最早新派悲劇からは我々の望む慰安は求め得られなくなつた、今の世に誰れが浪子さへに同情し涙を流す婦女子があらうか？ 新派悲劇以上に我々の日常生活に深刻な悲劇が繰返されると同時に、新派劇は人々から捨てられた。そしてそれに替つて劍劇が非常に勢で隆盛になつた、何故劍劇がそれ程迄に歡迎されたか？ 劍劇流行を稱して、暴力鼓吹だとか武士道復活だとか、軍國主義、帝國主義だとか言ふが、それ言ふ意味から劍劇が時代の嗜好に適したものだとは思はない。人々は、激しい生活の勞苦に疲れてゐる、生きて行く上に於てはあらゆる苦悶の壓迫に堪へて行かなければならない。頭がくしゃ／＼する、疝が高ぶる、滅茶苦茶に大きな聲で怒鳴つて見たいよう

波 代役の上使は少し小さすぎ

同 お上使の爲に花道ごぎをしき

同 お上使の諧だけ寫る金襴

同 御上使は扇子にものを言はずなり

同 藥師寺は石堂よりも腹が減り

同 赤面の上使理窟に詰まる役

同 重ね着で赤い上使はわめくなり

同 御上使のは入る襖が開きかぬる

同 片つ方の上使の腰はまがつてる

同 御上使の着付一寸ほどあがり

同 御上使はわかつた謎をかけて去に

寶 船

互 選

水府 ゆれて來て玉の轉ぶる寶船

同 寢ころぶと小判を拾ふ寶船

同 晴天ときめてのりこむ寶船

同 寶船坐礁をしてるかたちなり

同 衣裳屋を心得てゐる寶船

同 寶船前の二人は洒落ばかり

同 後から突いたりもする寶船

同 寶船ケナな遊びの姿也

同 寶船朝からのんだ顔の色

同 寶船うらゝかすぎで眠たさう

同 おかゞみを見ておはします寶船

同 同 同 塊 人





も四時間にも使はうとする現代である。演劇より映畫——、人心の移り行くのは是非も  
ない次第である。

されば、今後の大衆演劇は、映畫を無視して方針を定めることは出来ない。目先の變つ  
たこと、大袈裟なこと、變化のある事、此の點では遺憾なく演劇は映畫の敵ではない。然  
らば、今後の大衆演劇はどう云ふ物を選ぶかと言ふと、映畫の持たぬ物、映畫に於ては表  
現し得ぬ物の方面に開拓して行かなくてはならない、それはどう云ふものかと言ふと、色  
彩である、音楽である！ 色と音——これを強調したものでなくてはならない。これなら  
絶対に映畫に領分を没掠されつことはない。

明るいもの、華かなもの、賑かなもの、美しいもの、そして近代的雰圍氣の横溢したも  
の、なくてはならない。同時に愉快に、面白いものでなくてはならない。兎に角、芝居を  
見ても一度家庭の悲劇や生活苦を思ひ出させる様なものでは絶対にいけない。人は、劇  
場へ楽しみに來るのである。金を出して苦しみや煩悶しに來るのでない。一日の勞苦を忘  
れる爲めに、汗と血で得た高價な五十錢なり一圓を出して見物に來るのであるから、觀客  
を喜ばし、彼等の勞苦を忘れさせてやらなければならぬ。それには、愉快なものでなく  
てはならない。今日の生活は餘りに苦しいものである。涙のみあつて笑は少しもない。せ  
めて、芝居を見て一切の勞苦を忘れて愉快に笑ひたいものである。笑！ 笑！ これこそ  
今の人々の望むものではなからうか？

笑を持つた——音楽と色彩を強調せる劇——これこそ昭和時代の大衆演劇であると僕は  
思ふ。

レビユー……レビユーである！ 若々しい氣分、潑潑たる躍動せる舞臺の雰圍氣、近代  
的の明るい麗はしい色彩、華かな音楽、愉快なる笑ひ——を持つたレビユーこそ、今後大  
衆演劇として隆盛になることであらうと、僕は堅く信じてゐるものである……。

出帆の姿は見せぬ寶船  
もう琵琶を聞き飽いてゐる寶船  
ちと外のものを釣りと寶ぶね  
寶ぶね今笑らふたは布袋どの  
持物で座席のせまい寶ぶね  
うき袋といふを布袋はもちたまひ  
寶ぶね或ははしへはしへより  
同 同 同 同 同  
同 同 同 同 同

### 椿姫の梗概(角座上演)

第一、ブルジョワアルに於ける戀の隠棲  
第二、巴里に於ける椿姫の終焉

椿姫の名をマリケリットといふ、彼女は自分の  
の賤しい生れで、娼婦のやうな生活をしてゐた  
が、ある時愛兒を失つた公爵に見出されて社交  
裡に出て、椿姫として持て囃される様になつた  
處がふとした事から劇場で知合つたアルマンと  
いふ青年と戀に落ちた。彼女の穢れた生活は新  
しい純な戀に目覺めて行つた。彼女は遂に華や  
かな社交界から姿を消した愛人と共に巴里の郊  
外に愛の巢を作つた。然し其時は既に彼女は過  
去の不衛生のため不治の病を得て倒れたので  
ある。アルマンが彼女の許に駆けつけた時はも  
う此世の人ではなかつた。

# 芝居國漫筆

徳田純宏

藝人根性に秀れてゐる俳優は多くとも、藝術家氣質に燃える俳優は少ない物と見える。藝術家を装ふた藝人は多いが、藝人氣質を信條としてゐる藝術家は居ないやうだ。

劇團には、一つの思想が無くては駄目だ。俳優には、確固たる主義が無くては駄目だ。減びてゆく劇團には、思想の涵養力が無い、忘れられてゆく俳優には、主義の把握力が缺けてゐる。

樂屋内で用ふ、暴君的なトリックを、最つと外弁へ延長さす力が出ない物か知ら——。劇界多年の因襲を破つて、俳優の給料を、實力本意の下に、明示する事が出来ない物か知ら——。既に左様した時代ではあるまいか。

興行者、俳優、作家、演出者、曰く何々、彼等をしてより實際的に合資組織者たらしめると同時に、強いコミュニニズムたらしめる時代は何時であらう。

同時に亦、演劇をして、社會政治の外廓に放逐せしめず、より密接に、より緊急に、國家的事業として具體化たらしむるの要があらう——。

演劇が、民衆に齎らす潜勢力は可成り大きい物である。

## 酒の始りの梗概(角座上演)

舞臺は夏の王宮である、昔數千年の昔、支那の夏といふ時代に王の禹王の許に吳の國から千人の中から選ばれた美女を獻じたが禹王は美女は國を傾けるもので宮中の召使は唯朝夕の給仕を勤むれば足ると言つて其貢物を受けないで使者には御馳走をして歸す事にした、其時始めて酒を造つた儀狄が酒を獻上するが、酒は何んなものであるかといふ事は判らない、王は試みに飲んだが酔ふて禍を來しては聖人の道に反する言つて飲むことを禁示する、そして酒の器に毒と書いて貼りつけた。吳の國の美女はこのまゝ國に歸れぬと悲んで毒とある酒を見て、飲んで死なうとするが飲むに従つていゝ氣持ちになつて酔倒れる、宮女はそれを見て騒ぐが儀狄は酒に酔つてゐる、そして是れを飲むと愛を忘れると説明するので大勢は争つて酒を飲んだ、そして酔つて可笑き陽氣な振事になるといふ、明るい喜劇である。

## 成駒家と高島屋

運葉な娘さんが三人連れ羽子板のすらりと並んだ陳列の前で、

現在は——。現在には——劇場とは疲れた生活者を休むるに最も都合の好い慰安場所である。だが、その疲れを休まじむるだけにしても餘りに茫漠たる劇界ではあるまいか。甘味の無い乾からびた演藝界ではあるまいか。

若きインテリゲンチヤは、映畫に馳り、老たる物議りはラヂオの恩恵に浴しつゝ、ある現在、演劇の歩調、些か危まざるを得ない状態ではあるまいか。

泥鰌は、泥中に産れたるが故に、永久に清水に育たずとは謂ひ難し。  
民衆は甘きを好むが故に、甘きを以て育てんとするは、餘りに向上を無視した見解と云ふ可きである。

日本中、大衆文學全集の賣行が最高を示したからと云つて、民衆が甘きに停滞してゐる物とは斷じ難い、彼等の道程には講談本時代と云ふ物が横はつてゐたはずだ。

泥に育つた泥鰌を、清水に親しましむる所に演劇の使命がある。否、人類の向上がある。一國の文化的趨勢は、その國の文藝と、演劇に徴してみれば明らかに識る事が出来ると謂つた人がある——。

我國の爲政者には、演劇を理解し、演劇と民衆を結びつけつゝ、社會を凝視してゐる人が幾人あらうか？

最も、知悉してゐる人もあらう。だが彼等は審判を知り、歌舞伎座の廊下を知る而已で眞の淺草を知つてゐなからう。

だが——鐵道省の旅客運輸經濟が、その八分方を三等客車で有たしてゐると云ふ實證を御存じである筈だ。要するに一二等客は五等の赤切筈客の餘慶に依つてボーイに飄で口を

甲「あら、魁車があるわ、どつさりあるわ、好いわねえ」

乙「福助もあるわ、あれ義經でせう。おや、靜御前もあるわ、あの大きな羽子板いゝ男だわね、水々しくつて、誰れでせう」

丙「成駒家よ、富樫だわ」

乙「ほんと、よく似てること」

甲「チュツ、チュツ、チュツ、おゝ嬉しい艶ちやん、紙屋治兵衛よ、鷹治郎の」

丙「まあ高島家さんのもどつさりあるわ、一寸店員さん、高島家さんは當店の御親類？

店員「御談で、親類では御座いませんが同姓です。へい」

丙「ほゝゝゝゝさう」

甲「わ、店員さん、あたしこの成駒家がすつかり氣に入つたわ、岡ぼれしても好いこと」

店員「苦笑して」へゝゝゝゝどうぞ御自由に」

扱て／＼何處へ行つても成駒家は火もてですこれは高島家呉服店の立話し……。

### 道行初音の旅路は

義經千本櫻の初めて竹本座上演になつたのは延享四年十一月で竹田出雲、並木千柳の合作「初音の旅路」は大和の源九郎狐の傳説を脚色せる

利く事も出来るのだ。

劇場の經濟、又之れに匹敵する所の物多からずや。

我々が、兎もすると甘く見やりとしてゐる民衆とは、最も大きな何物かを教へて呉れてゐる怪物である。

演劇の養成は、一つには國家の力にも依る。否々其處迄進まなければ駄目であらう。

だが、我國では、目下脚本の檢閲制度にすら、ある核心的混迷を見せて居る時代である。噫、此秋又何をか謂はんやである。

「無智文盲の活動ほど世に恐ろしいものはない」ゲーテは良い事を言つてゐる。

### 輕便 重寶 共通觀覽切手發賣

今回好劇家各位の御便利を圖り、松竹合名社經營各地劇場共通觀覽切手を發賣仕候間續々御用命の程奉希上候

一、觀覽切手は壹圓、貳、參圓、五圓、拾圓、拾五圓、貳拾圓、五拾圓の八種にて切手と包装は優美にして、四季折々の召上り物や運動場各賣店の御買上品及本家茶屋直營業内所等一切の御支拂に通用致候

一、觀覽切手は本社經營の各地劇場に通用致候

一、觀覽切手の様式は、例へば拾圓切手なれば壹圓券拾枚、壹圓切手なれば貳拾錢五枚を添付しあれば御入用だけ切取りて御支拂になる仕組に御座候

一、觀覽切手は左記の發賣所にて發賣仕候、電話にて御注文被下候はゞ、何程にても迅速御届可申上候

大阪市南區久左衛門町八番地  
京都市河原町蛸薬師上ル  
大 阪 市 道 頓 堀

松竹合名社  
松竹合名社  
角 座  
アレイガイ

大阪市東區高麗橋通心齋橋筋南入  
松竹合名社經營の各地劇場に於て共通いたします

ものである。靜御前は義經を尋ねて吉野山に來かゝる、忠信と思つて召連れて來たのは實は靜御前の所持する初音の鼓の皮の子狐で親狐の鼓をしたつて忠信の姿となつて供をして來たのである。櫻の木影に一ト休みを幸に在りし境の浦の合戦の物語りを靜に聞かすといふ筋で、劇的舞踊の隨一と稱せられる關西特有の所作事であります。

冥土座の正月興行の本極りを聞いて來ましたからお眼にかけませう。(KO生)

新作小 豆 鳴 (二幕)

(宗之助、榮三郎の若手活躍)

一番目 玉藻前三段目(道春館)

(紋三郎の金藤治、愛之助の萩之方、雀右の桂姫、廣一郎の初花姫、泰次郎の采女)

中 幕太功記十段目(尼ヶ崎)

(吉三郎の光秀、宗之助の十次郎、梅玉の早月、雀右の操、愛之助の初菊)

二番目 野 崎 村 (一幕)

(多貞藏の久作、雀右のお光、榮三郎のお榮、宗之助の久松、愛之助のお常)

大喜利 日 高 川 (一幕)

(雀右と愛之助の一日交代、人形使ひは吉三郎)

# 青年俳優・隨筆集

## 或る對話

中村鴈之助

A 『で君はどうして「馬の脚」や「申上升」がそんなに難かしいものだと言ふのだい、ヘツボコ役者のニツクネームは昔から「馬の脚」と「申上升」に定まつてゐるぢやないか。』

B 『處が左に有らずだよ「馬の脚」や「申上升」が無事に勤まれば役者は一人前だよ』  
A 『妙に君は「馬の脚」や「申上升」にヒイキをするぢやないか。』

B 『別にヒイキはしないが、本當の事を云つてゐるのだ、ぢや判かる様に君に聞かせてやらふ、そもく「申上升」と云ふ者は……』

A 『變に改まるねえ』

B 『そ言葉の端を折つてはいけない、黙つて聞き給へ、どうして「申上升」が難かしいかと云ふと、マア假に狂言をの饅頭貰いの有職鎌倉山にしやふ先づ三浦荒治郎を始め、數十名の大名がずらりと並んでゐる。それから花道の出入口ねえ、揚幕と云ふ處だ。そこには佐野源左衛門に扮する役者が、待つてゐる、場席には一日の隙を潰し、高い料金を拂つて老若男女のお客様がゐらつしやる。しかも花道の眞仲へ出てゐつて『ハツ申上升 荒治郎 何事ぢや』ハツ 佐野源左衛門常世様只今御參詣

に御座り升 荒治郎「御苦勞是へと申せ」畏まりました君これだけの事だが仲々云える者ぢやないよ、鎌倉山に限つた事はない、どの狂言の申上升だつて同じ事だ。お客様方が見ればナンダあの役者は申上升かと仰有るけれど、樂家へ這入つて見給え、役者は今度申上升に出るんだ、ハレガマシイなあと云つてゐるよ』

A 『成程さう仰げばさうだねえ、チア馬の脚は、どうして、えらい仕事なのだ』

B 『サアそんな事を云つてゐるから、君は話せないよ、君なんか自分では、劇通だなんて云つてゐるけれど、劇通でも何でもないのだ。よく聞き給え諺に十人十色と云ふ事が有るだらふ。それを二人の人間が、一疋の獸物を演じるんぢやないか、まして人が乗る様な馬に成つたら、なほさらの事だ、前足と後足と乗る役者と、三人ピツタリと氣が合はなければ駄目だ、随分舞臺効果

を上ける馬が有るぢやないか、鹽原多助の馬、大森彦七の馬、一谷の須磨の浦の馬、なんか見給え、いつかも、こんな話が有るよ、今は活動寫眞に成つてゐる神戸の松竹座で二葉葵と云ふ狂言の時だ、序幕に大納言の乗つて出る馬が有るだらふ、その馬の後を勤めてゐる役者が病氣の爲め餘義なく外の役者を頼む事になつたのだ』

A 『どうですウマク勤まりましたか』

B 『又茶化すな黙つて聞き給え、その役者が後足に這入つて、舞臺へ出た處がシア大變だ方角も何も判らなくなつて高足を踏んでゐるんだ、前足に這入つてゐる役者が、引ずる様にしてまあまあお客様の前丈には誤魔化したのだ、その代役つまり代足に出た役者が、しみん／＼云つたよ、私はモウ死ぬかと思ひました、とねえ、その位ひ大變な役目なのだ、どうだ判かつたか』

A 『成程』

B 『仲々大變な者だらふ……あ、すつかりコーヒがつめたく成つて仕舞つたボ  
ーイさんコーヒを二つ頼む』  
A 『いや僕は紅茶の方が好い』

噂

寒いといふ言葉が顔見世の代名詞のやうになつてゐるにも拘はらず、ことしはめづらしい暖かさであつた。而し朝夕はさすがに京都らしい底冷えがするやうだつた、私は朝の序幕をすまして、ぶらりと散歩に出た。足は自然に行き慣れた祇園さんの方へ向いて行つて、御社へお参りをすまして、ひさご屋へ腰を下ろした公園の樹木に朝日があたつてキラ／＼と美しかつた。私は温かい乳に快ろよく咽喉を沾ぶしながらパンを囓つてゐると、隣りの床几へ掛けた二人連れの若い男が

と。云ふ様な對話が或るカフェーにて……

一九二七 顔見世の樂屋にて

中村 福萬壽

あつて、しきりに顔見世の噂をしてゐる私は聞くともなしに、ふと耳を傾けると『顔見世も結構ですが、朝の早くから木戸に立つて、やつと入れれば冷たい蒲團で開幕を待たんならんのが阿呆らしいおすなそれにひきかへて役者たちはまだ宿の温かい蒲團で寝てる時分どつさかいな』  
こんな言葉がチラと私の耳を掠めた。  
私はなんだか、その二人に顔を覗かれるやうな氣がして嫌だつたので、すぐ其處を出て行つた。さうして、こそ／＼と南座の樂屋へ歸つて來た。

# 雷公失策の埋合せ

實川 芦 鷹

東國のある村に雷雨があつた。一人の老嫗は雷に打たれて腕に大火傷をした。

『失策つた!』

それは雷の聲であつた。さうして空中から塚が降つて來た、老嫗はその塚の中の膏藥のやうなものを附けると疵は治つた。

『神藥だ』

村の人がかう叫んで其塚を持上げや

## 本當にあつた話

中 村 市 郎

松島近所の或るにぎやかな通りに立つて道行く人の袖にすがり辻占を賣つて居

うとしたが動かなかつた。しかも空中から赤い腕が出てその塚を掴んで行つてしまつた。

其隣村に又雷に打たれて死んだ男があつた。

『間違つた!!!』

又雷の聲がした、さうして蚯蚓を黒麩にして隣へ附けると叫ぶものがあつた、其通りにすると其男はバツチリと眼をひらいた。

る十二三の可愛い娘が有ります、此の寒空にあはせ一枚でふるへながら人を止め

て居るのです、彼の女等母娘の過去に一つのエピソードが有ります、私は是れから其れをお話し致そうと思ひます……

彼の女の名は百白子母親は松子と云つて以前は東京でかなり名の通つた薬品問屋の娘に生れ何不自由なく暮して居たのです、松子が十七の春をむかへた時、此の店に長らく勤め今では番頭にまで成つた利一と云ふ若者が有りました、松子とは互ひに相許した仲で兩親の許るしを受け夫婦になり以前にまし店もはんじようし幸福に暮して居ました、其の内に彼の女は今の百白子を生み落し蝶よ花よとそだて風にもあてぬいづくしみ利一も初めて事故、夢中になつて居たのです……  
…そのうち東京を引上げて、大阪の船場にて一軒家をかりて以前醫學校に通つた事が有るので醫者をころろさし、もつぱらべんきようして居たのですが、某日友人とある酒場に行き、其處の娘にうつ、になりだし三日も四日も家をあげ金に困

ると自宅に歸り有る丈持ちだし、とうとう百白子が二歳の時二人で何處とも無く駈落をして仕舞ひました。

あとで松子等母子は家を離んでわづかな金をもとでに現住所にて荒物屋を初め日々苦勞を重ねながら、世の荒波とたかひました。

ところが彼の女が八歳の時、松子は風がもとでどつと床に付き一年半程は近所の人の情で暮し漸くおきる様になり身體の自由がきかぬのに無理から近所のあらひ物又縫ひ物をして十二歳の暮れまでさだて、來たのですが以前の病ひが再發してもう今度は自由が利かなくなりばつたり床に入りきりで今では百合子に辻占をうらせてほそくながら母娘がからうじて露命をつないでゐました。

百合子は或日辻占賣りの歸り路とある曲り角までくると出合頭にいつくして來た自動車あつ……と思ふまもなく彼の女をばねとばしました、車中の人はおど

ろき車を止め彼の女を抱きおこしましたそして僕の宅へと運轉手に言附けましたけれ共百合子はかすりきづ一つだになくおぢちやんはお母ちやんの病氣が氣に成りますから早く宅へ送つて下さいとせがみました、其の人は其れではよい僕は醫者だからすぐに見て上げ様と運轉手に「おい此娘さんの宅まで早くやれ」と命じました、やがて自動車は有る裏町の穢ない長家の表につきました。大急ぎで白子は上るとそこには母親が寢て居ますお母ちやんくくと呼べど母親は返事もしません。それも其のはづ母親は百白子の留守の間に遠き歸らぬ旅に上つたあ

## 滿洲へ行

下の關へ乗込んだ三日目の晩の事でした。

とでした。百白子ははつとなきだしました、醫師も氣の毒に思ひましたが今少しのちがひでもう取りかへしはつきません其處で百白子に名を問ひましたなくく母は大村松子私は百白子と云ふのよと答へました、其の一言をき、彼見るく顔色も青ざめ暫く二人を見くらべました、やがて彼れの目には涙の露さへやどつて居ました、彼れは何者でせう？ 十何年前家をでた父親です。今では後悔して二人の有り處を探しもとめて居たのです。どうか其後の百白子ちやんが幸福で有る様にお祈りをしてやつて下さい、是れは本當に有つた話です。

市川右若

劇場が閉場てから、直ぐに寢るにも、早や過ぎるので、二三分波止場の方を



散歩しやうと、ぶら／＼夜店の出て居る街の方へ出かけた。

港の町にはもう冬が訪れてゐる。夜の港の街の情景は何んとなく、廢頹的な空氣が漂ふて居た。さうして何處となく一種の哀調に帯びてゐる、冷やかに地の底へでも吸ひ込まれてしまひさうに少し小暗い町の曲り角で、ぼつたりと出逢つた人があつた。

それはK子と云ふて、九州路ばかりを廻つて居る、歌劇團のダンサーの一人であつた。流行の短いスカートに、白い大きな毛皮の附いた、オーバーを着て居たと云ふのですが、彼達はよく、同じ都會で興行をしたり、又合宿になつたりして何時とはなしに、只顔見知……と云ふ位の心易さになつて居た。

『K子』に別れてから『Y』は或る小さな港の人々ばかりを相手にして居る酒場の様な喫茶店に這入つた。

暖いコーヒが湯氣を上げて丸いテー

ブルの上へのせられて居る。小さな角砂糖が三切、彼はそれをきたなそうにつまみ上げて、コーヒの中に入れた。

『大連……』彼は口の中でもう一度、くり返して云ふた。

細いパン粉の様な雪が音もなく降り積つて氷の様な寒風は街中を我が物顔に、駆け廻つて粉雪も共に捲き上げながら途中に出會ふ、何物も残らず一色に蔽ふてしまふあの恐ろしい吹雪……飛んだり刎たり、踊つたり。……雪の粉は寒風に、あほられて狂いまわる吹雪の夜……これから丁度其の期節になつて行くのだ。

『今晚は……』

『イヨウ。此の頃は此地ですか……』

彼は突然、聲をかけたものだから一寸面喰つて大きい眼玉を眼鏡越しに見張つて、やつとこれだけ云つてのけることが出来た。

『イ、エ、今着いたばかりなんですがね

又直ぐに今夜の船で大連へ行きますの』

『エツ、大連へ……そうですか。それぢや今年中行つて居らつしやるのですね』

『エ、それはわからないんですの今年中で歸えるやら、又来年もあちらで暮らすやらね……』

『そうですかママすいぶんおからだを大切にね、お氣を附けて行つてゐらつしやい』

『エ、ありがとうぞんじます』

こんな會話をして、彼は彼の女と左右に別れてしまつたが……暗い街を一人で歩きながらK子の事が氣になつてならなかつた。

彼も、やはり九州路から中國邊を年中打つて廻つて居る、ちよつとした旅役者の一人で、彼の女達は、何にも知らずに平氣で、

『大連へ行きますの』と云ふた。

彼の様な内氣な、男には何んだか恐ろしいことを聞いた様に思はれてならな

つた。

かくして彼達は、お互に其の身の上を  
あわれみながら、慶頼した生活をしながら、

『ドン底へ……ドン底へ……押し流  
されて行くのであらう。』

丁度、幹彦氏の旅役者の様に……もが  
けばもがく程、運命の沼の中へ中へと沈  
んで行く事であらうと思ふ。(一・二・九夜)

### 俳優俳談 (B)

俳優俳談……生意氣にかう題を附けて  
見ても、案外幼稚なものである事は始め  
に御断りしておきます。

門前の小僧ならわぬ……、何んとやら  
で、近頃師匠から句作談や、俳句のお話  
等を、時々伺ふ時に聞きましたので私も  
一寸其のまね事をシヤベラシてもらいま  
す。

『口紅は青葉のうつる舞妓かな』

私によく『情緒俳諧』と、ことさらに  
或る一種の、やはらか味のある句をこん  
なに名詞を附けて居ます。

此の句は最近、近松秋江氏が物されて  
或る雑誌に寄稿されたものです。が前髪  
一ぱいに押しかくす様に差した花簪の

青や、紅のピラ／＼をはなやかにゆらめ  
かしながら人形の様に濃く彩つた口紅や  
白粉に、初夏の生々した、若葉が仄かに  
映えて居る情趣は、『幹彦』の『舞妓姿』  
を連想されるのです。けれど少々、時候  
はずれの句です。

『身一つを邪魔にされけり煤拂』一茶  
一茶らしい影の濃い句だと思はれます  
煤拂ですから此の句は忙い師走を詠んだ  
句の様ですがこれなら時候に相ますが、  
私のいはゆる、情緒俳諧にわ、少し關係  
がとほい様です。

『寒紅の口より恨み聞きにけり』  
これは、月斗氏の句の様に聞いて居り  
ます。私は何時も此の句を口にしますと

……戀を知り始める頃……  
てな感じに打たれるのです。初ぶな小  
娘、そうです、こと更らに乙女と云はず  
に此の場合は、こむすめ、と云ふ方がい  
様に思ひます。

すんなりとしたからだに、麻形か何ん  
かの帯を長く結んだ船場邊の『イトハン』  
が人知れず戀する人のそばで、涙にくれ  
ながら恨事を……自分の胸に思ふ十分の  
一程を云い並べて居る情景が、浮かんで  
來る様に思はれます。

此の場合此れを芝居の方に考へますと  
野崎のおそめ……等が思ひ出されます。  
現代ならば……紅燈の影の柳を背にした  
うす暗い處で、可愛いらしい舞妓が、初  
戀のお客に恨をうつつたへて居る。月はお  
ほろに……テナことが書きたくなる  
句です。

『行く年の女歌舞伎や夜の梅』  
天明の巨匠、蕪村は女歌舞伎を見て何  
んと感じたのか、こんなに詠んで居りま

す。  
或る人は年の暮れを詠んだ句だと云ひました。が私は此の句も情緒俳諧の中に加へて居ります。

成る程年の暮を詠んだのかは知りませんが、青春の名残をかすかに止めた年増女の狂はし迄になつたなやみが現はれて居ないでせうか。

『十六夜の月の廓を房りけり』先斗

## 『私の経験したチャンス』

實川 延太郎

生意氣をいふやうですが藝術家たる俳優は凡ての藝術に堪能なるべき事は云はずとも明らかなる事ですが爰に私は三絃と云ふ物に志した動機をお話致したいと思ひます。

私も延三郎と云ふ父を持つだけに幼時

何んと云ふやはらかい感じのする句ではありません『十六夜』と聞くだけでもう情緒味たつぷりの様に思はれます。

『人知れず乙女淋しく戀を知る』

『驛路に寝心地悪き夜寒かな』

『瀬々良岐を寒く聞いたり旅枕』

『馬洗ふ筑紫の河に秋深し』

等、習作句二、三、……………

(十二月十五日夜)

座にて興行の際故市川荒太郎氏片岡愛之助氏の兩名幹事となり長唄研究小女枕會と云ふ物を組織され約二十名の會員にて河原町の共樂館に於て大會を開催されました。聴取客には村屋六治氏村屋新右衛門氏を始め祇園先斗町宮川町の技藝員及び祇園の紫連各花街の妓達女將連にて非常な盛會でありましたが懐古致しますれば随分慥面もなく會員として出演した物で長唄と云ふ物には無経験の私勿論前申したやうに淨瑠璃の三絃だけは幾分経験は持つて居りましたが随分冒險な出演にて急に作者の竹柴君を宅に招き蓬萊及び越後獅子二つを十日間に俄稽古を致しまして是が則ち私の長唄研究をした動機で夫れからと云ふ物は此度は自發的に稽古を仕出し其中に面白味が加はり今では長唄の趣味と云ふ物を知り初めました。

より舞踊鳴物淨瑠璃は日課の如く只家の者に強いられるが儘役目の如く他動的に行つては來ましたが凡て物には動機と云ふ物がありまして私が長唄の三味線と云ふものを研究するやうに成りましたは丁度今より三年前則ち十三年九月京都京都

# 顔見世 雑感

片岡我久之助

今年始めて顔見世へ出演しました、序幕が九時に開きますので朝寝坊の私には随分辛いものですが、その變り他の芝居では得られない気分が味はえます、程近い宿屋から床をぬけだすなり朝食もせずに眠い眼をこすりくぐり部屋入りをする

のですが観客は最う場内に溢れてゐますのでつい嬉しさのあまり眠氣を忘れて舞臺に出ます、京都へは度々参るのですが同じ芝居、同じ京の見物であり乍ら顔見世には別な懐かしい奥床しい、とても外に心地悪いボールの音を立てる電車や胸の悪いガソリンを吐くあはたしい自働車が通つて居るとは思はれませんが、幼い頃母に抱かれて見物に行つた頃の芝居の

ことが浮んで参ります。私はこの役何んなせち辛い世に變つて行つてもこの顔見世だけは何時までも残して頂きたいと思ひます、眞實の歌舞伎らしい芝居を見るのは顔見世において他にないと思ひます

## ◇おことわり◇

以上七氏の外に、中村魁童氏の『閉め切つた部屋』といふ小品を頂きましたが、頁数の都合で掲載出来なかつたことは大變残念です。筆者並びに尙號を追ふて俳優諸氏の隨筆を出してゆくつもりで居ります。

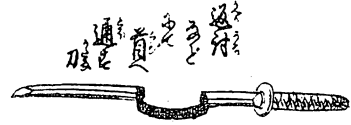
【雁治郎の一年】(四十頁より續く)

るもともである。その意味に於て鹽原多助の如く白く塗らない役には雁治郎自身も扮役を喜ばないのではないかとも思はれる。雁治郎の演ずる悲劇は決して強ふる程度のもではない。これでもかこれでもかと強るのでなく、斯うするのにあつするのにと身を控えるのに拘らず縛られる義理と人情のしがらみに、劇の主人公自身よりもそれを客觀視する見物がまづ泣く悲劇の方に成功して來てゐる。

私は最後に『心中二枚繪紙』の如く大近松翁の作品をどしどし劇化すると共に『本藏下屋敷』の如き好箇の掘り出しものをせめて年に一作づつ、でもよい此名優の手に依つて拾ひ出されることを切望する。

- ×
- ×
- ×
- ×
- ×

歌舞伎の龍盡誌



三浦おいろ

道頓堀の初めて新年を迎ふに寄り作者として狂言に現はる、龍を集めて芝居の書初めに筆を試みるも初辰の縁起よく、その爲め口述、東西々々。

▽金剛寺の天井に墨繪の龍を畫かぬとて慘まじや直信と雪姫は細目の恥

▽俱利迦羅丸を瀧に映せば落來る水に飛龍の形不思議と呆れる松永大膳

▽妹春山の寶劍は金龍と化して鎌足の袖に落つ多武峰を龍岳と云ふは是

▽怎麼八大龍王幼帝の御幸なるごと千本の典侍局危く水底に沈まんとす

▽素袍を龍神卷にする重なる役は盛衰記の源太と菅原にて輝

國と女番也

▽龍の腮の玉は取る共と久吉を罵る嘉平次の氣焔は三日太平記に顯著也

▽鬼を欺く國姓爺龍虎と勇む伍將軍とは和藤内甘輝を並べた名代の形容

▽三代記の高綱は井戸から出て龍は時を得て天地に蟠ると大軍師の見識

▽龍の雲に沖るが如く一陽の春を待つとは近江源氏實檢場の時政の出也

▽龍頭に手を掛け飛ぶこと見えしがとは道成寺の文句也雖然是は蛇身也

▽布引の實盛は權を小萬に投付け龍神感應祈れや女と云ふ此

處物語の山

▽是も龍神の怒に觸ふて雷電の大荒となるは歌舞伎十八番鳴神の墮落也

▽女龍丸と男龍丸とで大時代の詰合となる狭間合戦の御殿は近頃廢れぬ

▽雌龍の鍬形と云へば玉三の道春館でお馴染也今年は金藤次も流行せん

▽齋藤龍興の稻田山を攻むる間道は瑞龍山の峯傳ひと日吉三段目の文句

▽日蓮記本文の御難は龍の口也悪い噂も龍の口と辨天小僧も啖呵を切る

▽左馬之助湖水乗切に着る陣羽織は狩野永徳墨繪の雲龍今博物館に藏す

▽御所五郎藏が仲之町出會の着附は富士越の龍にて菊五郎以下皆襲用す

▽樓門に脂下る五右衛門の寛博は蝦蟇錦なるが多し龍の縫模様は其定例

▽毛刺が元船幕切大見得の着附は海草藏好み五爪龍の唐服と極り居れり

▽九郎助内に来る瀬尾の紋は龍の爪に玉を以て普通とす敵役此例夥多也

▽生粹の江戸世話にめ組の喧嘩あり辰五郎は五代目より寺島

畑に傳はる

▽矢張め組の喧嘩に出る力士水引清五郎は改めて九龍山浪右衛門と稱す

▽小金井小次郎と合せた新門辰五郎は先代芝翫の當りにて火事掛り無類

▽夏祭のお辰は鐵きうで顔を焼き改作の一才編お辰は徳兵衛の穴にて妙也

▽龍宮の乙姫は所作に用ひらる新浦島は鷗外逍遙兩博士に於て異彩あり

▽鍋島猫に重藏寺と逃けたは龍治寺又七郎の事も助高屋の藝人口に残る

▽阪本龍馬雲井龍雄は劍劇界に流行せり龍虎隊の事も故菊五郎演す

▽舊派に辰巳園あり新派に辰巳巷談あり龍虎の舊所作大物となり居れり

▽水滸傳瓦罐寺の暗挑に堂より出づる九紋龍は流星の如く棍棒を揮舞す

△龍頭の兎と笹龍膝の紋は數え切れず龍紋の袷は徳川期時代物に多し

▽鱷龍軒の名や龍門の常盤など謔案際限無し茲に擲筆するも龍頭蛇尾也

讀者文藝欄

情 歌

南北選

初芝居

三太郎

春の櫓にしころのひびく音もうれしい初芝居

逸 吉

曾我の舞臺の舞鶴よりぬしと晴れての御對

面

種 八

春の名題の傾城ぶりにふむもゆかしい八文字

音 吉

色もいろく道頓堀に小旗うつくし初日かげ

人 腕 蝶

幕もめでたくまづあけましてとろ／＼たらり

の三番聖

地 重 藏

梅の紋さへ櫓にたかし色も香もある初芝居

天 双 二

初の芝居の松竹うれし梅はかほりの浪花ぶり

盃 逸 吉

ぬしの盃けふとりあげたみきにうつりし初日  
影 權 八

としもめでたし氣も辰どしに一座をろふたお  
さかつき 腕 蝶

親子をろふたこの三つ組にむつみあふたるお  
正月 人 三太郎

初の盃居あて、そつとのぞいたぬしの顔  
件 一

思ひ思ふたこの盃をうける島臺尉と姥  
天 泰 吉

明けて若水居蘇さへうれしけふは恩賜のお盃  
幕。 次 の 題 見合。

川 柳 蹄二選

番 附 ・ 振 袖

賞 牧 平

番附をふりのせる置炬燵

佳

番附を見てゐるうちの木なし幕

番附を下女心得て奥へ持ち

番附の中に小さいうちの人

番附を土産の上のせて寝る

江戸風に書いた番附判りかね

一昨年の番附がある女中部屋

番附は無理な處へ屋根を書き

大切りは番附なしで見てしまひ

番附が緞になるほどいゝ芝居

一心に見て番附を膝に敷き

番附へやるはいつもの心付

役もめの事番附に書いてなし

頭から番附賣の錢が鳴り

番附に浮氣た顔がならんで居

番附へ嫁と姑の首が寄り

番附の大ならず亦小ならず

番附のことで喜多村おさまらず

番附の匂ひといふを嗅いでみる

番附を拜借といふ大向ふ

番附を素氣なう除けて藝者去に

番附に鹽原多助泣いてゐる

番附はもう出来て居る役不足  
番附で欠伸を隠すのを見られ

龍 人

雷 公

くらげ

共 笛

三 吉

同

十一

喜久造

權 八

紺 屋

産 助

一 塊

勤 通

勤 通

くらげ

寸 駄

同

同

同

五毛久

同

浮 月  
夢 人

番附の見馴れぬ紋は新幹部  
番附で役まめのする初芝居  
振袖へ振袖そつと用があり  
繪番附母も眼鏡をとりて立ち  
振袖が邪魔をしに来る臺所  
振袖を膝に疊んで女の子  
振袖がよつほど長い文樂座  
振袖に空を打たせたい、男  
は、かりへ立つた番附借て見る  
番附に老女は腰を伸ばすなり

眼三  
三六  
嘉七  
伴太郎  
同  
同  
同  
同  
同  
豚二郎  
同  
四光

### 俳句 煤蓑選

時雨ゝに石切る音や宮書語  
物質を圍みて辻のしぐれ哉  
心中といふこと思ふ小夜時雨  
土手急ぐ歸り車や夕時雨  
風の出で藪さわがしや夕時雨  
旅に出て時雨をきくや足袋の穴  
酔ざめの水にうつゝや夕時雨  
渡船場の小屋もる聲や山夜時雨  
沼めぐる機林のしぐれけり  
隣から子を連れもどる時雨かな

精一郎  
汀水  
ふみ  
白鷺  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同

くるま井の音に時雨の暮き添ふ  
東山くらく浮き出し夕時雨  
時雨ゝや急ぐ家鴨と村はづれ  
菊殘る軒の暗さや初時雨  
立枯の唐蜀黍に時雨けり  
牡蠣船の灯あかき時雨かな  
山宿の炬燵つめたき小夜時雨  
時雨ゝや芝居ばねなる人通り  
湯の宿の板屋根をうつ時雨かな

同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同

暮年の暮  
思出を書く手も氷る年の暮  
軒に来る雀さわがし年の暮  
巡禮に物いふ門や年の暮  
芝居町の片側さむき年の暮  
年暮れて足らぬがまゝの醉心地  
なによりも今年はぬき年の暮  
格子戸を洗ふ一日や年の暮  
逢ふ人と互ひに寒き年の暮  
年の暮れ油障子はかはきけり

千歳  
四郎  
汀水  
松里  
伴女  
初汐  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同

選者吟  
風に散る店の飾りや年の暮  
町中の川に波立つ年の暮

煤蓑  
溪午  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同

### 次の題 『初芝居。手巻』

#### 芝居短歌 山上貞一選

引窓の窓より渡る、月影も落人にしていと青  
きかな

顔見世 彦 治  
花 恵

かげらふはいつたちにはけり保名はも戀に狂ひ  
つ笑みてありけり

浅 丸  
延壽はもうたひそめにき戀よ戀われなから  
にと聲のかなしさ

浅 丸  
うちかけは若紫ににほひけり保名の戀もつみ  
にみだるゝ

つ ぼみ  
ひともとの櫻はいまぞさかりなり戀に狂へる  
保名の夢か

春 雨  
金扇をひらきて顔をひけり夢にも人を戀  
ひて狂へり

小 三



胡蝶はもいづかたに飛ぶかはたとうつ扇のひまゆ春めきて見ゆ

小 三

亂れしは髪か人にか委かや昔戀しきおもかけの見ゆ

吾 朗

するすると勸進帳の暮あきぬ六左衛門の口の開きやう

賢 治 郎

面白しあら面白の山水と踊ればうれしき高麗屋かな

賢 治 郎

關守はいときびしげに問ひつめぬ鷹治郎にしてこわきおもかな

あ さ ひ

玉蟲は浮きつ沈みつのろはしの海に入りゆくおどろしきかな

あ さ ひ

呪はしの願ひをこめて物語る那須の興市のにくいさおし

實

音羽家の官玉玉蟲はろうたけつ呪ひゆえかややつれの見ゆる

玉 枝

龍卷の渦にまかれて長崎のはてに散りゆくあはれ貞歌よ

玉 枝

逢ふも憂し別るも悲し龍卷の渦のまゝなるこの人の世

清 一

袴の裏の桃色あさくして散ればかなしき光義のきみ

京 太

おもおもしろかぶともちたる初菊の振りのたもとに涙ぐみけり

京 太

高麗屋と呼び聲高し竹やぶをぬけて出でしは錦繪の人

告 天 子

光秀のみけんのきづをいぶかりて聞きし人あり春知らぬ君よ

春 の 家

惜しきかないとおしきかな重次郎の緋おどしにして死する姿よ

春 の 家

茨木のおうなの面のうるはしき大音羽家と呼びてうれしき

二 郎

まことかやはたいつはり人妻のたもとひきつる冷き人よ

月 郊

行燈の灯をふき消しぬぬばたまの闇に燃えたつ戀のほむらよ

賞 輝 子

しぐれつゝのぼりの濡れしわびしさも顔見世なれば嬉しきものを

選 者 詠

ゆくりなく逢ひて別れも君ゆるゑに顔見世の夜の忘れがたなき

### 次號課題『一月の道頓堀』

(狂言にても俳優にてもよろし、又新派、新劇、歌舞伎劇の別なく隨意隨感のもの)

選者の私は短歌を捨て、八年になります。

此度本誌編輯者の嚴命にて本欄の選者を仰せつかりました。普通なれば辭退すべき處

芝居に關する短歌といふので膝を乗り出した譯にて、今月は最初ながら非常な盛況で

押すなぐの大入滿員、どうかこの調子で毎日殺倒してほしいと思ひます。いづれは

編輯者と談合致し、天地人の三氏には觀覽券でも贈呈して貰ふつもりにて取敢ず今日

は輝子氏一人に粗賃を呈上しました。御投稿を願ひます。(山上貞一)

# 讀者俱樂部

## 南座顔見世狂言短評

本陣良平

私の見たのは五日目と八日目である。

先づ第一が尾形光琳である。第一幕など恰も東西合同の顔見世興行をあてこんだ様な幕である。私が脚本を讀んだ時には第一幕より第二幕の方がよい様に思つた。所が舞臺上で見ると却つて第一幕の方が成功して第二幕の方が失敗してゐた。勿論この罪は脚本にもあるのだが第一幕の成功は市藏、福助、我童の技倆であり、第二幕の失敗は福助の光琳と扇雀の乾山との意氣が全く合はなかつたが爲である。市藏の内藏之助は少し氣取氣味はあつたがうまく出来た。渡月橋上の場の初めに於て左と右から二人宛人物を出すのは餘りに相對的で變だ。中幕の引窓はよい芝居である。鷹治郎の興兵衛と梅

幸のお早との意氣が全く合して、實に少しの隙もない。それに蓮女のお幸に至つては多年の修練の結果、唯々感心させられるばかりである。殊にこの時の床がたよいのである。芝居が一段とよくなつた。長三郎の保名もよい。先月中座でも見たがあの時より榮壽太夫が餘程さえてゐる様に感ぜられた。今度のこの保名は實に圓熟の至りである。幸四郎の出し物として勸進帳が出た丁度私の高等學校時代に幸、福の今度と同じ役割の勸進帳を見たのが私の勸進帳といふ芝居を見たのが始めであるがその時の印象が深く、其の後この同じ顔觸れの勸進帳をもう一度見たいと渴望してゐた。所が愈々今度その望が達せられた。實におとなしいよい芝居だ。歌舞伎もこんなよいものを持つてゐる間は永久に滅びることはない。幸四郎の辨慶に至つては天下第一品だ、立派なものだ。流石の鷹治郎もおされ氣味である。福助の義經は先年見た時よりも餘程立派だ。切の平家蟹は梅幸の出し

物なのだらうがつまらぬものだ。唯、幸四郎が旅僧雨月につき合つてゐるのが氣の毒でたまらぬ。夜の部に於て最も私を深く動かしたものは茨木である。梅幸の神技——特に神技と云ひ度い——には唯々感嘆するのみである。然しこの茨木に於ては梅幸の茨木童子と共に幸四郎の綱を見逃さない。特に二度目の出に於ての幸四郎の蘆は言葉につくせぬ位立派なものである。勸進帳といひ、茨木といひ吾々にとつては大したお土産である。中幕『太功記十段目』は面白ものである。先月中座で中車の光秀を見たがあれに比べると見劣りがする。全體に於て劣つてゐる蓮女の早月もどうしたとか先月ののがよかつた。初菊は福助より先月の魁車の方がよく、操も梅幸より先月の福助の方がよかつた。光秀に至つては幸四郎は中車に比べて深刻味がない。唯その柄と押出しに於ては天下無双と云つてよいかも知れない。こう見ると先月中座所演の方がはるかによい。唯我童の久吉が先月より趣味も少く、

よく演ぜられ、鷹治郎の重次郎が先月よりずつとよかつた。この二つが先月に比べて優つてゐる所である。二番目『藤十郎の戀』は流石初演の時五十數日も打ちつづけたといふもの名作丈けあつて鷹治郎の藤十郎もよいが福助のお梶は言語に絶した出来榮えである。先月中座所演の『梅屋おせん』のおせんといひ、このお梶といひ、福助はやはり名優である。梅幸の若太夫は美しい、而かも上品である。扇雀のお玉に扮する俳優は端役ながら傑作で、扇雀の今度の顔見世所演中最上の出来であらう。我童の千壽は平凡。大切は幸四郎、長三郎の所作だが『小鍛冶』は私にはわからぬ。『三社祭』は仲々よい。今年の五月、三津五郎と時藏との所演を見たが今度の方がはるかによい様な氣がする。扱て一番目狂言として『龍巻』といふ新作が出た。而かも關西若手俳優によつて演ぜられたが私にはさつぱり判らぬ。筋を讀んでも判らぬ。此芝居餘程つまらぬ物なのだ。もしさうでなければ餘程大した傑作に違ひない

人物

村上華子  
 馬越淳三  
 濱田老人  
 松尾子爵  
 郷田の次男  
 泉の若旦那  
 寶石商の手代  
 第一の女中(民子)  
 第二の女中(トコちゃん)

第三の女中  
 第四の女中  
 第五の女中  
 第六の女中  
 赤い灯青い灯  
 どうとんぼりの  
 川もにあつまる  
 戀の灯に  
 なんてカフエが  
 忘らりよか

酔うてくだまきや  
 あぼずれ女  
 すまし顔すりや  
 カフエの女王  
 道頓堀が  
 忘らりよか  
 好きなあのひと  
 もうくる時分  
 ナフキンたゝもよ



中井泰孝作  
 日比繁次郎作歌

唄ひまじやうよ  
お、懐しの  
どうとんぼりよ

## 第一景

シロホンの行進曲開ゆ。  
幕上る、

黒バツク、最初ベピースポットの極く細い光線が亂雑に動く、最後に正面に落着いて靜かに廣がると、其處に村上華子がウエターの服装で椅子に倚つて眠つて居る。

ベピースポットを絞る。  
再び元の暗黒となる、その間シロホンが續いて居る。

## 第二景

極めて華美な洋室、正面に窓、下手奥に廊下の一部と扉、下手側面にナトリア、そのそばにピアノを置いてある、正面上手一段高くバルコニーの一部、上手側面には更に一段高く出入の扉、上手に絢爛濃厚な、そして尤も現代的な裝飾中央に椅子テーブル上手當りにベット、以上舞臺裝置は構成派に依る。  
幕上る。

まだ第一景の暗さが續いて居る、シロホンが次第に止む、鶯の聲、正面の窓とバルコニー（同じく硝子扉）、下手の廊下（同じく硝子扉）に、黎明の光線が廣がり初める、室内次第に明るなる、オルゴールの目醒時計が鳴り初める、纏て夜は全く明けられる。ベットの上に華子が金爛の布団の中に眠つて居る。

綺麗な洋装の第一の女中新聞を持って下手から入つて来る、枕元へ置いて下手の椅子に腰を下す。

タバコセットを捧げた第二の女中（同じく洋装）出て来る、同じく枕邊に置いて下手の椅子に倚る。

第三の女中（同じく洋装）華子の衣類を持って来て置く、同じく下手椅子に控える。華子寢返りを打つて、

華子 ちや、もふ明けたのね。

三人の女中一齊に立ち上る。

華子 お天気はどう？

第一の女中 大それよう御座います。

華子 そう、此の頃の様に雨ばかり降つて居ると、ぢめ／＼して、本當に思ひなつちま

う、トコちゃん、煙草を一本頂戴。  
第二の女中 はい。

走つて行つて煙草を點けて渡す。

華子 あらッ、私此んな所に寢て居たの？

第一の女中 はい。

華子 什麼して此んな所に寢たんだらう。

第二の女中 昨晚お歸りになつて此處へ寢るからベットを此處へ運んで来いと仰いました。

華子 そう、ホ、随分厄介かけたわね、そう、私ちつとも覚えがないわ。

第三女中 昨晩はひどくお酒に酔つてお出になりしました。

華子 そう、郷田さんの玄關を出るまではうつすらと覚えはあるけれど、それからはどうして歸つたのかも知らないわ。

第三の女中 いつもの様に東京から入らしてゐる、松尾子爵様の若様と、郷田様の御次男様と、それから泉様の若旦那様が此のお部屋まで送つて来て下さいました。

第一の女中 松尾子爵の若様が、私が此處までお送りして来た事を、奥様がお目醒になつたら忘れずに申上げてくれと、仰つてお歸へりになりました。

第二の女中 郷田様の御次男様もそう仰つてで御座いました。

第三の女中 泉様の若旦那様もそう 仰つて

お歸りになりました。

華子 (コケツトな高笑をして) 随分親切な

方達だわね、でも私が一度笑面を見せて上

げれば、それでその親切も綺麗に帳消しに

なるんだわ、男なんて随分簡単なものよ、

あ、一寸民ちゃん新聞を見せて頂戴。

第一の女中 はい。

走り寄つて新聞の一面を廣げて持つて

居る、華子は仰向に寝て煙草をくゆら

しながら讀む。

華子 三面を廣げて

第一の女中 三面を廣げる、暫く眺めて

華子 あらッ、また私の事を書いてるわ、ど

うして恧ふ世間では私の事と云ふと問題に

するんだらう、關西に於ける代表的社交婦

人櫻小路公爵華子夫人だつてさ、華子夫人

は一寸痛いわね、でもそれで好いんだわ、

夫人だわえ、夫人だとも、私は御前様から

おつびらに公爵夫人の呼名を許されて居る

んだもの公爵夫人の呼名を許して貰ふ爲め

にはそれ相當のものを私は拂つて居るんだ

もの、夫人と云はれたつてちつともくすぐ

ぐ

つたくも何ともないわえ公爵夫人……(腹

道になつて讀む)夫人の關西に於ける人氣

はあらゆるものを通じてその一頭地を占め

てゐる——當然——夫人が一度自働車を

駆つて市上にその姿を現すと、いつの時も

街上はまるで名代俳優の乗込みでも見る様

に人だかりがする、恐らく菊五郎や吉右衛

門の乗り込みも此れ以上には出ないだらう

人馬鹿にしてるわね、役者の人氣と見

比べられて堪るもんか、今度あの新聞記者

が小使を取りに来たら、叱り附けて置かな

きやならない、でも世間では云ふ程私の事

を大騒ぎして居るのかしら。

第一の女中 華子白粉と云ふのが出来て居る

そうで御座います。

華子 (むつくりベットのの上に起き上つて、

ヒステリカルな笑をする) 華子白粉ハッハ

ッ……そオホ、い。

家伶濱田老人静かに入つて来る、

濱田 お目醒で入らつしやいますか、お早う

御座います。

華子 お早う。

濱田 天賞堂の手代が参りました。

華子 天賞堂……何も注文してはないつもの

だけだ……

濱田 はい、別に御注文は頂いて居りません

が珍らしい寶石が手に入りしましたから一度

奥様の御目にかけて置きたい、と左様に申

して居ります。

華子 そう、では見ませう、暫く待たして置

いて下さい。

濱田 はい、では暫くあちらへ控えさせて置

きます。

濱田 老去る。

華子 顔を洗ふ用意は出来て居るね。

第三の女中 はい、出来て居ります。

華子 ベットから降りる、第一の女中ス

リッパを揃へる、第三の女中上手のド

アを掛けて立つ、華子そこへ入る、(此

の洗面の動作は、足の方だが見えて

居る)、側に第三の女中が附添つて居

る。

第一の女中と第二の女中は更に第四、

第五の同じ服装をした女中を呼んで、

ベットを上手側の扉口へ入れてしまふ

そして中央のテーブルを整頓しながら

道頓堀マーチを唱ふ。

華子 (姿を見せずに) これッ、誰だい、そ

んな唄を唄ふのは、此處はカフェーぢやないよ一變にウエーターつて事が判るぢやないか、お價みよ……

女中共は恐れをなして黙る、聽て華子扉の外へ出る。

華子 誰か、寶石屋をそこへ通しておくれ、第四の女中はい (去る)

華子上手に入る、第三の女中先きの着物を持つて續いて入る。  
残つた女中は先きの様に下手に並んで立つ。

第四の女中濱田老と寶石屋を導いて入つて来る、寶石屋は恐るゝテールによる、濱田は奥の椅子に控える、洋服を着た華子第三の女中と共に出来る、女中や濱田肅に黙禮する、寶石屋は一足退つて頭を地につける様に禮をする。

華子 入らつしやい(云いながら腰を下す)  
手代 毎度お引立に預りまして有り難ふ存じます。

華子 さ、お掛けなさい。  
手代 頂戴いたします(腰を下す)  
華子 何か珍らしい寶石が手に入つたんですつて？

手代 はい、どうぞ御寶を願います(ひどく丁寧に包んだ寶石を出す)

華子 (受取つて見て) 此れが珍らしい寶石なの？

手代 左様で御座います、華子 一寸見ると、まるで壁土の塊りかなかの様なわね。

手代 はい、所が此れは手前共の主人が歐羅巴から歸朝土産として持つて参つた品で御座いまして、御承知でも御座いませうが、畏くも英國帝室博物館に世界的の珍石として所藏になつて居る、つまり原始時代の遺物として、その後何萬年此の方類似のものさへも出た例が無いと云ふ無名の寶玉と、或は同種のものではないかと云はれてゐる品だそうで御座います。

華子 まあ此れがそんなに珍らしい石なんですか。

手代 左様で御座います、で慥ふ云ふ貴い石はどちら様へも向くと云ふ品物では勿論御座いませんし、またんでお目にも止まる筈も御座いません、で此の大阪では先づ住吉男爵様、鈴原様と御邸と此の御三家へだ

け御覽に入れやらと云ふ事になつて居りましたが鈴原様の方はお電話で以て、御覽にならずに、一寸お値段の點で……はい……

華子 すると價は？  
手代 十二萬五千圓で御座います。

華子 鈴原さんは何故お求めにならなかつたんだらう、私買つて置きますわ。  
女中、濱田老共に驚いて立ち上がる。

手代 (三拜九拜) 有り難ふ存じます。  
華子 (それを首にかけて上手鏡の方へ歩みながら) 濱田、小切手を書いて頂戴、十二萬五千圓。

濱田 はい(金庫の前の小さなテールに向つて認める)  
華子 鏡の前に立つて凝と見て、

華子 ね。  
濱田も女中も手代も一齊に、「はい」と返事をして華子を見る。

華子 つまり此の寶石は、少なくとも日本中にはまたと二つない譯だわね。

手代 (茲ぞと云ふ表情で、日本中は愚かだ御座います、全世界に有りとしれば、只今申し上げました通り長くも英國帝室博物館に

只一つあるばかりで御座います。

濱田 老小切手を華子に示す。

華子 渡して上げて下さい。

濱田 畏つて手代に渡す。

手代 (大いに嬉んで) 奥様 確に頂戴いたしました。

華子 御苦勞様。

手代 では此れで御免を蒙ります。

華子 (つくく) と鏡を眺めたまゝで) 左様な。

手代は濱田や女中に叮嚀に禮をして五の女中に送られて去る。

濱田 そのお寶石が十二萬五千圓は、あまり

値がよすぎる様で御座いますな。

華子 寶石なんてものは寶石そのものに値打

があるんぢやないよ、ダイヤモンドの光が

貴いのぢやなくつて、つまり世間の誰もが

持つ事の出来ないものだから高いのよ、此

の石だつて名前もなく、何の石だかも判ら

ないのに値打があつて堪るものかね、だか

ら私は寶石は買やアしないよ、世間に二つ

しか無いものを買つたんだよ、恰度人間の

値打と同じやうなものね。

濱田 はい、で奥様。

華子 何です?

濱田 過日中から申上げやうと思つて居りま

した事で御座います。

華子 も少し話をテキパキと簡単に片づけ

る事は出来ないかね。

濱田 はい、出来ませう。(少し口早に) つまり

奥様の毎日の御入費の件で御座いますが、

本年度の御費用が(帳簿を見て) 二十七萬

八千八百圓となつて居ります。

華子 それがどうしたと云ふの?

濱田 昨年の御費用に比べて四萬二千六百五

十圓の超過で御座います。

華子 だから超過したらどうすると云ふの?

濱田 で一昨年の御費用に比較致しますと、

更に五萬三千。

華子 もふ宜しい、年々私の費用が超過する

から少し控目にすると云ふのだから。

濱田 御賢察の程恐れ入ります。

華子 濱田、私は金があるから使ふのだよ、

世間の人達は金が無いから使はないのよ、

私はね、何千萬圓のお金を使ふが、ちやんと

るのよ此れから先きそんな小言は云はない

で下さい、お前も年のせいかめつきり愚痴

つぼくなつたね、それよりも此の半期の邸

の収入を一度計算して来て御覽。

濱田 はい、ではそう致しますせう。

濱田 去る。

華子 ハツくく貧乏者の成り上りはあれ

だから忌になつちまう、時計を見上げて)

今日のはあの人達の來るのが遅いわね。

第一の女中 先ほど松尾子爵様の若様からお

電話がありまして、奥様が御目ざめになつ

たらお伺ひするからと仰つて入らつしや

いましたから程なく御見えになりました。

華子 そら、さて今日は何をして遊ばう、ツ

ーテンヂヤックも平凡だし、麻雀も飽きて

しまつたし、一つそ跡を跡つて遊ばうかし

ら……

煙突の中でゴトくと音がする。

華子 (驚いてストロブの上の方を見て) あ

ら今日もあの煙突掃除が來て居るの。

第二の女中 來て居ります。

華子 何故追ひ返してやらないのさ。

第二の女中 追ひ返へそうと思つて随分云つ

「たんですけど、僕は此處の家に雇はれて煙を掃除に來てるんぢやない、僕は此家の煙を突掃除する権利があるから來てるんだつて云ふんです。」

第三の女中 そんな権利は何處の國にも有りつこはないつて云つてやりましたら、お前達だつて元は、今こそ此の家で女王の様な振舞をして居るが、あのお華と——御免遊ばせ——と一緒に道頓堀のカフェーでウエターをして居たんぢやないか、そしたら僕とお華の——御免遊ばせ——の仲がどんなもんだつたかと云ふ事は知つて居るだらう、知つて居れば僕に此の家の煙突を掃除する権利のある事は、云はなくとも判る筈だ、そう云つてづん／＼屋根の上へ昇つて行つてしまらんで御座います。

華子 まあ何て執拗い男なんだらう、そうだまた仕事が済むと屹度此處へこの／＼上つて來るに違ひない、お前達皆なで行つて階段の下で張番をして居て頂戴。

第一より第五までの女中 畏りました。  
ぞろ／＼と去る。

く手を仰して、ふと鏡を見ると自分の姿が寫つて居るので、彼女は更に立つて鏡の側へ寄つて自分の姿に見惚れる、側に置いてある幾つもの首飾を取り出してかける。  
此の時ストープの中から、ヌツと音楽家（煙突掃除夫）馬越淳三が出で立つ華子鏡の中にそれを見つけて、驚いてふり返へる。  
華子 貴郎は誰から許されて此の部屋へ入つて來たんです。  
馬越 誰からも許されない、俺は勝手に入つて來たんだ、俺は煙突とストープの掃除に來たんだ。  
華子 そんならその用事が済んだらさつさと歸つて行つて下さい。  
馬越 歸へらない。  
華子 此處は貴郎の家ぢやありません。  
馬越 俺と夫婦約束をした女の家だ。  
華子 失禮な事を、もふ一篇云つて御覽なさい許しませんよ。  
馬越 でもそれに違ひないぢやないか、（寄るうちとする）  
華子 寄つちや不可ません。  
馬越 華ちゃん、毎度の事だが矢張りまだ昔

の事を思ひ出せないかい。  
華子 昔の事なんか一切夢です、思つただけでもぞつとする。あんな事は神様の悪い悪戯だつたんです、今私は櫻小路の妻です、公爵夫人です。

馬越 ね、華ちゃん、  
華子 そんな呼び方は止して下さい。  
馬越 そんなら公爵夫人と呼べと云ふのか。  
華子 そうです。  
馬越 そんな借物の名前は何べないよ。  
華子 何ですつて。  
馬越 お前はそ若い美しい豊満な肉を抵當にまばゆい寶玉と敵めしい公爵夫人と云ふ名前を借りて居るんぢやないか、その二つの借物で素晴らしい世間の人氣を呼んで居ると思つてゐるのは大間違ひだよ、世間の人がお前の事を大騒ぎして居るのは借り物で飾つたお前の姿と借り物で成り上つた公爵夫人を罵つて嘲けて、笑ひこけて居るつて事にもまだ氣がつかないかい。

華子 ふむ、それが女に捨てられた意久地なしの復讐なんだねハッ／＼／＼。  
馬越 おい、お前の胸にかゝつて居るその寶



石が一晩の中に砕けてしまつたらどうする  
あの金庫の中にあるお金に火が附いて一時  
のうちに燃えてしまつたらどんなもんだ、  
お前の額に皺が一本殖えたが最後、公府夫  
人と云ふ借物の年期もそれでお終ひさ、華  
ちゃん、それから後のお前自身をちつとは  
考へて見たらどうだ。

華子 貴郎は心の狭つた女にいつまでも男ら  
しくもない未練を持つて居ないで、そのひ  
まにうんと勉強して早く立派な音楽家にな  
る分別したらどうなんです。

馬越 お前の心は變つても俺の心はちつとも  
變つては居ないよ、お前はお前の身のまわ  
りにある借物をすつかりとり上げられてし  
まつて血の氣のなくなつた體と削ついた心  
とだけが取り残されるのを待つて居るんだ  
よ、一人淋しくなつて當然求めなければな  
らないものを求め初めるのを俺はいつまで  
も待つて居るんだよ、だがなろう事ならそ  
の存目を見せないうちに俺の手にお前の體  
と心が戻つて來れば好いとも願つて居るよ  
華ちゃん、一緒に道頓堀へ歸へろうよ、道  
頓堀のあのカフェーでお前の口から唱ふ道

頓堀マーチはどんなにあの町を華やかに飾  
つた事だろ、ね、華ちゃん、歸へろうよ  
皆んなはお前の歸へりをどんなに待ち焦れ  
て居るか判らないんだ。

華子 貴郎の云ふ事は、いつでも同じ事ね、  
もふ聞き飽きたわ、だつていくら貴郎が口  
を辭ばくして勸めてくれたつて、私には今  
の境遇ほど嬉しい満足はないんですよ、だ  
から貴郎も昔の夢などはすつかり忘れてし  
まつて、今日限り此の家へは來ないで下さ  
い、その代りそれを承諾してくれたら、い  
くらでもお望みだけのお金を上げやうぢや  
ありませんか。

馬越 金をやるから思ひ切れと云ふんだね。  
華子 そうよ。  
馬越 金なんか俺にはちつともいらないよ。  
俺は一生お前を思ひ切る事は出来ないよ、  
おれに思ひ切られたら聽てお前の方に困る  
時が來るんだよ、お前は終ひには俺の手に  
戻つて來る運命を持つて居るんだよ。

華子 何て思な事を云ふんだらう、誰が捨て  
た男の所へなんか戻つて行くもんか。  
馬越 戻つて來るよ。

華子 戻らないと云つたら、もふ明日からは  
此の邸へ出入するのを斷然お斷りです。  
馬越 いや俺はお前が凡ての借りものを返へ  
してしまふまでは矢張り今まで通り毎日煙  
突掃除にやつて來るんだ。

華子 勝手になきい。  
彈着して華子上手に入る。  
聽て馬越は靜かにピアノに向つて道頓  
堀マーチを弾き出す、正面廊下の扉開  
く、第一より第五の女顔を出す。

第一の女中 あら、道頓堀マーチ。  
第二の女中 お、懐しい。  
五人の女中はピアノに引込まれて我を  
忘れて唄ひながら入つて來る、馬越も  
無中になつて彈き狂ふ、女中も無中にな  
つて唄ふ、此の時上手から華子耳を  
押えて飛び出す。

華子 お止しつたら、およしつたらッ。  
女中達は恐れをなして止める、馬越も  
彈く手を止めてふり返へる。

華子 その唄が私に一番忌やなものだつて事  
を知らないのか。  
馬越 まだ、お前の心は過渡期だな。  
華子 あゝ、忌だ、何故貴郎は早く歸つて

行かないんです、あゝ不愉快だ、何故あの人はこんな時に早く来ないのだろう(疝癢を起して足を踏み鳴らす)

華子 (急に嬉しそうな表情) あ、入らしたわ。

彼女が千兒の様に嬉んで廊下の方へ去る、續いて女中達もぞろぞろ去る。馬越見送つて、

馬越 あの女の心は過渡期だ。

そのまゝストロブの中へ入つて煙突へ昇つて行く  
華子を中心に松尾子爵、郷田の次男、泉の若旦那、續いて五人の女中ぞろぞろと話しながら入つて来る。

華子 随分待ち兼ねてしまいましたわ。

郷田 またお目醒めの時間にしては少し早や過ぎると思つて、わくわくする胸を押えて今まで控えてゐましたよ。

華子 そうオ、お氣の毒様でしたわね。

三人は互に華子の甘心を買ふ事に努め、四人は華子を中心に腰を下す。

華子 昨晩は随分御厄介をかけたんですつてね。

松尾 随分お酔ひになつた様でしたわね、あな

たのあんなにお酔ひになつた姿を見て頂くのは恐らく空前にして絶好かも知れませんが、私はひどく幸福を感じて居りますよ。

華子 まあ、お恥しう御座いますわ、どんなに見苦しかつた事でせう。

泉 御婦人が前後不覺と云ふ程度にお酔ひになつた姿に儘かに一種の魅惑を持つて居ますわ。

華子 まあお口のうまい事。

郷田 ストリンドベルグの小説にこんな事が書いてありますね、氣を失つてゐる女ほど見苦しいものはない、氣を失つてゐる女ほどまた美しいものはないつて。

華子 郷田さん賞めて下さるんですか、それとも皮肉つて入らつしやるんですか。

郷田 皮肉くるなんて、そんな事はありませぬよ。

松尾 今朝の貴女は此れまでに拜見した事のないほど美しくつて入らつしやいますね。

華子 (得意そうに) 御前、私は本氣に致しますよ。

松尾 いゝえお世辭ではありませんよ。

郷田 私は一度、我を忘れて 貴女から、お

嬉しうと仰られて見たいと思ひますが、果してどんな事をしたら、そう仰つて頂けるでせう。

華子 まあアホ……あんな眞面目なお顔で。郷田 勿論大眞面目です。

華子 さ、どんな事でせう、當て御覽遊ばせ以上對話の間に五人の女中は、それぞれ二三種の洋酒をテーブルの上に運ぶ

泉 (華子の首飾を見て) おヤツ、素晴らしい玉をお求めになりましたね。

華子 流石は若さんで入らつしやいますね、此の玉がお三人のうちで、どなたが一番先きにお氣がついて下さるだろうと思つて待つてゐましたわ。

郷田 成るほど、素晴らしいものですねえ……

松尾 且つて私は見た事がありませんね、勿論貴女に依つて初めてお持ちになれる品ちやありませんか。

華子 さ、どうでせうかしら、でもそんなに高いいでも御座いませんわ。

泉 さ、今日は何をして遊びませうね。

松尾 今日は何もなし、天氣も好いから、一つ奈良方面へでも飛ばしませうかね、

華子 遠米りも餘りパツとしませんわね。

郷田 松竹座へでも出かけませうか。

泉 今日あたりは込み合つて不可ないでせう

一層此處でツーンテンチャックは如何です。

華子 も、餘り感心しませんわね。

松尾 今日日は昔の演藝放送がありましたね。

華子 (時計を見て) ちや、もふ遠に來てゐ

るわ、トコちゃんスイツチを開けて御覽。

第二の女中ラデオのスイツチを開ける

チャズが頻りに聞えて來る。

泉 お、チャズだ。

郷田 こいつは好い。

聞きとれて居た郷田、泉、松尾は次第

／＼につり込まれてチャアレストンを

踊り出す、暫くすると華子はそつと第

三の女中を手招きして共に上手に入る

三人は無中になつて踊り狂ふ、一曲終

つて三人は華子の居ないのに氣が附く

松尾はラデオを止めて。

松尾 おい、私達のクインは何處へ行かれた

んだ。

郷田 何處へ行かれたかね？

第一の女中 存じません。

泉 そこに立つて居て知らない法はあるまい

何處へ行かれたんだね？

第二の女中 存じません。

松尾 困るね、本當の事を云つてくれ。

第四の女中 存じません。

郷田 では私達の跡を見ては下さらなかつた

のだね。

泉 (ラデオを開けて見て) あ、もふチャズ

は終つたらしい、惜しい事をしたな。

第三の女中 上手から駆け出して來てラ

デオのスイツチを開ける。

ラデオ JOBK、只今より長唄でありまし

て××××を放送致します、出演團體は東

京の方々であります、

唄 が 杵屋 六右衛門

同 が 杵屋 六太郎

三味線が × × × × × × × ×

同 × × × × × × × ×

大鼓が × × × × × × × ×

鼓が × × × × × × × ×

笛が × × × × × × × ×

の諸氏であります、では初めです。

唄初まる、と踊の紛裝した華子が正面

バルコニーの入口に現れる、人々思は

ず手を叩く、女中達は急いでテーブル

や椅子を片寄せる、華子降りて來て踊

る、馳て或る程度まで踊つた時。

華子 (蓮葉に) もふ此れでおしまひ。

松尾 お願です、もふ少し。

泉 お願です。

郷田 お願です。

華子 上手に入る。

三人頻りにアンコールを送る、華子再

び姿を現して三人に禮をして再び入る

三人は如何にもお世辭らしく、聲高に

松尾 實に驚いた。

泉 我々のクインに、あんな立派な藝術のあ

る事を知らなかつた。

郷田 僕はもふすつかり酔はされてしまつた

女中達、デリアルを元の様に直す、三

人腰を下す、第一第二の女中三人の前

に酒を下ぐ、ラデオ止む。

ラデオ JOBK、長唄××は終りました、

只今の出演團體東京の方々であります

唄 が 杵屋 六右衛門

同 が 杵屋 六太郎

三味線が × × × × × × × ×

同 × × × × × × × ×

大鼓が × × × × ×  
鼓が × × × × ×  
笛が × × × × ×

の諸氏でありました、此れで甚の演藝放送を終りまして、次は三時二十分よりニュースをお報せ致します、JOBK

泉 ラヂオも慥ふ有効に使ふ事になると、月一回は餘り高くはなくなりませう、

人々笑ふ、一番高い入口から、華子が盛装洋装して恰もクインの様な威厳を見せて現れる。  
三人立ち上がる。

松尾 おムクイン。

華子は静々と降りて来る、郷田と泉は華子の手を取つて腰を下ろさせる。

泉 然し貴女にあんな立派な藝術のあることを知りませんでしたよ。

郷田 私の目から瑞喜の涙が止め途もなく流れましたよ。

松尾 クリスマスも、もふ迫まりましたね、此の大藝術家にして大きな嬢ちゃんのためにサンタクロースは果してどんな賞品を持つて、あの煙突から入つて来るでせう。

華子 煙突……(ひどく驚く)

泉 煙突と云へば、近頃よく此の煙突から盗坊が入るそうだね。

華子 まあ怖い。

泉 その盗坊はピストルを持つてゐるそうですよ。

華子 煙突を見入る。

郷田 然、奥さん、決して御心配はいりませんよ、我々がお側に居る以上は此の命を投げ出して、屹度御身邊を守つて上げますよ。

松尾 私には慥ふ見えても、學校で練つた柔道の腕がありますからね、決して御心配はいりませんよ。

華子 宅は女ばかりの手なんですから、どうぞよろしく御願致します。

泉 安心して入らつしやい。

煙突でゴト／＼と音する三人憶病そうに煙突の方を見る、續いて激しい音と共にストープの前に馬越がすつくと立つ、三人は全く狂亂して椅子テーブル華子の體をつき退けて逃げ去る、女中は達は倒れてゐる華子を抱き起してソファに腰を降ろさせる。

華子 (體の痛を押えて) 何て酷い人達なん

だろ。

馬越 (大聲で笑ふ)

華子 (ひどく憤つて) 貴郎は何だつて此んな悪戯をしたんです。

馬越 どうぞお前にも、人間と云ふ動物は、

さアと云ふ場合になると如何にエゴイズムのかたまりであるかが少しは判つたらうお前の足下にひれ伏して、命と死を一緒に捧げると云つてゐる男が此れだ。

華子 貴郎はどこまで私を苦しめたら気が済むんです、え、未練者、早く歸つて下さい。

馬越 まだ過渡期だ。

濱田 老人慌てまわして入つて来る。

濱田 奥様大變なことが出来ました。

華子 だしぬけに驚かさないうで頂戴、年寄りのくせに、何が大變だと云ふの。

濱田 東京から電報で御座います。

華子 何て？そこで讀んで御覽。

濱田 ギンコウハサン

華子 極度の驚きをもつて立ち上がる。

濱田 キウサイノタメ、シザイゼンブトウスルニケツス、オミトノテヲキル、サク

華子 衷心した様に腰を投げる。

馬越 そろ／＼借物を返へす時が来たな。

華子 え、何を云ふんだ。

華子は無中になつて首飾をち切つて馬越に叩きつける、玉は散亂する、馬越冷かに見て

馬越 豫定の通り碧玉も砕けた、お前の體は

もふ俺の腕の側まで戻つて来た。

華子 何を云ふんだ、未練者、死んだつて貴郎の所へなんか戻るもんか。

馬越 お前の體はもふ崖つ端まで来て居ても

まだ後戻をする氣にはなれないんだね、その調子だつたら恐らく、只一つの最後のものまで無くしてしまふかも知れないぞ。

華子 (忽ち頭を抱いて立ち上がる) 私はどうすれば好いんだらう、あゝ氣が狂ひそう

踏跟と上手に入る、濱田老人は後から支えろ様な手つきをしながら續いて入る、五人の女中も續いて去る、馬越は投げる様に腰をおろす、沈思、バルコニーの方から第一の女中が忍びやかに入つて来る、馬越の側に立つ。

第一の女中 馬越さん。

馬越 うむ。

第一の女中 私、心から貴郎に同情するわ。

馬越 その心持が彼の女にあつてくれたら：然し有り難ふ。

第一の女中 どうして華子さんは貴郎を愛さないのですやう。

馬越 夢が醒めないのだ、あの女の夢が永久に覺めない様な氣がして、僕は淋しくなつて来たよ。

第一の女中 本當に世の中は思ふ様にならないのね。

馬越 民ちゃん、お前さんは昔私に愛してくれつて云つた事があつたね、もふ忘れてしまつたらうな。

第一の女中 (頭をふる) 今だつて同じ事だわ。

馬越 僕もあの女にはあんな高をくゝつた様な事は云つて居るが、正直云ふとそれも負惜みか、瘦我腹に過ぎないんだ、愛されない同士の心持はよく判るね。

第一の女中 (すゝり泣く)  
馬越 民ちゃん、お前は僕と一緒に道頓堀へ歸へる氣があるかい。

第一の女中 貴郎が連れて行つてくれるんだつたら何處へでも行くわ。

二人暫く無言、馬越靜かに第一の女中の手を握つて

馬越 民ちゃん一緒に歸へらうよ。

第一の女中 本當？

馬越 さ、一緒に行くらうとして僕はあのサツフォオを捨て、お前のフアオンにならうよ

第一の女中 有り難ふ、有り難ふ。

馬越 さ、行こう。

二人廊下の方へ歩む、上手から華子が駈け出す。

華子 貴郎は何處へ行くんです。

馬越 道頓堀へ歸へるんだ、お前の戻るのもも待ちくたがれたよ、左様なら。

華子 行つちや可ません。

馬越 もふ避いよ。

濱田その他の女中上手に現れる、華子 民ちゃん、お前も一緒に行くのかい。

第一の女中 え、もふ歸へるわ。

華子 (怒り狂つた様に) 人でなし、お前のことを私はどれだけ面倒見たと思ふの、恩知らず、義理知らず、裏切者、その人と一

緒に行けるものなら行つて見るが好い。

馬越 私のメクメツタ、さア行こう。

と二人行こうとする。

華子 あゝ畜生ッ。

と華子は逆上してピストルを取り出して続け打ちに二人を打つ、二人斃れる華子狂亂して屍體の側へ寄り、屍體を見て、

華子 あッ……(ピストルを取り落す)あゝ私は途々この只一つの最後のものまでなくなつてしまつた。

道頓堀マーチよく聞える華子は木像の如く立つてそれを聞く人々華子の體に目を注ぐ

静かにしぼる

### 第三景

元の黒バック、ベビースポットを照す、そこにはウエーター姿の華子が椅子から轉げ落ちて、夢の中に藻掻いて居る、側に馬越が搖り起して居る。

馬越 おい華ちゃん、早く目を醒せよ、おい華ちゃん、華ちゃん……

華子ぼんやり目を開く。

華子 貴郎は生きて居たんだわね。

馬越 何を寢とぼけて居るんだ。

華子犇としがみついて

華子 あゝよかつた……

オーゲストラ(道頓堀マーチ)が手近に聞えて来る。

### 第四景

そのまゝ黒バック上がる、道頓堀の夜景二人が手を取り合つた後姿が逆光線でクツキリと見える、二人はオーゲストラに合して唱ふ。

幕

# 新年おめでたう御座います

御執筆者諸氏並びに愛讀者諸賢の御幸福をおいのり申し上げます。

併せて私共のために御聲援御引立の程偏にお希申上げます。

昭和三年一月一日

雑誌『道頓堀』編集部

鳥江 鍊也  
成山 桂三  
大塚 克三  
住田 朝郎

昭和三年一月一日發行

月刊『道頓堀』第三年第十六輯

誌代は前金でお拂ひを願います。

郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。

御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

定價 金參拾錢 (郵錢五厘)

昭和二年十二月廿八日印刷

昭和三年一月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地

松竹合名社

編輯者 鳥江 鍊也

發行所 大坂市東區船場天王寺町五七八五

印刷者 松本 米藏

大坂市東區船場天王寺町五七八五

印刷所 桃谷印刷株式會社

電話南 三〇六二番

電話南 三〇六二番

大坂市南區久左衛門町八番地

松竹合名社内

發行所 道頓堀編集部

電話南 (二四〇番) 六六六五番

新 版

關西俳優名鑑

(附錄)

道頓堀編輯部編成



# 目次

歌舞伎篇……………(一)  
 新劇篇……………(六)  
 女優篇……………(二)  
 喜劇篇……………(三)

以上いろは順

略	初	現	出	生	本	家	藝
傳	舞	住	生	年	名	名	名
	台	所	地	月	號		
		及		日			
		び					
		電					
		話					

# 歌舞伎篇 (いろは順)

## 市川 鯉十郎

○播磨家○樋口彌三郎○明治二年四月二十一日○東京○大阪西區北堀江二通二ノ四○新町二五五二〇  
 ○大阪道頓堀竹田にて初め六歳出勤、淺尾與六の一座狂言は夏祭出陣七の俣市松をする。松島八千代座にて京都戎座に來り四五年にして大阪に出る始め淺尾與六の門に入  
 川玉太郎と云ふ市川團藏の門に入  
 て市川瀧十郎となる大正九年四月六代目市川鯉十郎を此時の一座は尾上多見藏葉村や嵐璃寛嵐吉三郎市川右團次改名狂言ハシリ太平記嘉平次住家、木の下藤吉多見藏、光秀吉三郎、さつき廣三郎、櫻井新吾喜久太郎、市作右團次、嘉平次鯉十郎

## 市川 莚藏

○高嶋家○竹内嘉藏○明治二十六年九月四日○京都市○京都安井西通○小松町○當私人並増した低脳にて、きをく力うすく、只恩師市

## 市川 市藏



○播磨家○安部楠松○明治三年月日○西區北堀江○南區八幡町一六〇南八百四十番○十歳時佐賀猫で小猫でおどりました戎座○明治廿四年改名時仁右衛門我當先代荒五郎人形芝居の狂言我當淺尾荒五郎寝づくべ小生横山太郎注進運は二役勤ました。

## 市川 箱登羅



川左團治の御恩と此關西へ御同道下された實川延若様の御厚志とは忘れません、二十年餘を一日として修業して来まし斗りが私の略傳でございます。略歴も何も有りません、まだ藝術の玉子でございます、形になれば、先きんじて書かしていただきます。

○二代目成田屋○田村榮吉○慶應三年十月十九日○淺草區田町二丁目○大阪市住吉區天王寺町四九一○明治十二年東京猿若町二丁目市村座に於ては鍋嶋猫騷動の狂言の砌序幕額堂の場にて酒屋の半僧初舞臺○明治二十一年五月市村座で狐忠信の化されを勤め、九代目團十郎に認められ、二代目箱登羅の名跡を許された。同三十二年十月大阪角座で『伊賀越』の林右衛門と奴助平を勤めて名題に昇進す。

## 市川 齋五郎

○高島屋○嵐芳松○元治元年一月日○大阪市南區壘屋町○大阪市南區心齋橋貳丁目一三五○明治四年二の替り狂言に故人尾上多美藏、同じく先代市川右團治一派にて、當時角の芝居にて強盜(龜四郎、貝屋善吉の場で、てつちの役が初舞臺。

## 市川 荒五郎



○四代目三河屋○市川楠三郎○文久元年三月日○大阪北區堂島櫻橋○大阪市南區

## 市川 莚女



○初代高島屋○近藤芳松○明治元年三月五日○伊勢國松坂○明治五年三月先代片岡仁左衛門の門に入り我久松と名乗り、名古屋橋座で布引の太郎吉を勤めたのが初舞臺である○明治八年五月三州豊橋へ澤村田之助が來た時に其門に入り、小田のと改名して『生立會我』の箱玉丸『浦里』の秀ゆかりを勤めた明治二十二年初めて上京し田之助の姉てふ子の養子となり、其の年の春三月歌舞伎座で澤村崙山と改名し『河内山』の千代川、『安達三三』の腰元を勤めた明治二十六年十一月明治座舞臺開きに出勤し、先代左團次の門に入り市川莚女と改名す。

## 市川 右佐治

○高島屋○和田寅太郎○明治十一

年十一月十四日○和歌山市北新地  
下六軒町○市内南區新世界若葉小  
路三號地○明治二十五年大阪の會  
根崎新地の福井座開場の節狂言、  
『梅こよみ』の小間使が初舞臺であ  
る。

市川右團治



○四代目高島  
屋○市川右之  
助○明治十四  
年一月三十日  
○大阪市南區  
笠屋町○大阪

市南區上本町七丁目五二五九○南  
六一六番○明治十九年三月角の芝  
居で伊藤右之助と稱し『先代萩』の  
三股川の場で太鼓持を勤めたのが  
初舞臺である○明治四十二年同中  
座にて『萬絲蜘蛛舞』にて、座頭萬  
市萬鶴太夫實は蜘蛛の精『夢獅子』の  
手古舞お右乃の二役にて、四代目  
右團治を襲名す。

林 長三郎



○成駒家○林  
長三郎○明治  
廿六年七月三  
日○南區笠屋  
町○南區玉屋  
町四三○南一

五七一○明治三十二年一月父一座  
の中座にて中幕に初舞臺劇として  
桃山御殿水責その際父の久吉中村  
梅玉其時代福助の筑阿彌福助の孫  
の捨松に扮し初舞臺に出勤仕り高  
京都顔見世明治三十三年十二月南  
座にて安達原三段目のお君に扮す

林 敏夫



○成駒家○林  
敏夫○大正四  
年五月十四日  
○大阪府下天  
下茶屋○南區  
玉屋町四三○

南一五七一○大正十四年の初春興  
行中座菅原傳授手習門寺子屋の管  
秀才にて初舞臺いたしました。

阪東壽三郎



○豊田屋○阪  
東壽三郎○明  
治十九年十二  
月十日○大阪  
市南區島之内  
○大阪市南區

長堀橋筋一丁目○父は三世阪東壽  
三郎である明治二十四年阪東長次  
郎と名乗つて角座で『紅屋騒動』の  
門附け獅子を勤めたのが初舞臺○

大正元年十一月浪花座の『櫻吹雪』  
に織田信行を勤めて、長次郎改め  
壽三郎と襲名す。

尾上卯三郎



○二代目菅羽  
屋○木下卯三  
郎○萬延元年  
二月二十二日  
○岐阜市久屋  
町○大阪市内

北天下茶屋停留所東入ル○天下茶  
屋一六六○明治六年道頓堀若太夫  
の芝居狂言伏見戦争にて、刀持茶  
坊主が初舞臺である。當時藝名を  
卯多市と稱へしが十七歳の時(明  
治九年)尾上卯三郎を襲名、同十  
七年『加賀騒動』の鳥居又助にて名  
題昇進す。

片岡ひとし



○松島家○片  
岡ひとし○明  
治十三年七月  
七日○南區宗右  
衛門町七○南  
區笠屋町四四

○南三一五五○大正六年十一月中  
座にて鞍馬山暗に争里の子役に  
片岡仁左衛門と父我童の口上に

初舞臺出演す○其後大正十一年東  
京本郷座五月出演東京初御目見得

我久之助



○森光秋○明  
治卅八年十月  
廿五日○大阪  
市西區堀江橋  
通り上通り四  
丁目に生る○

大阪市西區新町通り一丁目三十番  
地○福島會津藩落成式の時七歳に  
て菅原寺小屋の小太郎をつとむ○  
始片岡幸丸と名乗り市川荒五郎片  
岡長太夫等の一座に加入しあらゆ  
る子役をつとむ、十二歳の時中村  
福四の政岡に干松として松島八千  
代座にまねかる(其の時の鶴千代  
君は今松竹キネマのスター林長二  
郎君です)それより十八歳まで同  
座に在り大正十三年一月松竹專屬  
俳優となる、大正十五年八月第一  
回技藝座に出演『猿蓑山道行』の橋  
姫をつとめ褒勳を授かり昭和二年  
一月中座にて名題に昇進、同年四  
月浪花座に於て十代目片岡仁左衛  
門追善のみぎり、片岡仁左衛門師  
片岡我童の口上に、三代目片岡  
我久之助と改め今日に及ぶ。

片岡我童



○松島家○片岡東吉○明治十五年九月九日○東京市淺草區今戸町○南區笠屋町四

四○南三一五五○東京日本橋區久松町久松座日下の明治座三歳にて父我童に手をひかれ團十郎の口上○其後十四歳にて片岡土之助と改名し父我童に大阪にて死別し東上し新當座團十郎の口上又明治座にて五代目菊五郎堀川與次郎にて我おつる役にて口上其後亡父(四一年)十三回忌浪花座にて叔父仁左衛門口上にて一等俳優昇進、四十五年四月我童として東上歌舞伎座初御目見得其後毎年東西往復、

中村鴈治郎



○初代成駒屋○林玉太郎○萬延元年三月六日○大阪市西區新町扇屋○大阪市南區

王屋町七○南二五二○番○父は中村翫雀である。明治六年五月道頓堀戎座で實川雁二郎と名乗り、油

商人「原話」の期間一十八を勤めたのが初舞臺である○明治十一年三月戎座で、實川を中村と改め、故人延若の口上で中村鴈治郎と改名した。

中村扇雀



○京成駒家○林好雄○明治廿五年二月十七日○大阪市南區玉屋町七番地○父鴈治郎宅に生る○京都市下京區河原町三條下ル北車屋町○中八三三番○京南座額見世狂言「忠臣講釋」の矢間重太郎に父鴈治郎が扮し矢間喜内(齋入氏女房)ちよに梅玉氏が扮しホトツ子に扮し五歳にして初舞臺○林好雄にて二三年舞臺につとめ九年の秋中村扇雀と改名す中座で蘭平物狂ひ(梅玉氏)で一子繁藏をつとめ披露す十三歳で年一回角座か浪花座で子供芝居を開演十四歳の春初めて父にはなれ延若氏一座に加入せしをきとて時々我童氏又は右團治氏的一座に加入す十八歳にしていよ、本式に一人旅として京都歌舞伎座に片岡秀郎氏と青年歌舞伎旗擧げ廿三歳まで春秋五年間一先づ父の元に廿三歳

春歸復し現在に至る。

中村霞仙



○末廣家○藤井重兵衛○明治二十六年五月三十日○大阪市南區笠屋町○大阪市西

成區玉出辰巳町一丁目十五○南四六一六○十一歳角座片岡仁左衛門氏(當時我童)一座、日露戰役當時にて召集令と云ふ狂言にて一子伊之助にて初舞臺十歳にて父霞仙に死別し十一歳より俳優生活に入り桃山中學在學中一時廢業學校卒業後更に舞臺の人となり廿三歳まで續く思ふ所あり廿八歳まで又々廿八歳にて舞臺へもどり今日に及ぶ有馬筆の如き生活。

中村福助



○四代目高砂屋○笹木伊之助○明治八年一月十四日○大阪市北ノ新地○大阪市南

區東清水町七貳○南三三三八番○

明治十三年冬大阪中座にて中村治郎と名乗り寺小屋の「小太郎」を勤めたのが初舞臺である○明治四十年十月大阪角座で父の舊名四代目村福助を継ぎ、梅玉の頓兵衛鴈治郎の六歳で、お船を勤めて華々しい藝名披露す。

中村鴈之助



○天野金秋○明治廿九年九月十日○名古屋市中區若松町○大阪市南區三津寺町八

番地○明治四十五年六月東京歌舞伎座にて、無名氏作「流人」一竹若丸(當時市川八百太郎)歌右衛門、仁左衛門、羽左衛門、菊五郎(中車當時八百藏)段四郎、門之助(一座)一歳から四歳頃まではちつとも覚えなした五六歳頃から役者に成りたいと思つてあたらしい、七歳の時、思ひが叶つて、市川中車氏(當時八百藏)の養子となり市川八百太郎と名乗り役者に成る、その頃の私は紅顔の美少年、八歳、九歳と過ぎ十歳の秋、今の師匠中村鴈治郎師の門下となるそれから十年間の春秋を自分で可成り勉強をしたつもり廿歳の時(大正十四

年十一月興行)お情けで準幹部の列に加へて貰ふ、それから現在に至る。

### 中村成太郎



○新駒屋○吉野乾太郎○明治三十三年九月一日○東京  
○大阪市南區墨屋町四六〇

十一歳にして本郷座市川左團次一座にて初舞臺である○十四歳の春中村魁車を師匠として中村太郎と名乗り大阪浪花座に出演し十九歳にて名題となり、二十二歳の十月中座に於て師匠の前名成太郎を襲名す。

### 中村魁車



○新駒家○桂榮太郎○明治九年三月二十一日○大阪市南區鹽町三〇  
大阪市南區宗

右衛門町一八〇南一、三七〇番  
六歳の時戎座小笠原小平次一子  
六歳の時中村鷹治郎師に入門現今の浪花座當時の戎座に故延若故梅

玉汝橋三郎其他大一一座師匠鷹治郎師と出勤小笠原小平次の一子を勤め二十五歳迄で師仕し夫より東京明治座に行き故市川左團次氏の許にて修行なし東京滞在七ヶ年後歸阪師匠中村鷹治郎故中村玉七現延若氏等と中劇場に出勤大正三年一月浪花座にて魁車と改名現今に至る。

### 中村桂枝

○新駒家○松本留吉○明治二十三年七月十八日○大阪市西區阿波座上通り二丁目○大阪浪速區南坂町百五十五番地ノ四○十七歳道頓堀角劇場失念○山村あい師に舞踊の稽古をなし傳手を求めて角劇場に出勤身内より不服出で謹慎中初念やみがたく無断にて旅興行に出で後稻荷文樂座に出勤中兄に連れ戻られしが親戚より不服の人々を説得し、貰ひ尾上卯十郎氏に頼み中村魁車師に入門師仕し後許可を得て修行に出で大正二年七月神戸相生座に師匠にしがひ出勤今日に至る。

### 中村扇

○成駒屋○重光重雄○明治三十九年九月十三日○大阪高津○大阪市西區立賣堀南二ノ二一○新町三七

八一○明治四十一年九月中座にて荒木又右衛門の内「大黒屋長治郎」子役辻うら賣にて登場○師中村鷹治郎の門に入り名を「いひし」と稱したりしは明治四十一年なり其後、名古屋末廣座に於て「扇」あぶぎと改名して中村扇雀の弟子になり(當時扇雀七歳、扇四歳といふ師弟なり)

### 中村福萬壽

○大川實○明治三十九年十月廿三日○南區島ノ内○西樽町八番地○南六七七七番○寺子屋で小学生寺子に出演しました浪花座に於て八歳の時です○大正二年に高砂家門下となる十六歳まで大阪にのみ出演し翌春より巡業に加る廿歳の秋大阪中座に於て準幹部に昇進現在に至る。

### 中村福太郎



○高砂屋○辻義三郎○明治卅一年五月○大阪市南區周防町中橋西へ

入ル大阪市北區東梅田町二六八○明治四十一年高砂家の中村福助門下に入る。

### 中村政治郎



○三代目高砂屋○笹木徳太郎○明治四十三年八月一日○大阪市南區東清水町○大阪市南區東清水町七二〇南三三三八番○大正五年一月浪花座で中村政治郎と名乗り「徳頭娘」の娘おちを勤めたのが初舞臺である。

### 中村章景



○京屋○中島章景○大正七年一月十三日○大阪市西天下茶屋翁町○大阪市西天下

茶屋翁町○天下茶屋七一○大正十一年十月五歳の時初舞臺である○故三代目雀右衛門と共に大阪中座にて近松二百年記念興行天網島に娘お末を勤め以後引つゞき出演す

### 中村成笑

○成駒屋○淺野松太郎○明治十二年二月十二日○大阪市南區鹽町三丁目五五〇○大阪市西區北堀江御池通二丁目二五二〇明治十七年十月

頃市川松太郎と稱し、故人實川八百藏の石井常右衛門の狂言に、秀役を勤めて初舞臺である。其後の浪花座、當時大西の芝居にて狂言「齋藤太郎左衛門」故人中村宗七郎の馬之守、現中村鴈治郎の女房花園に、若君役を貰ひて中村成笑と名乗りたり。

中村成三郎

○成駒 ○植村太三郎 ○明治八年四月一日 ○大阪市南區墨屋町 ○大阪市西區九條通一丁目九六一 ○八歳の時今の浪花座當時大西の芝居にて、先代市川右團治が、お染久松化りの狂言にて、山川屋清兵衛の供でつちにて初舞臺である。以後十九歳まで、道頓堀に勤続十二年計の修業に旅廻りす四十年大阪に歸り浪花座に出演す。

嵐 桶三郎



○伊屋 ○木下喜久太郎 ○明治廿年二月十二日京都市四條芝居前住吉區天王寺町四九三 ○天下茶屋百六十六 ○十七歳の時京都夷谷座にて故嵐芳三郎の弟分として嵐三五郎尾上卯三郎一座の時重井の若葉初舞臺。學校は京都市第二高等小學校四年卒業後醫學に心を向け京都中學二年退學祖母伊勢市と中前茶屋の縁により俳優と成り十八歳の三月尾上卯三郎養嗣子と相成り其後養父に隨ひ出演仕り大正十三年九月一日浪花座にて五代目嵐桶三郎を襲名仕り候

○吉野屋 ○淺尾友吉 ○明治五年 ○京都市内 ○京都市祇園 ○幼き頃より父の傍にて修業後名題昇進と共に關十郎と改名、先頃大吉と襲名す。

淺尾大吉

嵐 巖 笑



○小村屋 ○北村保次郎 ○文久元年五月二十一日 ○京都市細手辨財天町 ○大阪市天下茶屋浪速筋 ○天五九番 ○明治二年の春九歳の時、京都で名高い祇園町四條北の芝居にて初舞臺。十九歳の時はじめて大阪角座で「菅原天神記實録」一座に故市川齋入郎一座の時重井の若葉初舞臺。學校は京都市第二高等小學校四年卒業後醫學に心を向け京都中學二年退學祖母伊勢市と中前茶屋の縁により俳優と成り十八歳の三月尾上卯三郎養嗣子と相成り其後養父に隨ひ出演仕り大正十三年九月一日浪花座にて五代目嵐桶三郎を襲名仕り候

當時の右團治、實川八百藏の一座に入る。

實川延若



○河内屋 ○天星庄右衛門 ○明治十年十二月十一日 ○大阪南區難波新地 ○大阪

天王寺區上本町九丁目三六ノ一 ○南七七八番 ○明治二十年十月浪花座で實川延二郎と名乗り「替我」の河内村庄左衛門菊畑で奴延平を勤めたのが初舞臺である。○大正四年十月浪花座で「恨鯨船」の八郎兵衛を出し狂言に二世實川延若を繼いだ。

實川延郎



○河内家 ○金澤士族今村勝彦 ○明治十一年十二月五日 ○石川縣金澤市小川町 ○大阪西區北堀江御池通一ノ十八 ○十一歳、金澤市東馬場戎座三代目實川勇次郎のお弓にておつるを勤む狂言は阿波鳴門 ○十歳にて三

代目實川勇次郎の門下となり實川勇一郎と名乗りて各地巡業す、かくして師勇次郎儀は明治三十八年六月七日に死去す依て未亡人の實川シナによ、推薦され現在の實川延若の門下となり實川延郎と名乗り今日に及ぶ。○初代實川勇次郎淺尾勇次郎なりしも實川と改名す、實川額十郎の實兄也井筒屋の本家たり。

實川 荊 鴈



○實家 ○錢谷光三 ○明治四十二年七月五日 ○大阪西區北堀江通り一丁目十番地 ○同所 ○新町二七七八 ○大正三年八月與行東京市歌舞妓座にて(乳房)にて師匠實川延二郎一座にて眞覺郎勤む。○祖父は道頓堀仕打にて錢谷清七とて父錢谷清兵衛也祖父について興行男に從事す七歳のとき實川延二郎の門下となり實川延實と名のりて、東京歌舞伎座にて初舞臺をふみ其後經て大正十五年五月奥方中座中村鴈治郎實川延若大一座にて忠臣蔵七ツ目にて鴈治郎より實川荊三代之目之襲名並に名代昇進の披露するもの也其後

今日に至るもの也。趣味讀書、野球、茶道。

### 實川 鷹 藏



○河内家○高野駒吉○明治十九年三月十日○兵庫縣四日○本町三十六番地○西成區玉出新町通二ノ五二○田舎の名も無き芝居小屋(十七歳)狂言伴賀の夜櫻役は(鼠)化猫に使はれる狂い女の女中一名鼠です○私は田舎に生れましたので大名題の俳優さん等につてが無く田舎の小芝居に流れ込み十四歳の時から後見をしてそれからそれとつてを求め三十八九年頃から大阪のはしらの小芝居を働いて居ました明治四十五年一月に今の師匠に附きました○田舎者はつてもませぬいままでも下廻りですとも都會の人達の上に出る事は出来ません。何卒笑はないで下廻りだけの御引立を願ひます。

### 實 川 芦 紅

○若本楠次郎○明治廿五年十二月廿九日生○大阪市南區日本橋二丁

日六十番地○南區日本橋二丁目四五九○故市川齋入一座にて道頓堀中座鎌三代記時政陣家にて小武者を勤む○幼年六代目嵐璃寛の門にて徳猿と名付しが師死去後大正八年八月實川延若の門下に成り浪花座八月狂言牡丹燈籠役お米を勤め芦紅と改名。

### 實川 延 太 郎



○井筒家三代日實川延太郎○上村秀雄○明治三十九年十月一日○京都市河原町四條上ル東八重町○同所○中六三六四番○明治四十三年十二月五の歳時京都兩座演見世興行に亡父五代日實川延三郎と實川秀雄にて近松世話淨瑠璃の太功記の茶屋場にて秀が初役○明治四十四年八月京都明治座に亡父延三郎、出演大正四年一月大阪浪花座中村鶴治郎一座にて延三郎遺子秀雄改め三代日實川延太郎と成駒家及び河内家に口上を述べて貰ふ其後時々大座に加入致せしも定興行にて一座の青年劇にて娘形及び前髪役を勤む。

## 新 劇

### 伊 川 八 郎



○伊川八郎○高橋香○明治廿四年一月廿四日○岐阜縣笠松町○大阪市西區北堀江御通通り一ノ二○廿二歳の暮於神戸大黒座狂言「意氣地」「荒川醫師」を演ず○大正元年酒井政俊氏の門に入り地方巡業、大正三年師と別れ一座を組織し道頓堀辨天座を振り出しに地方巡業に數年を過し、同七年新國劇に加入、同九年中田、小川、小笠原氏等と同座を脱退民衆劇を組織、同十年八月前記三氏等と新國劇に加入、同十二年同座を共座、同十二年栗島氏等と共に國精劇を組織、同十五年同座解散と共に山口俊雄氏等と新潮座を組織し、昭和二年五月同座解散後新國劇に復歸現在に及ぶ。

### 一 條 新 三 郎

○一條新三郎○木原新三郎○明治廿九年三月十日○東京市日本橋○

## 篇 (いろは順)

大阪市南區東區町○初舞臺御旗の風劇にて總出に出演大阪辨天座大正十三年五月

### 伊 川 章 二



○伊川章二○吉川重吉○明治廿六年五月五日○東京市淺草區永住町○大阪住吉區濱口町二三○寶塚中劇場の同志座公演で「同志の人々」の谷○帝劇事務所内に設立されし劇藝術研究會出身後、同志座の創立されるに當り佐々木、加藤兩先生に隨つて参加その後同座解散後新國劇に入り現在に至る。

### 花 山 英 夫

○延澤榮助○明治三十拾貳年十一月三日○滋賀縣愛知郡愛知川町○大阪市西成區新開通一丁目拾番地○京都明治座流るゝ星駒子守お松をつとめしが初舞臺。

新田吉里



○新田吉里  
池内源五郎  
明治廿年三月  
十八日○愛媛  
縣伊豫郡々中

○大阪市南區高津九番丁四番地  
明治四十三年七月伊豫松山市新築  
座にて「改成義國」の青鬼○明治四  
十三年八月上阪し白川廣一間に入  
座し四十四年八月松竹合名社に入  
社秋月小織一座に加入し小織師の  
門下として伎藝指導を受け、四十  
五年六月家事都合上歸國、大正五  
年八月迄實業に従事再び上阪軍事  
教育劇團を組織し全國を巡業し、  
大正十年五月に大阪道頓堀辨天座  
にて開演中の新聲劇に栗島氏紹介  
にて入座して今日に至る。

堀内茂



○堀内茂○堀  
内茂一○明治  
廿二年九月七  
日○大阪市西  
區堀江○大阪  
市港區市岡元

町四丁五番地○拾五歳の時大阪  
市北區堂島座にて「葛蒲咲く家」、  
「狭坂勝山」にて仕出しを勤む○幼

堀正夫



○堀健一郎○  
明治三十七年  
一月十五日○  
名古屋市中區  
上堀川町一番  
地○大阪市秋  
乃茶屋西成區西萩町○十八歳の時  
名古屋の歌舞伎座にて六反池とい  
ふ狂言にて藝者に出演。

小笠原茂夫



○小笠原茂雄  
○明治二十五  
年二月○愛知  
縣額田郡○大  
阪西區南堀江  
通り一丁目十

六香池○二十三歳の正月帝劇に於  
て無名會公演「オセロ」の使者で新  
儀土肥此の無名會に入座次で時時  
代劇協會に轉し喜多村線郎門下と  
なり新派に入り更らに日本座新國  
劇新聲劇を経て今日新潮劇に出演

加藤精一

○加藤精一○明治二十二年四月十  
一日○岡山市○早稻田大學英文科  
出○坪内博士文藝會(明治四十  
二年)舞臺協會創設。(大正二年)  
帝國劇場專屬。新文藝協會創設、  
(大正八年)國性文藝會講師。同志  
劇創設。大阪市南區高津十番町九

高梨倭堂

○高梨倭堂○高梨豹○明治十五年  
九月十五日○東京日本橋區濱町二  
丁目○名古屋市中區日の出町五ノ  
六九○障りの電話中の四九三三

高濱陵太郎

○濱口秀夫○明治二十六年七月  
十一日○三重郡度會郡北濱村字東  
大濱一七番屋敷○大阪市住吉區  
濱口町二五○番地○學生總出の内  
の一人道頓堀、朝日座狂言は失念  
追つて通知す○明治四十一年道頓  
堀朝日座にて俳優となり其の後川  
上座に入座再度松竹社に歸りて大  
正四年秋都築文男師の門に入り、  
今日に至る。

武村新

○桔梗家○内村新太郎○明治廿二  
年四月十七日○東京下谷○大阪

南區笠屋町四十八○廿歲東京新富  
座堀川波の鼓の鎗持奴、瀧の白糸  
の令嬢○十九歲河合武雄門下とな  
り廿八歲東京歌舞伎座にて幹部昇  
進「生さぬ仲」新派大合同劇角座改  
築興行より來阪立役に替る。昭和  
二年十二月十二日死病に會ふ危く  
のがれる。

高橋宮二



○高橋宮二○  
明治廿一年十  
月廿六日○高  
崎市○大阪  
天王寺區上汐  
町二丁目廿六

○東京市、十九歲枚川の流れ川村  
花菱作頭取のかちさん(仕出し)○  
新古典劇を振り出しに南船北馬遅  
々として現在に至る。

辻野良一



○辻野良一○  
中井戸亮太郎  
○明治廿一年  
六月二十一日  
○北海道小樽  
市○大阪市内

成區櫻部リ三丁目八百四十四番地  
○廿歳の春東京淺草常盤座藝術



座の「アルト・ハイデルベルヒ」の學生に田濱○大正五年十一月島村拘月氏等の創立されし演劇學校に入學し同校解散後、松井須磨子氏の藝術座に入座勉強す、同座解散後新聲劇組織當初の連名に加はり三四ヶ月にて退座し新國劇に暫時身を止む、再び考ふる處ありて東京に於て寫眞藝術に熱中し生活の苦闘を續けしが、再び新聲劇に入座して今日に及ぶ。

### 都築 文男

○草廬家○都築七五三太郎○明治拾六年拾二月廿七日○東京市本所區中之郷竹町○神戸市門町二〇三ノ九兵庫一、五六七番○二十歳の時に東京淺草公園常盤座にて、(自轉車お玉)といふ狂言で伏見の職にて賊軍の中に入つて出ました故兒島文衛の門下に入りて都島文男と名して新聲奨勵會(水野好美兒島文衛河合武雄)に入座す、伊井一座に轉じ、兒島師歿後、故村田正雄に師事され都築文男と改各す明治四五五年三月東京本郷座にて幹部に昇進す、爾來關西に籍を移す京都の靜岡福井一座を経て、成美團に加大正十年國活に入りて正劇座を起す、翌年松竹に復歸して都築河原一派を組織す、同十

二年成美團と合同して後十六年八月山出座を起す昭和二年八月都築一派を組織して今日に至る。

### 中田 正造



○中田正造○中須賀正三○明治廿六年一月三日○廣島縣沼隈郡陋町○大阪市西成區櫻通二丁目八四二ノ一○大正三年春四月廿三歳の時、東京帝國劇場にて島村抱月譯「復活」の陪審官の大佐、及ビヂホン爺同中村吉藏氏作「剃刀」の老校長○廣島縣立福山中學校卒業後早稻田大學商科を修業大正三年島村抱月の藝術座に入り同六年東京新富座新國劇組織に参加し、八年春民衆劇團を起し同年夏新聲劇を改造、時東儀鐵笛、深澤恒藏氏等と共に市民座を造りしも新聲劇にて今日に至る。

### 名越 仙左衛門



○名越仙左衛門○名越仙吉○明治十九年七月○福岡市春吉町○大阪府市西成區東萩

町六百四十番地○廿二歳の時東京本郷座に於て佐藤紅線作「やどり木」刑事○市村眞吾明治四十一年高田實門下生となり師と共に各座へ出演明治四十四年より大正四年二月迄名越一座を組織し各地を巡業、高田師死去後は東京松竹合名社專屬となり河合一派に座し新派大合同劇一座へ加入大正七年十月幹部に昇進、東京新富座に於て其披露をなす大正十一年の大阪松竹合名社へ轉籍同十三年一月新聲劇へ加入今日に至る。

### 野澤 英一

○野澤英一郎○明治二十五年三月十三日○東京日本橋區小網町三ノ二九○大阪西區新町北通り一ノ三四○十九歳の時、東京春木町本郷座「高野の義人」の僧に扮す○日本橋區阪本町阪本小學校高等二年修業後、攻玉會中學四年中途にて退學、漁業家を志して樺太海馬島に叔父を便り約一年歸京後河合武雄の門に入り大正二年下阪成美團の一員として現在に及ぶ。

### 山口 俊雄



○山口俊雄○山口俊雄○明治三十年四月十日○熊本縣上益城郡津森村上陳○京都市下鴨宮崎町一六六○十七歳の時、東京有樂座にて家庭劇小公子の靴磨のジツクを、阪東かつみ氏や栗島すみ子と共演○東京有樂座にて栗島すみ子、石河かほる、天野、石川氏や栗島狭衣氏とお伽芝居をやる、其の後新聲劇高田實先生の門下となり、廿歳にして先生は死去されました後、井上正夫先生の門下となり廿三歳にして、井上先生と分れ、唯一人大阪へ来て、福井茂兵衛一派、都築文男一派、新興劇、市民、河原市松一派、新聲劇を経て、今日の新潮劇に至る。

### 山本之彦



○山本之彦○山本仁吉○明治三十年四月二十三日○兵庫縣赤穂郡赤穂町内上假屋二三〇屋敷○大阪府市西成區鶴見橋

通り壹丁目二五二番地○大正七年五月即ち廿二歳の時京都三友劇場に開演中の小堀一座の「ベルス」の催眠術師○大正三年三月私立大陰商業學校卒業後早稻田大學の商科に入り規定の豫科生活を了へ本科二年にして中途退學の已むなきに至る、その年即ち大正六年二月東京御國座(今の松竹座)に出演小堀誠師の弟子となり約二年間新派劇研究その後考ふる所あり新國劇へ大正八年二月入座し總ての都合よりして同座を大正十年正月切り退き同年二月末より新聲劇に入座し今日に及ぶ。

**眞木章**

○牧章○明治二十七年九月一日○大阪○大阪市天王寺區上ノ宮町五十六番地○早稻田文科出身、演劇聯盟同人座を組織して専ら新劇を研究公演して居りまじしが初めて職業俳優として立つたのは大正十五年七月、辨天座で『同志劇』に入したのが皮切りで、目下は『昭生座』の厄介者として角座に於て勉強中です。

**松井保雄**

○松井保雄○加藤喜一郎○明治卅

三年八月廿五日○名古屋市西區米野町○大阪市南區難波新地二番町二七○廿四歳の時、名古屋音羽座に於いて「觀音岩」の村長○廿一歳軍隊に入營、除隊後新派劇團に投じ現在に至る。

**滿喜國春**



○佐藤國治○明治十九年一月五日○東京市深川區○東京深川區猿江裏町十四○東京

京淺草の開盛座で『狂美人』の竹本春梅の弟子娘を廿一歳の時つとめました○初めは故東秀次郎の門下となり各所に出勤し其後大阪に來り松竹合名社に入社し成美團に出勤し其後新進新派の若手一座に入り目下新潮劇一座に出勤す。

**藤本正雄**



○藤本正雄○明治廿六年五月廿五日○長崎市○大阪市西成區鶴見橋通り二ノ二四

九○大正五年?六年の暮、伊賀國名張町鷺座にて片桐七三太夫一座で書生の取次ぎ○長崎商業學校を家事都合上中途、退學、上京す大正三四年頃歐洲戰爭に従事し功勞に依り勳八等旭日章を授けられ、村田正雄師の門に入り舞臺伎藝の指導を受け大正七年に中田正造、伊川八郎、小笠原茂夫、小川隆の諸氏が樂天地に民衆劇組織の際、村田門下を退座して新人諸氏の旗擧に加盟、二ヶ月にして松竹合名社に一同と共に入社今日に至る。

**藤山秋美**

○久保田諒治○明治二十四年○新潟縣○大阪市西區西長堀南通り一ノ五○新町四五六五

**小波若朗**



○高等を卒業し工業學校二年にて日足重亮武田正黨の現代劇に入り新劇オペラと轉々し熊谷武夫一派村尾碌兒一派より國精劇に入り解散と共に新聲劇に入ります。

**荒尾誠一**

○厚地誠○明治二十年二月二十七日○東京市芝區櫻川町十七○大阪市浪速區元町一ノ七四五○二十歳の折本郷座にて伊井喜多村一派の不如歸に山科停車場へ仕出しにて出演す○明治四十一年藤井六輔の門下となり後大阪へ移り都築文男の門下として成美團に加入、大正十二年八月道頓堀角劇場にて幹部披露をなし現今に至る。

**藤岡登喜次**

○藤岡登喜次○明治卅二年四月二十四日○吳市北追町十五ノ二○大阪市粉濱町四八六ノ三○初舞臺十八歳狂言穴倉犯罪壽役娘おせい熊本大和座。

### 小織桂一郎

○西巻行藏○明治二年十二月十日  
 ○新潟縣柏崎○大阪市西成區粉濱町三百九十五番地△南區難波新地一番町二十八番地○南六〇八番○明治十年父母に隨ひ東京へ移住、初等中等教育を卒へて明治二十年六月川上晋二郎先生の率ゐる所謂書生芝居一座に投じ爾來今日迄劇界に終始す。

### 水木一夫

○青木一○明治廿四年三月三日○東京市神田佐柄木町十二番地○大阪市南區大和町四十六〇十五歳にして水野好美の門に入り淺草公園常盤座にて十萬圓と狂言に小間使を初舞臺○本郷東竹町京華中學校三年途中退學水野好美の門に入り師の元を出て諸々北陸信州等を巡業再度東京に歸り露座深川辰巳劇場等小劇場を働き小松商會と云ふ活動の元祖とも云ふ可き撮影所に入り再度舞臺の人となり大正十二年震災後大阪へ來り松竹合名社經營樂天地國精剛へ入座以來同志劇都築一派と大阪松竹草屬俳優となり今日に至る。

### 三嶋健之介



○西園弘純○明治三十五年一月五日○神戸市○大阪市南區高津八間町六番地古川方○二十歳の一月五日神戸市、中央劇場にて、新國劇一座で、日本人の朝鮮人○大正九年一月五日、神戸市中央劇場にて、新國劇一座へ入座、十三年五月新國劇退座、十四年九月同志座旗揚に加入して、昭和二年二月解散昭和二年九月新潮劇に、入座して、現在に至る。

### 進藤英太郎



○眞藤辰五郎○明治卅三年十一月十日○福岡市○大阪府天王寺區北山町二七〇○大

道吉藏方南一三四八番○二十二歳露領ニコライウスケ市ナドロードヌイ、ドームにてロシア人劇團「ナポレオン」の水兵○東京順天中學校卒業の後小樽高等商業入學中途退學商事にたづさわり露領ニコ

ライウスケ市に在る中セスケソより同市に來りし兄弟座と言へる劇團のマネージャーと親しくなり同劇團が「奈翁劇」を出したる際水兵にて舞臺に登りたるが病み就きとなり歸國後も私財を投じて一座を組織したるも失敗に終り再び實業に戻り震後東京芝區柴平町にて食料品店經營の折帶劇事務所内に創立された劇藝術研究会に参加し後同志座創立の際すゝむる人あつて決意なし店舗を賣り拂つて再度劇界に投じ同志座解散後は嵐璃徳氏栗島狭衣氏の國精歌舞伎松本泰輔氏等と新人座梅島昇氏の人情劇と轉々し現在の新潮劇に入る。

### 芝田新



○川上勇之進○明治三十二年六月十二日○北海道函館區青柳町三十番五〇大阪府西

成區玉出新町通り二ノ一〇忘れましたが東京赤坂のローヤル館にて講家連中と素人芝居をしました、○スタートがこんな意氣ですから、勿論師もなければ苦勞も致しません、振り歸れば面白い程簡單で

### 毛利研二

○仙石研二○明治三十二年二月廿日○神戸市橋通四丁目七一〇同○本局四六七番○常キネ脱退後國活、成美團を経て今日に至る。

### 桃木吉之助

○百木吉松○明治八年二月廿六日靜岡縣袋岡市○住吉區天王寺町一七四六〇二十一歳の時靜岡縣遠州見附町磐田座に於て軍法會議警公判にて金瓶樓雇人喜助○靜岡中學を半途にして退學し靜岡民友新聞社の校正係に入り山口定雄一座の明治裁判辯護の譽を見て俳優に志し武智元良一座に入りしが出發點にて其後福井一座に入り明治卅年上京して大同團佐藤茂三一座に加入し其間故の川上晋二郎氏に聘せられ座員となる同氏死去後四十二年改めて故の高田實氏に師事し其間帝キネに入りて三年越えて大正七年再び松竹草屬となりて今日に至る。

### 桃谷美智夫

○中村樞○明治三十三年五月十九日○島根縣濱田町原井○大阪西成區旭北通一ノ二二七〇京都市新京

極京都座十九歳の時初舞臺葉櫻日記女給續出

森田 肇



○森田光雄  
明治廿二年七月七日東京市本所練町○大阪府中河内郡布施町東足代

六五五ノ一〇十九歳の時、東京神田劇場に於いて、「潮」の學生、柴田善太郎先生に師事し新派劇團を轉々として大衆劇に入り新潮座に轉じ今度が新潮劇と、改稱の現在に至る。

鈴木 默堂



○鈴木清隆  
明治十七野一月廿日東京市麹町區茶田町二ノ五五〇大

見橋通二ノ二四八〇二三歳の時東京日本橋區中洲眞砂座にて河合武雄師の門に入り大谷馬十、嵐鷗宗一座の「戀女房」染分手綱の腰元を勤む〇東京神田錦城中學を了りて東京法學院(現中央大學)に入り

家庭上の都合にて中途退學廿三歳にして河合武雄の門に入りあらゆる先輩の指導を受く殊に高田實、

女 優

濱地 良子



○濱地良子  
明治廿六年六月三十日〇東京淺草〇大阪市天王寺區北山町廿七大道

吉藏方〇南一三四八番〇十八歳東京有樂座童話劇「小鳥の村」の娘大正十年加藤精一師の門に入り國精劇に三年間修業その間畑中蘆波氏の新劇協會の「櫻の園」にツリヤに扮し帝國ホテル演藝場に出演その後同志座創立の際入座し同座解散の後新人座、人情劇を互り現在の新潮劇に入る。

和歌浦 糸子



○土橋小糸  
明治廿八年十月十日〇和歌山市〇大阪市西成區東血池町八一七〇大

藤澤淺二郎、伊井蓉峰三氏に薫陶を厚ふす、爾來、松竹合名會社専屬幹部俳優として今日に至る。

篇 (いろは順)

正二年五月、於浪花座「妹香山」、「里の女」、「良妻堅母」夫人秀子〇私立ウイイルミナ高等女學校中途退學後關西外國語學校卒業し、松竹合名社第一次女優募集に應じ第一期卒業生として富士野葛枝氏等と共に松竹專屋の諸劇團に出演後、松竹合名社諒解の下に一座を組織せしこともありて、松竹合名社に歸參後は國精劇より現在に及ぶ。

米津 左喜子

○米津ケン〇明治廿三年六月十五日〇三河國碧海郡明治村字米津〇浪速區惠美須町東方〇豊橋の東雲時にて九歳にて初舞臺後十二歳の時小供歌舞伎の店頭にて巡業す十七歳の時に先代市川左團次の門に入る東京神田三崎座で女歌舞伎に出演其本郷座で村田正夫氏と共に演又、井上正夫氏と一座を組む後分別して松竹角座に出演

吉 積 和 子



○岡田勝子  
明治廿三年二月十三日〇松山市木屋町〇大阪市浪速區新川二丁目〇

廿歳の時當地樂天地に於いて新派劇の藝者笑香〇佐藤紅緑先生の民衆劇に初舞臺を踏み、解散後日本座に入座、その後新聲劇に轉じ病氣の爲め約三年間休演全快後國精劇に加盟、同座解散後、新潮座に入り、新潮劇と改稱の現在に至る。

吉 野 靜 江



○吉村きむ子  
明治二十五年十二月九日生〇東京市芝區烏森町五〇大阪市西成區

西四條一丁目四五四〇大正四年一月伊庭孝の新劇社第二回公演シヨウの馬盗人を有樂園にて演 た節第三の娘が妾で初舞臺でした〇藤澤淺次郎先生の御紹介にて新劇社第二回公演より女優生活の志を達しぬ、それより藝術座のカチウシヤアの東京座公演より同座へ加入

し同人として大正七年八月滿州巡業を了して歸京せしが病き辭養の爲め退座し翌年八年九月初期の新聲劇へ加入し爾後半歳在阪せしが都合にて退き日向向島派中山歌子酒井米子森英二郎氏等の三部に入り攝影に従事したるが彼の大地震に來阪して宮島啓天石垣彌三郎氏等と共に新劇運動に白井泰代も加りオランダ座旗上げ以來國精劇の組織から御厄介になり兎も角今日に及び居り候何事もなし得ず、殘愧に堪へません。よろしく、カット願ひます。

### 中村仲次

○岡田きん○明治二年三月八日○岡崎市肴町○神戸市元町四丁目八三ノ三○岡崎市寶來座にて十三歳の時『堀川夜討』藤太太『義士銘々傳』德利勘兵衛○明治十年、中村翫雀氏に従ひて一座し、その後一座を組織して、從姉に當る中村仲吉の門下となり仲次と名乗り、東京を中心に名古屋等各地を巡業、京都夷座などに出演せしこともありて、その間多くの女歌舞伎俳優と識る、大正十四年九月招かれて新聲劇に入り今日に至る。

### 富士野篤枝



○荒井タマ子  
○明治廿九年三月三日○横濱市○大阪市南区三ツ井戸町廿三番地

南六〇八七〇大正二年五月於浪花座松竹合名社女優養成所試演會の際、食滿南北氏作『手綱笠』のお吉大森痴雪氏作『妹香山』の定香、同『良妻賢母』のお艶○横濱高等女學校卒業後松竹合名社第一次女優募集に應じ第一期卒業生として松竹專島の諸劇團に出演今日に及ぶ。

### 福岡君子



○福岡睦榮  
○明治四十年二月二十六日○東京本郷區千駄木町○大阪府南區高津一

番町五十二〇十四歳、大阪辨天座栗島狹衣作『龜甲組』の半玉千代葉○佛英和女學校中途退學十四歳三好榮子に師事し、新聲劇に入る、松竹下加茂キネマ、帝キネ、新潮座を経て、新潮劇組織に参加現在に及びます。

### 小松孝子



○池内はつ子  
○明治廿六年月日○東京市日本橋區○大阪市天王寺區上ノ宮町二六

○友成方○廿二歳の時大阪辨天座に於いて『阪本龍馬』の大原女○震災後新聲劇第一回公演(辨天座)へ加入し、一月程で止めその後國精劇が大眾劇となり解散までいきましたが、解散と共にまた新聲劇へ行き、去る八月休演中新潮劇組織につきこちらへ廻はされました。

### 金門麗子



○中島千代子  
○明治廿三年七月廿八日○廣島縣廣島市中島本町○大阪府西成區西

萩町○廿四歳の時、東京赤阪演技座に於いて『天誅組』の若き妻お雪○倉橋先生の文化村で初めて女優としての行程を踏みました、そしてその分身の民衆劇(後に第二新國劇と改稱した)で澤田正二郎先生や倉橋先生の董陶をうけ、その

後同志劇に入座同座解散後は新潮座に席を置き、新潮劇と改稱の現在まで續いて居ます。

### 三好榮子



○森田春子  
○明治二十七年四月八日○東京市神田區小川町一番地  
○神戸市野野町

三丁目八番屋敷○葺合一九八〇廿三歳の時十二月大阪中座で鶴村抱月先生の『清盛と佛御前』の祇王をいたしました。○跡見女學校卒業後藝術座に入り松井須磨子に師事す、後座國劇に加入、現代劇、新聲劇、寶塚國民座等を経て新潮劇組織に参加し現在に及ぶ。

### 守住菊子



○垣原菊子  
○明治廿三年十一月九日○東京市淺草區花川戸町○兵庫縣川邊郡寶塚

町○寶塚二二九〇十八歳の時文士劇で東京座に於て『辨慶上使』の娘信夫をつとめました○故市川九女

八の養女として人籍、爾後九女八に從ひて各劇場に出演、九女八没後、新派劇に入り帝キネに專屬關西に移住す、大正十三年八月松竹合名社の專屬となりて現在に及ぶ

### 桃谷美智子

○齋藤富士子 ○明治三十四年十二月十八日生 ○東京市牛込區余ヶ町  
○大阪市南區戎橋筋芝居裏東入ルキヤフエモモタニ内 ○南一、二三

## 喜劇

### 曾我廻家一満



○佐々木種次  
郎 ○明治九年十一月二十八日 ○大阪市西區新町 ○大阪市南區東區南區  
十七 ○十歳の時新町高嶋座にて中村翔一郎一座、菅原四段目の手習子を勤めました ○明治二十七年今枝恒吉一座の新派劇に加入す。明治三十三年舊仁口加春亭小勢の門に入り半勢と名乗る明治三十五年曾我廻家五郎十郎氏等と共に喜劇組織の時に加名す、一時退座の後

## 篇

(いろは順)

再び曾我廻家五郎一座に加入し今日に及ぶ。

### 曾我廻家一郎



○上田善治郎  
○明治十九年二月十八日 ○奈良市 ○大阪市南區高津丸番丁ノ七 ○二十歳の時名古屋市外蔵名不明「七化お新」の惣出巡査勤 ○私の生家は麻布商をして居りました。京都商業學校二年にて中途退學十九歳の東京常盤で新派劇見習に這入り

ましたが間もなく大阪に參り熱海瓜舟門下となり大島正憲と名乗りて各地を巡りましたが明治四十四年九月京都新京極明治座より曾我廻家へ入座しました。

### 曾我廻家時右衛門



○村井彦三郎  
明治十九年八月八日 ○東區平野町二丁目十九番地 ○南區八幡町十六

番地 ○十六歳第五回博覽會餘興舞臺にて岩崎流の日貫五斗を踊る ○根は北濱育ちの株屋の小僧。幼い頃より持つて生れた芝居好き。繪看板に氣を取られ主家の要事を忘れること數度。一日主人聘して口汝芝居好きや。答へて曰飯より好きと。主人重ねて曰、汝役者になれ。斯くて多年の宿望を達し、喜劇界に身を投じ、座長となりて田舎を巡業すること七卷半。タワラトウタならぬ曾我廻家五郎師に射止められ、槍のベツトに田舎臭き傷を癒やしつゝ今日に及ぶ。

### 曾我廻家時和



○小松重次郎  
○明治三十二年十二月十日  
名古屋市西區櫻通り二丁目八五二 ○明

治三十八年十一月名古屋大須境内寶生座にて酒屋のおつるに扮し出演故中村雀右衛門の門に入り中村小雀と名乗り片岡長太夫に從ひ各地巡業後に中村扇雀等の青年歌舞伎一座に加はり道頓堀各座出演大正十年十月五郎一座に加入し曾我家時和と改め現在に至る。

### 曾我の家致雄



○江口種造 ○明治五年五月廿四日 ○大阪西區靱北通三丁目三番地  
○大阪府西區江戸堀上通一ノ二六 ○十八歳道頓堀浪花角藤定憲一座雪中梅の拜丁 ○十八歳迄東雲新聞の文字拾ひ、同年角藤氏新派劇當時壯士芝居、中江篤介、栗原亮一先生顧問となり組織す、其時角藤先生の書生として入歳す以後三十九年迄

同座に居る同年退座同四十五年迄一座組織なし地方巡業す當時藝名江藤種亮と名乗る。大正六年曾我の家五郎先生の門人となりて今日及び。

### 曾我廻家蝶六

○中村熊吉○明治十一年十二月十二日○大阪市○大阪市南區北炭屋町三三〇○南三七三一〇十八歳の或る新派劇團にて出演す時明治三十七年一月、曾我の家五郎十郎一座に入座し今日に及ぶ。

### 曾我廻家大磯



○藤田稻太○明治二十三年一月十八日○名古屋市西區澤井町○大阪市西區西長堀北通り一ノ一四○赤坊の時人に抱かれて初舞臺をふんださうですが記憶ありません其後名古屋笑福座にて武知元真一座で小夜嵐の小役です○父が九歳迄一座の奥役をして居る關係で武知迄同一座の小役を勤め同年入學、在學中伊井先生、福井先生一座又は先代左團次さん、成太郎さん等一座にも出演又小

芝居にも時々出勤せり十三歳の時東京五代目市川團三郎師に入門柏樹郎と名乗る……十四十五の二ヶ年は大谷友子(今の米津左喜子)さんと子供芝居の一座にて名古屋地方、東京市村座上州、奥州、北海道巡業、日露戦争の爲一座解散、團三郎師の元にかへる、二十歳の五月當曾我の家に入座今日に至る

### 曾我廻家林蝶



○岩脇林三郎○明治三十年八月二十六歳○東京市淺草區西仲町五○京都市大黒町通り柿町下ル○十六歳の時横濱喜樂座に於いて曾我の家兄弟一派に出演す今日に及び。

### 澁谷一雄

○澁谷一雄明治三十九年六月五日○京都祇園十六番露次大阪道頓堀岡島〇三一六。但シ自分デハナイ○東京久松町明治座にて八歳の時『美術家』にて伴清吉と言へる役○私の親父が喜劇俳優であつたためか八歳の時遂に俳優にさせられてしまつた後十一歳の時親父が死没

し十七歳の秋樂天會解散の運命に遭遇してから當志賀の家に入座今日に及び詩賀里人のペンネームで劇作を續けて居ります所謂二星のわらじをはいて居ります。

### 曾我廻家太郎

○平戸源造明治八年四月十八日○大阪道頓堀○京都市下京區佛具屋町花屋町上ル○明治二十六年一月一日大阪道頓堀中座にて大久保武藏で旗本某と切狂言明治の秀吉の夢の場の官女○大阪道頓堀に生れ親の貸座敷なるが故舞臺生活者と心安くなり後年にして、明治二十九道頓堀朝日座で故人中村歌六の門人となり中村磨五郎と改名明治四十三年道頓堀中座にて曾我廻家五郎の門人となり曾我廻家太郎と改め今日に至る。

### 志賀廻家淡海

○田邊耕治○明治十六年十二月十三日○滋賀縣滋賀郡堅田町浮御堂前○京都市三條寺町西入○中六四七二番○十四歳の秋郷里にて素人芝居にて『馬方三吉』の俗に言ふいぢやと姫に出演せしを初舞臺其後明治三十八年新派堅國團を自分が主任にて組織し其後感ずる處有り

### 志賀廻家

○藤井保一○明治二十六年十一月一日○京都府下伏見○同所○十三歳の時九州門司凱旋座にて『蝶十鳥曾我』の少將を勤めました○中年にして新派俳優熱海孤舟氏の門に七年前喜劇の近代的思想に共鳴し喜劇界に身を投じ、四年前志賀廻家に入座遂に今日に及びました簡略ですがお答へまでに。

### 曾我廻家なたね



○石村芳太郎○大正四年十一月十五日○京都市千本生ル○京都市鞍馬口智恵光院西入上ル○七歳の時、大阪中座に於て、春の猿曳にて、大和屋伴太郎吉と猿の二役を勤む○大正十一年十二月曾我廻家五郎の門に入り今日に至る。

# 鶴家團枝

○田村彌太郎○明治十六年七月二十一日○京都松原通大黒町○大阪住吉區天下茶屋聖天阪下○六〇六(申込中)○二十五歳の時大阪明樂廻に於て鶴家團十郎一派「安達ヶ原」三段目仕丁をいたしました。○親父は簪屋でありましたが大阪南久寶寺町小間物屋今西善藏方に奉公十八歳迄して居りました。其後あんまりバンドせんで内へかへつてあそびで居ります内に芝居がすきで俳優になりたいと思ひましたが顔が「すい」ので鶴家團五郎の門に入り其後樂天會の創立に加里十數年後大正十一年九月末解散の厄に逢ひ其後樂天會を組織せしも關東震災の爲めにやむなく中止し當志賀廻家に入座今日にいたつたのであります。

# 志賀廻家源五郎

○中村徳三郎○明治廿三年九月廿五日○大阪市北區堂島濱通一○大津市真町○三七七四○私が二〇〇の年に志賀廻家で神戸三の宮歌舞伎座で浮世床の若旦那清三郎二〇〇の年に淡海師に師事しましてそれから間もなく九州地方に参りました。他人の花は奇麗と言ふ通り他所に

行きたくなくなりません。他所に勉強に行きましたのも数度可なり働いた積りて歸つて來ましたが時勢は進むもので歸つて來た時驚きましたのは後の鳥が先づなつてゐました。

# 曾我廻家五郎



○和田久一○明治十年九月六日○泉州堺市宿院町○大阪市北區堂島裏一ノ二六〇

北五〇二九番○明治二十五年四月  
中村珊瑚郎の門に入り大阪浪花座  
へ中村珊之助と名を貰ひ「小笠原」の供廻りに出たのが初舞臺である  
○明治廿七年十一月大阪北の新天地福井座で旗上げをした。其時「勸進帳」の辨慶を勤めた。此時現名の曾我廻家五郎と改名した。

# 曾我廻家小次郎



○村上富次○明治十七年十月二十日○山口縣下關市赤岸町二丁目○大阪住吉區

上住吉町二二二〇二十歳の時東京淺草常盤座にて戰爭劇義和團の支那人の役を勤めました。○山口縣長府中學四學年修業の後福岡縣直方三斐炭坑山部第二坑に約一年勤め其後大阪商船株式會社へ入社、約一年半にて退社。其後東京新派水野好平の門に入り俳優になる。大正元年より曾我廻家五郎十郎に師事して喜劇俳優となり現在に至る。

# 曾我廻家辨天



○市川貞次○明治二十八年十一月三日○東京神田○京都市祇園花見小路青柳小路

○中四八四六番○當時の牛込演藝館にて藤澤俳優學校試演の際イブセンのヘツダカブラー○曉星中學卒業後藤澤俳優に入學俳優生活に入る卒業後一時土曜劇場に關係したが或助機から新劇運動に冷かであつた東都を捨て、關西に下り實川延若の門に投じ實川延之亟の名で歌舞伎劇の修業に數年間を費した大正三年東京歌舞伎座にて助六出演の際、師延若(白酒)と共に出演名組に昇進、其後新派劇に入

り若柳貞二郎角座にて改名披露更に喜劇界に移り現在に至る。

# 曾我廻家三郎



○後藤庫太郎○明治三十一年十月三十一日○靜岡縣濱松市板屋町○京都市木屋町松原

下ル四三八〇六歳の時、濱松市子の日座に於いて菅原四段目手習子を相勤む拾四歳の時阪東袋之助の門に入り阪東玉喜知と名乗りその後二十二歳にして曾我廻家五郎一座に加入し今日に及ぶ。

# 戸田三樂

○飛鳥三徳○明治十七年一月三日○泉州堺市○堺市市之町東三ノ二二地○堺一五七二番○明治二十三年七歳の春三樹源五郎一座の小役として和歌山榎橋大黒座にて千本櫻のすしや六介君を勤む明治二十四年より義務教育の都合上劇界を離れ明治三十四年堺市第二中學卒業一年間實業に就き明治三十五年再び劇界に入り文士劇を組織し各地巡業後川上喜二郎氏の大阪北濱



帝國座俳優養生所に研究生として入座明治四十二年喜劇研究の爲め堀江明樂座出演大和家寶樂一座に加入後大正三年樂大會に加入約十年間勤続同座解散後今日に及ぶ。

### 曾我廻家龜鶴

○竹内梅吉○明治十六年十二月三日○横濱市○京都市外稻荷上横細八〇十歳の時横濱爲座にて板額の子供武者の物出○市川九藏の門下にて市川芳次郎と云ひしが大正元年喜劇を志ざし曾我廻家五郎一座へ加入當時時次郎と云ひしが後龜鶴と改名大正八年淡海一座へ加入今日に至る。

### 曾我廻家紫蝶

○稻葉正○明治二十五年五月十二日○宇都宮市○名古屋市南區八熊町○十六歳の時東京市市川眞砂座に於て山崎長之助一座の五寸釘寅吉にて質屋の小僧を勤む十八歳の時、角藤憲一座木村荷憲に師事す、二十歳の時、川上晋次郎追善興行より加入し、その後地方巡業の際退座大正十二年曾我廻家五郎一座に加入今日に至る。

### 曾我廻家笑齋



○榎本長次郎 ○明治十一年五月二十七日 ○大阪市東區淡路町○大阪府西成區花園町三七六〇二十八歳の時神戸大黒座にて喜劇女武者の奴可内を勤めました○明治三十八年八月、曾我廻家五郎の門に入り今日に至る。

### 志賀廻家白石

○佐藤正夫○明治十七年七月二十日○大阪市東區松屋町○京都市御幸町四條上ル○廿四歳の時大阪北濱帝國座のマチネーにお伽俱樂部劇、龍宮の使者に龍宮の臣之れでも青春時代を順當にさへ行けば例令私立出乍らも學士位は名乗つて人生不惑を僥に今日老後扶養の恩給位には有り郡いて居る筈を持つたが病の演藝道樂、高尾風塵、久松一聲、其他大阪日報社同人等の大阪お伽俱樂部に参加したのが病み付きでお拵への旅役者、明治四十三年喜劇的一座を組織し、中國筋を流れ歩いたが二年そこそこに喰ひ詰め四十五年天満座へ来た

### 曾我の家十五



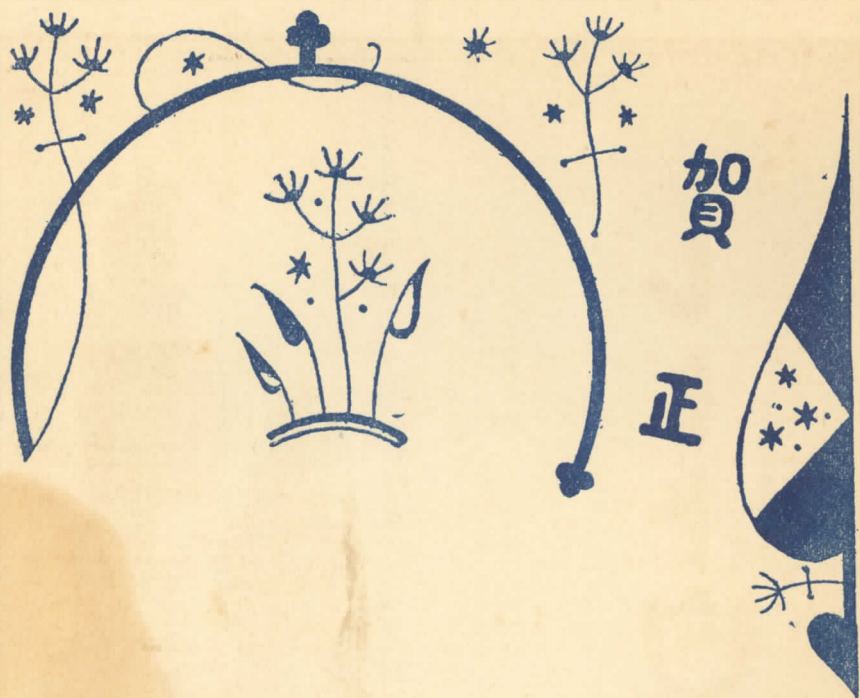
○西海文吾明 治廿四年十二月十八日○神戸市仲町六丁目六六〇大阪府西成區櫻通り二ノ八五二〇神戸三の宮歌舞伎治にて十六歳の時喜劇ハッピビリの下女お惣を勤める○湊川分教場在中二十歳がすぎて退學し日鏡亭大門亭へ入門したが舞臺へ出られぬので十六歳の時當土廻家喜劇へ入座十七に座長察士の弟子になり富士師より十郎師へつかへとす、められ曾我の家の門に入り文福となり十郎師追善興行にて五郎師より十五壽名されて一座へ入座す。

### 曾我廻家十太郎

○榎田頼満○明治十九年二月十六日○香川県高松市西新通町○大阪府此花區九條下通り一丁目〇十九歳の時大阪明治座新派石上一郎一座「血の涙」三浦上等兵○父は食鹽製造業を営む七歳の時大阪に來り十九歳學校を卒業すると同時に親の商賣を好まず俳優を希望して新派石上一郎一派の門下となり二十六歳の時獨立一派を組織して巡業大正四年一座を解散し私は喜劇俳優を希望し曾我廻家十郎の弟子となり十太郎と名を改め大正十年師匠病氣休演なせるために同時に志賀廻家淡海一派に入座して今日に至りました。

### 志賀廻家辨慶

○芹澤芳太郎○明治二十六年七月九日○靜岡縣清水市江尻町○京都市三條寺町○電話中六四七二〇盛岡盛岡劇場本家挨拶遣ひ「頭梁の弟子」○大正元年岩手縣の盛岡で淡海一座にかり淡海の門下となり地方巡業すること十五年間現在に至りました。



賀  
正

“劇”を見る前に

鈴木泉三郎著

『戯曲全集』

“演劇”の舞臺印象は

『クラク』新年特別號

“芝居”の教科書

小山内薫著

『芝居入門』

社 ト ラ ブ

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可  
昭和二年十二月二十八日印刷  
昭和三年一月一日發行

若く明るい顔になる

# リート白粉



平尾替平商店 東京大坂

金參拾錢 (郵錢五厘稅)

3.5.25.500